
オカルト科学の擬天使祿(ぎてんしろく)

八紘新音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オカルト科学の擬天使ぎてんしやく祿

【Nコード】

N1701W

【作者名】

八紘新音

【あらすじ】

都会に出てきて一人暮らしを始める。新たな生活に誰もが期待する新たな出会い。だが現実は悲しい。そんな都合のいい出会いはあるはずもない。と、思っていたら玄関の扉を開けてびっくり！見知らぬ女の子が一糸まとわぬ姿で……というのは妄想。これはいつものイタイ妄想だ。と、思ったら、ドアを開けてパチリ、少女がコチラを覗いている。現実リアルだった。どうりでリアルなわけだ。

誰だこいつ？少女は言う。私はヒロイン系美少女です！そして記憶喪失です。何でもしますから一晩止めて下さい！

やった！これで彼女いない歴イコール年齢を脱出できる！！童
卒業だ！なんて思ったら。ロリコン犯罪者として死神みたいなゴス
ロリ少女に追われることに！！

っておいッ！本編の内容と違うだろうが！

いいえ、間違いではありません……。

たぶん、セカイ系のお話です。

序章（前書き）

人生で初めて長編小説を完結させました。一応ライトノベルを意識して書きました。SF、ファンタジー系のフィクションも初挑戦（というか話らしい話を書いたのは初めて）なのですが、少しでもお付き合いいただければ幸いです。

分量は文庫サイズ300ページくらいを目安に描いております。完結はしておりますので中途半端にはなりません。最後まで必ず投稿致します。

なにぶん初心者の為いろいろ不手際がございますがご容赦お願いいたします。

P・S序章から第四章までほとんど（改）マーク付きですが、これは主に誤字修正と不要シーンの削除の結果によるものです。基本的には初投稿の段階と話の内容は変わりません。

駄文ですが、少しでもこの「つまらない妄想」にお付き合いいただければ幸いです。よろしくお願い致します。

序章

六月末の太陽の照りつける黒いアスファルトの細い道を、重い幅三十cm、六十cm四方のスーツケース、肩からシヨルダーバッグを、スーツケースと反対の左手にはスーパードで買った食品や飲料などがどっさりと入った白い袋を抱えながら、息を切らしながらぼとぼと歩いていった。

細い一方通行の住宅街で立ち止まる。この一角にたった通りから奥に遅長く伸びたベージュ色の少し古いマンションが、これからの住まいだ。閑静な住宅街というやや語弊がある。特にうるさくてごちゃごちゃしているわけではないが、ところどころ昭和の匂い漂う青い瓦屋根の文化住宅、真新しい壁の一軒家が混在する、そんな場所だった。

チリンチリン、と自転車のベルが鳴る。

振り向くとそこにはサラリ長い髪を後ろでまとめた、色白の目鼻立ちのはっきりとしたポニーテールのお姉さんがいた。

「こんにちは」

お姉さんは自転車を止めて笑顔で言う。

「ども…」

ボサボサ頭を適当にワックスで整えた、いたんだ茶髪の、身長一七五センチメートル、やや細身の、格好もTシャツにGパンという、パツと見どこにでもいるようなどこにでもいるような、これと違って特徴もない若者、墨江紫音は少々照れくさそうに返答する。

「引越しですか？」

「ええ、五 五号室に越してきた。墨江紫音十八、じゃなかった二十二歳独身です！」

「それ、荷物ですか？大変ですね。よかったらお手伝いしますよ」
お姉さんはにこやかに微笑んでスーツケースを携える手に、やさ

しく、白く美しく、整った、ピアニストのような美しい指をした細い手を、そつと差し出す。

「いええ、大丈夫ですから」と、やや慌てながら、まんざらでもなさそうな笑を浮かべ後頭部を掻く墨江の手に、お姉さんの優しい手が触れる

「……………」

二人の、目と目が見つめ合う。そして沈黙……………。
それはまさに、恋の予感。

- というのは全部妄想 -

実際は、力尽きて一人マンションの前で立ち尽くしているだけであつた。

墨江は目を瞑る。顔の前に差し出した右手の中に銀色の穴の開いたコインを握り締め、口元に不敵な笑みを浮かべる。

「フフツツ！そんな素敵出会いが、これから起こったりする！」
YesかNoかツ！」

コインがひらり中を舞う。太陽の光を反射しながらくるくると空を舞う。宙を舞ったコインが放物線を描きながら落ちてくる。それを手の甲でキャッチした。

「コインは告げた。”裏”そしてNoと。」

「はっ、やつぱりな……………」

墨江はかなり落胆した。

「フーツ」とやや長いため息をついて、入口段差を越えるよう、スリッケースを抱え直す。

「エレベーターねえんだこのマンション……………」

新居は最上階である五階だった。息を切らして、汗だくになりながら階段を登る。細いビニール紐で抱えるにはやや重量オーバーで

事に外れていた。

ここで墨江の期待（ではなく妄想）はほぼすべて潰えた。

まず、『美人で年上の未亡人の大家さん』だが実際は『気さくなご婦人』だった。続いて、『通勤途中で痴漢にあったOLのお姉さんを助けてフラグが立つ』そんな場面には遭遇しなかったし、あったとしても助ける度胸はない。

その他、『迷子になっているおばあさんを助けたら美人の孫がお礼をしにきた』とか、『就職先の女性上司（男ばかりの営業職なのでナシ）』とか色々妄想したが、

（そんな現実^{リアル}起きるはずがない）

「クソオオオオツ！ 出会いがほしい！！彼女ほしい！嫁さんほしい
~~~~~！」

玄関の前で人目を気にすることなく叫ぶ（ほどの度胸はさすがにないので心のなかで）

「こうなったら」

墨江は目を瞑る。右手に銀色の穴の炊いたコインを握り締め、親指にスライドさせる。  
そしてイメージする。

- ・空から女の子が降ってくる。
- ・机の中から未来少女が現れる。
- ・ちよつと年上の姉さんがスポーツカーで登場。「乗って」と強引に手を引っ張る。

「何でもいい！彼女よ、嫁よ！俺の現実に飛び込んで来い！！」

コインが宙を舞う。ひらり、ひらり、くるくる回転しながら中を舞う。ぐっと右手を握り締め、左手を振り上げる。いざ、と目を開ける。パチンと右手の甲に左手がぶつかる。



ゆっくり手をどけるとそこには銀色に光る、穴の開いたコインに  
「50円」と著れていた。

「表ええええっ!」  
全身を稲妻のように駆け巡る、衝動。表が出た!だが喜びもつか  
の間。

「んなわけねえよ」  
改めて認識して虚しくなった。右手光に乗ったコインを左手でつ  
まむ。

カラン。コインが無かった。  
「えっ!」

阿波踊りのように空中を何度もつかむも虚しく、コインは宙を舞  
う。キラキラ輝きながら、遙か彼方。マンションの廊下の手すりを  
超えて、

「マンションのすぐそば、川の水の中へ……」

ため息を突きながら、ポケットに手をツツコミ、鍵を取り出す。  
やや錆びついて入りにくい鍵穴に鍵を挿し込むと、ドアノブをくる  
りまわす。

「て、あれ爺ちゃんのかたみのプレミアム度満点昭和六十四年五十  
円玉じゃねえか」

(ま、いっか)  
肩を落として、うつむきながら重いスーツケースを抱え、玄関の  
扉を開ける。

「ひゃっ!」  
自分の声ではない。はっとして声足元から目線をあげると、そこ  
にいたのは、

女の子!?

腰くらいまで長く伸びたつややかな黒髪、色白の肌、あどけない十五歳くらいの女の子が、一糸まとわぬ姿で、バスルーム兼トイレ（玄関入ってすぐ右）の扉の前に、パチリとした二重まぶたを開けて、驚きの表情で見つめている。

「はいッ？」

「ふあうッ！」

女の子は、顔を真っ赤にし、慌て背を向けて屈んだ。

気まづい沈黙が数秒……。

「すッ、すみませんでした！！！！！」と言いつ切る前に、百八十度回転、振り向くこともなく扉をボタンと閉める！スニーカーもビニール袋も、シヨルダーバッグも放ったらかしにし、猛ダッシュ！廊下を駆け抜け、階段を飛びながら駆け下り、マンションのエントランスを出た！！

空は、とても青かった。風は穏やかだった。

「えっ

っ！」

墨江は叫ぶ。電線を揺らすほどの、とても大きな声で。

こうして、墨江紫音（彼女いない歴イコール年齢、青春まつさかり妄想満開）の、生まれて初めてのハッピーイベントは唐突に訪れたのであった。

1  
 チャイムが鳴る。教室の端で、その少女は窓の外を眺めていた。大きな川が流れている。対岸の向う、かすかに見える建物の影に思いを馳せる。

川の向こうと、こちらでは世界が違う。たった十数年、日本がまだ一つの国で、同じ日本人として生きていた頃、同じように退屈な教室があり、退屈な日常があった。

だが今は違う。川の向うとこちら、二つの世界を経だつて、かつて経済大国と言われた豊かな国日本を保っている都市とそうでない街。

日本国特別行政区特別管理都市 - 通称 - 「特別市」。十年と少し前、財政破綻した日本。自力再建を断念した日本は国連統治機構の支配下に置かれることとなった。そんな状況下で、唯一破綻前以前の経済水準を維持している、特別市。いくつもの企業が市の運営に携わり、己の利益のみを追求する営利都市。そんな街を少女は誰よりも嫌っていた。

安龍美弥毘あんりゆうみやびは教室の端、一番後ろの席に座っている。学生をやっているのは本望ではない。まだ十五歳の中学生である仕方なくそうしているだけだ。

教卓にスーツ姿の教師がやってきたが気にもとめない。もとより授業を聴く気など毛頭ない。太陽に照らされ、少し茶色に染まる、漆黒の髪を指でからめながら

『安龍、ターゲットを補足したわ』電話のスピーカーから声を聞いていた。

安龍は肘を付き、けだるそうに言う。

「私の主はあんたではないはずなんだけどね」

『彼の命です。従ってください。位置情報を』言い終わる前に遮った

「いい。さつき感知したから」

安龍は席を立った。闇を彷彿させる漆黒の髪を揺らし、左右に結んだ白リボンを解いた。教壇に立つ教師が怪訝な表情で口を開いた。安龍は睨みつけた。赤く輝く、悪魔の目で、睨み付けると、教師は黙りこみ、再び黒板に向かい合った。

「めんどくさいな」教室を出る。薄暗い廊下に冷たい廊下に風が吹いた。誰もいない廊下で、グレーのプリーツスカート、ブラウスを脱ぎ捨てながら少女はゆっくり冷たい廊下を歩いた。

すみえしおん  
墨江紫音はマンションから徒歩五分以内のコンビニにいた。

「うーん……」

漫画雑誌を適当に手にとって適当にページをめくりながら先ほどの光景を思い浮かべる。

胸のあたりが……

「だあああつ！不鮮明すぎる！クソ！データが足りない！！」

・さつきの全部彼の妄想でした・

五月雨の（六月だけど）初夏の暑さに ドリーミング 独男の儂

い 夢物語 （字余り）

作 すみえしおん  
墨江紫音

残念、と肩を落とす。

（しかし今の妄想なかなかのクオリティだったな。ちょっとビビっ

たし……)

「明日から仕事か……、だりーなー」

何も買わずに出て行くのもこれまた気が引けるので、とりあえず、昼食を買っておくかと、コンビニ弁当をひとつ手に取りレジへゆく。450円です。レジのおばさんが、あんまり愛想良くなさく告げる。ちなみに、レジのバイトのお姉さんとお近づきという線も期待したのだが、この場合、それも期待できないようである。

携帯電話を電子マネー読み取り端末にかざす。この街のほとんどが電子マネー決済だ。IDを持っていれば誰でも簡単に口座を作れるが、逆に言うとIDのない人間は何も買えない。

会計を済ませ、コンビニを出て、元きた道をゆっくり歩いてゆく。この街に来たのは少々理由ありだ。実年齢(十八歳)を四歳ごまかし二十二歳としてID登録をした。理由は大したものではない。

唯一に身内、母親が死んで叔父の家に預けられていたのだが、うまく行かなかったのだ。未成年であった墨江はID登録するにも親権者の了解を得なければならなかった。けれどもそれは難しい。だから、成人だと嘘をついて登録したのだ。

やり方はネットに転がっていた。なんでもID登録の際の身分証明証は健康保険証ぐらいのもものではつきり言ってこれくらいならいくらでもごまかせるらしい。実際やってみるとあっさり通過。もっとも、若い労働者を欲しているこの街全体があえてそれを見逃しているフシもあるという噂だが。

特別市は営利都市だ。市民権は有料。収入の有無にかかわらず一定の市民税ロイヤリティを払う必要があるし、これからは自分一人で生活もしなければならぬ。よって、十八であろうと、二十二であろうと学生でなければ当然仕事をしなければならぬ。幸い就職先は見つかったものの、やはり待遇はあまりよくない。いわゆるブラック企業というヤツの匂いがプンプン漂う中小企業が明日からの職場だ。

(あーやだなッ)

マンションに向かう途中、さつきコインを落とした川が視界に入った。あのコイン今の価値ならいくらだったんだろうとか考えていると虚しくなってきたので、気を取り直してエントランスへと向かう。

熱くて死にそうなへるへる状態で五階まで登った墨江であったが、廊下、部屋の扉の前で思い出した。スーツケースも、ビニール袋も、シオルダーバッグも、そして鍵も放ってきて今は手元がないということ。しかし、部屋の前に置きっぱなしにされていたはずのそれらは一つ足りとも跡形もなく存在しなかった。

「しまった……」

思わず声に出して、しばらく扉の前で不審者よろしく立ち往生をしていると、カチャリと、扉の開く音がした。

「あのお……」

さっきの少女が、半開きの戸からのぞくようにこっちを見ていた。「えっ?」

・妄想じゃなかった・

(そついや、妄想にしちやいやにリアリティがあった!えっ、妄想じゃない?ってことはリアル???強制わいせつ罪とか、住居不法侵入とか、痴漢とか、強姦とか言われて訴えます、管理局に通報します!とか言われたらどうしよう!!)

” YesかNoか”

とつさに右手をポケットにツッコミコインをだそうとしたが、(そついやさつきここから川に紐なしバンジーあの世行きダイブを実行したつけど)、あの光景を思い出し諦める。

「か、管理局に……」

少女は鈴の泣くような、かすかな声を震わせ言った。

(やばい、完全にアウトだ、俺はロリコン性犯罪者として市民権を奪われる、人生を強制終了させるうとうう!!)

少女はボタンと扉を開けた。ちゃんと服をきている、紺色のブレザー、紺色チエックのスカート(制服)。彼女はいきなり、墨江の手を両手で掴んだ。

そして、息を吸い込む、と

「お願いします!」とその大きな瞳を潤ませながら震える声で言った。

「はっ?」

墨江は胸元を確認しようとする邪な考えを押し殺し、やや目線を逸らした

「管理局には、通報しない、ください」

黒髪の少女は区切るよう、懇親の勇気を振り絞って、声を震わせ、潤んで輝かせた黒い瞳で訴えかけるように言った。

「はいッ?」

墨江は一瞬、呆然。

「なにをいつてるのでござりまするか?」

何故か時代劇用語で疑問を投げかけるのがやっとだった。

「で、お前は一体なんなんだ?」

「わ、私はほら、あれですよ突然空が降ってきた少女的な、ヒロイン系ナゾ美少女です」

「あっ?」

いきなり電波なことを言われたので、墨江は右手を振り上げる。

(てか、自分で美少女って……)

「なんでやねん!」とチヨップツッコミをかまそうとするが、女の子が思いの外萎縮して顔をすくめてしまったので、なんだか気まずくなり手を引っ込めた。

少女と墨江は何も無い六畳のフローリングの部屋の真ん中に佇んでいた。パチリとした大きな二重まぶたに、人形のような色白の肌。髪はつややかな黒髪で腰ほどまで伸ばしている。いや、伸びたままにしているようだ。歳は歳は十四、十五歳くらいだろうか。小柄で華奢な体つきだが、胸のふくらみはそれなりといった感じで……

墨江の視線が思わず一箇所に集中する。少女は夏だというのに長袖のブレザーを着ている。だが、その下、あるべきはずの白いブラウスがなく、下着もたぶんつけていない。紺色チエックのプリーツスカートを履いているがところどころほつれていて、やや傷んでいる。

とても普通の格好ではない。ホームレスだろうか。墨江は思った。

モノがないせいで妙に声が響く、時折ドスンと、隣か上か分からないが物音がするので案外壁は薄いのかもしれない。

(変な声でも聞かれるとまずいな)

少女は両手を床についた格好になって(すなわち、両腕で胸を挟むような感じになる)

「何でもします!」と区切ってから、息を大きく吸い込み、

「だから一晩だけ止めてください!お願いします!」と懇願した。

「ちよと待った、意味がわかりません。そもそも、なんで俺のうちに居た。」

「ちよ、ちよつとぐらいなら……」

墨江の言葉を遮って、少女は突如一枚しか着ていないブレザーのボタンを外すよう(涙をこらえて、でもしかたないもん、と言わんばかり唇をくわえ)細い指をボタンにかける。

「ちよつと、待った!」

少女はビクンとして手を止める

「だが、そんな要求をした!」と墨江はおもいつきり拳を握り



締め立ち上がる。

「そんな事言ったって、男の人が家出少女をかくまう理由なんてこれ以外……」

「そんなモノ求めとらん！」

「じゃあ！」

少女は嬉しそうに立ち上がって、ああ、いい人に出会えた、これでもう寒おいもいもひもじい思いもしなくていいんだ。なんてつぶやく。

「誰が泊めると言った！」

その言葉に落胆しストンと床にしゃがみ込む。何故か体育座り。

墨江は視線をそらす。

「とにかく、ここは僕のウチだ。君が僕の部屋に勝手に入っていたことはこれ以上咎めないから、悪いことは言わない、おうちに帰らないさい」

やさしいお兄さん風に諭してみた。言い終わってから気づいたが、この口調はどっちかっていうとオッサン？ではないだろうかと思っ

た。  
少女は口を尖らせてうつむく。よく見てみると、なんともかわいらしい。しかしその格好は……。

「服、他にないのかよ」

「体操服なら」

少女は膝をついて立ち上がり、押入れの戸を開けた。見ると銀色スニーカーもそこに収まっている。一応礼くらい言っておくべきなのかなと考えていたが……。

紺色ブルマと白い体操着……

「なんでそんな九 年仕様のロリコン衣装なんだ！」

「と一瞬ブルマ体操着の少女 - を妄想するも、慌てて首を振ってか

き消す。

「公園で寝ていたら、バーコード頭のおじさんがおにぎり二と一緒にくれました」

「えー、それ着てまさか??」

「いえ、おにぎりもらった後、着替えてきますと言って逃げました」  
(ちゃっかりしてるね)

「バーコードの笑いこらえるの、我慢できなかったの」  
(そこかい!)

「こんなのもありますよ、公園のゴミ箱に捨ててあったんです」

少女は押入れの中から更に何かを引っ張り出す。出てきたのはなぜか旧タイプスクール水着。と言っても墨江自身はその型を知らない。もういいから、と墨江が手を振ると

「じゃあ、どれならいいんですか」と少女は不満そうに答えた。

少女は肩を落とす。ブレザーが少しずり落ちた。これはやばい、下は本当に何も付けていないではないか。慌てて視線を落とすが、今度は紺色チエックのプリーツスカートからはみ出した細い曲線が目に入り、もしかその下もと、邪な考えが浮かんできたので慌てて立ち上がり、ベランダのある窓辺へ向かった。

背を向けたまま言う。

「と、とにかく、こんなトコロに居てもらってはそので……」

「つたくせに……」

「えっ?」

あどけない少女は涙目で、口を尖らせた。それを見て墨江は慌てる。

「わたしの、見たもんっ!!」

「いや、あれは不可考りよー」

と言いつつ、少女はわんわんと、泣き出した。

マズイ！ヤバイ！！

わなわなと情けなく手を振りながら、「ちよっと、ちよっと」といったところで一向に泣き止む気配ない。変な声を聞きつけたご近所さんが乗り込んできたらただごとでは済まない。

仕方がないな。墨江は溜息をついて「わ、わかった。わかったから！」とワケもなく叫ぶ。

少女はピタリと泣き止んだ。そして墨江の方にはちくりと眼を合わせる。

「とりあえず、その方格好なんとかしよう。このまま帰すにしてもそれじゃ襲ってくれって言っているようなもんだし」

墨江は銀色スーツケースかワイシャツを取り出した。

「ホレ」

シャツを少女に渡す。少女は黙って受け取ると、背を向けブレザーを脱いだ。墨江は視界に入らないように気をつける。着替えを終えた少女は勢い良く振り向き、にこやかに微笑んで「ありがとうございます」と言った。

エンジェルスマイル。という言葉があるのなら、これを言わずしてなんと言うか。

「えっとー、とりあえず、そこのお弁当いただけますか？」

「はい？」なぜかお昼ごはんを一緒に食べることになってしまった。「昨日から何も食べてなくて……」

流れるに、いやこれは俺のだからダメとは言えないので、「はいどうぞ」と落胆Maxで答えることにした。

結局、墨江自身は非常食用のカップ麺を食べるはめになり、二人は向い合って、昼食をとることになった。食事の邪魔になるのか、少女は床に捨ててあった梱包用のナイロン紐で髪を結んでいた。だらりと伸びたワイシャツで手が隠されていたため割り箸を割るのに苦労していた。うでまくれよと墨江がアドバイスすると、少女は半

袖ぐらの丈にまくる。

シャツの先があまりにも不自然にスカートを覆い隠していた。

（なんかそれだとした履いてませんよみたいで逆にエロいんだが）  
なので墨江はその裾の両端をつかみ、彼女の腰ぐらの高さで結んでやった。途中幾度と無く襲う邪な考えを抑えながら。

「それであなたはええと……」

「十六歳です」

（うそーッ、中学生じゃないの君）

「いやその前に名前……。ああそうか、名乗るならまず自分からってのは常識だよな。俺は墨江すみえしおん紫音むらさねってんだけど、お前は？」

「わかりません」

「はっ？」

「えっと、その恥ずかしいこと以外ならなんでやりますから……、というおじさんはあんまりそういうコトお望みではないタイプみたいだし、安心かな。単なる甲斐性なしなのかもしれないけど……。あ、名前は本当にわからないの。その……。記憶がなくて……」

「ちよつとまで、俺は甲斐性なし……。じゃなくて、まだここにいていいなんて一言も言っただけだし、だいたい管理局とか、空から女の子がどうのこうのとかが、そういう無駄知識はふんだんにあるくせに、なんで、なんでそこだけ丁寧に記憶喪失なんだ！それに俺はおじさんよばわりされるよな歳じゃねえ！！（本当は二歳か三歳差）」  
「そんな事言っただけで仕方ないじゃないですか。分からないものは分からないんだもん」

なぜか逆ギレされた。一瞬、泣くかなとあたふたした自分がバカバカしくなる。

（でも一応聞いておくべきことは聞いておかねえとな）

「ええと、住んでいるいえはどこですか？」

「公園のトイレとか、神社とか、駅とか屋根のあるところにいまし

たけど、ここが一番いいです。公園は鳩とか、カラスとか、変態オヤジとか中学生とか大変です！」

当たり前前だろう。やや割り箸を強く握り締め、少し口調を強くして言う。

「じゃなくて、あの、その、家出する前にいたところは？」

「記憶にございません！」

（なんで国会議員の常套句？あくまでも記憶喪失キャラを通すつもりだなこいつ）

墨江の全身に疲れが充満する。

「ったく、本当なら今頃、おとなりのお姉さんか手料理をごちそうになって、いやこれから入社手続きなんすよ。なんて言いながら和やかムード」

とそんな妄想をして思い出した。

入社手続き今日だった。

「あああああ、入社手続き！！！」

「こら、シャツ脱げ、俺このあと入さーっ」と言いかけたところで、冷たいもの頭上に。

ペットボトルのお茶（それも自分のではなく墨江の）を思いっきりぶちまけられた。

「やっぱりそういうことするんじゃないですか！嘘つき！！」

「違う、そうじゃなくて……」

少女がめそめそ泣き出してしまったので、わかったよそれ着ていいからと言って、墨江は、スーツケースの中からTシャツ、スーツのスラックス、ネクタイを取り出す。シャウは青地に和と白く書かれた、どこかの景品の、ダサイものしかなかった。

（あー服届くの明日だったかー）

「俺、これから入社手続きい行かねえと。夕方くらいまでいないんだけど」

「だ、大丈夫です！夕飯きちんと待ってますから」明る返事だった。どうやら夕方まで居座るつもりらしい。ここで追い出そうとすると

時間切れになりそうなので、とりあえず保留という事にしておく。

スーツケースを閉じ、シャツとズボン、ネクタイを持ってバスルーム兼トイレへ。

(一人暮らしのはずなのになんでこんなに気を使わなきゃなんのか……)

2  
「えっ、うそーん」

墨江紫音は頭を抱えた。たどり着いた場所には白いシャツターが降りいて、しかも借金取りの金返せコール満載の張り紙たべダベタ。やっとの思いで見つけた就職先、これから新生活スタートと都会での人生の第一歩に胸を弾ませ素敵なお出合いを期待（妄想）していたというのに……

「いくらなんでもやり過ぎだ！やりすぎですよ！！」と人目もはばからずわめき散らす。

実はこの街に来る直前、まあいいどうせやりたいことが見つかるまでのつなぎだし。という軽い気持ちで適当に就職先を決めたのだが、いざそこで働くとなると、（ああ、営業か、だるいな、とりあえず就職決まったのはよかったけど、何ヶ月続くかな。ああ、いやだ。あの体育会系な社風。絶対に合わないし、あの求人バンバンな感じ、どう考えてもブラックだ。とすれば待っているのはサービスクラス＆ノルマ要求の連続、地獄のような社畜人生だ。俺みたいに体力もなくてあんまり知力もない仕事にやる気も大して感じない、受身オンリー草食系男子はどうやって生きればいいんだよう）と撃つになり、

あんな会社潰れちまえ！

” Yes オア No ! ”

とコインを投げたら出たのはお望み通り表。なんてことを冗談半分にはやっていたのだ。

「占ってあたりますね。おめでとう。いつつも当たらないくせにこういうご時だけきっちりあたりやがる。素晴らしい！」と変態全開の絶叫をしていたら

「ちょっとそこの！」と背後から声がした。

話しかけてきたのはヒロイン系謎の美少女や、道に迷ったおばあさん、ではなかった。

見るからにフレンドリーなネイティブ金貸し（ヤクザ）さんであった。

「にいちゃん、ここの社長はんどこ行ったかしらんかえ？」

「えと、僕明日からここで働くことになっていたのですが、この通りの状態で……」「ほうか、ほなとりあえず、社長が見つかる間にいちゃん、借金建て替えといってくれんか」

「はい？」

「返済期限になってもかねかえさへん。そやからにいちゃんこの関係者やろ、建て替えるのは当然ちゃう？」

「関係者って、僕もそのここから給料を貰う宛が無くなりました」

というほのぼのとした会話を交わし、なぜかエネミー認定を受け逃げ惑う羽目になってしまったのであった。墨江は思う。理不尽だ。こんな事望んでない。

「現実リアルのウンコタレ！！」

（コインよ、あなたの就職先はヤバイですからいかない方がいいですよぐらい占えよ！）

最高にドラマチックな追走劇を演出し、なんとか追ってから逃れた墨絵は古びた居酒屋のシャッターに息を切らして寄りかかっていた。

喉がからからだったので隣の自販機でとりあえず清涼飲料水を買いたい求め、周りに休む場所も特になかったので居酒屋軒下の陰で少し休むことにした。

「臨時休業」

居酒屋シャッターに貼られた紙はずいぶん日に焼けており、雨でしわくちゃなっていた。

「ちょっと、そこの！」

ビクンとして墨江は振り向く。思わず右手のペットボトルを握り



しめる。

しかしヤクザではなかった。

ゴスロリ。一言で表現するならこれ以外の表現が見当たらない。黒を基調としたフリルのついたドレス、だがよく見るとそれはメイド服のようだ。身長は150センチ前半の中学生くらいの子。白っぽい肌に、漆黒の髪を肩の少し下くらいまで伸ばしており、両サイドを結んでいるツインテール。さつき家にいたあの少女より小柄で幼い。

この格好であればどちらかというところキリスト文化圏ではないかと突っ込みたくなるのだが、なぜかかみ髪飾りに神社のしめ縄につけられた白い紙（紙垂しでという）が飾られている。

それはそれだけでインパクト満点であったが、何より異彩を放つのは、腰に携えた当人の身長のお八割くらいの長さを誇る物騒な斧である。

また電波な奴に出会ったなとも思いついて、とりあえずやくざではなかったので、逃げる必要はないようだと思判断した墨江は少し安心した。

「えっと……」

呼びとめたくせに、ゴスロリ少女は墨江を無視して、B5サイズのタブレット端末を肩から下げたポーチから取り出し、指でなぞって何か操作していた。

「わたしのあれに用があるんだけど」

「はい、何のことでしょう？」

「まあいいわ。あんたのところにいるんなら、案内して頂戴。この感じだと結界の中にいるでしょうから」

「はい？」

「だから、ここにいらなくなってことはあんたが隠しもってんでしようが」「なんのことだかさっぱり状況がわかりませんが。ちょっとまった、そんな凶器を街中で振り回すなんて、健全なゴスロリメイドさんの

やることではありませんよ！」

「あーもう、めんどくさい！とにかくあんたの家に案内しろっての！」

墨江は仕方なくコクンと頷いた。

墨江の隣を、漆黒の髪をツインテールにし、ゴスロリファッションの、腰に斧を携えた中学生（くらい？）の少女あんりゆうみやび安龍美弥毘（彼女は名乗っていないので墨江は知らないが）がすたすたと歩く。正直一緒にいてあまり知り合いだとは思われたくない。なので適当に距離を開いて歩いている。今日は女難の相でもでてるのか俺、なんて思いながら、墨江は駅前の商店街を歩いていた。意外にも周囲から怪訝な目で見られている様子は無い。この街ではこういう格好をした輩は珍しくないのだろうか。

ともあれ、さっき絡まれたヤクザとは関係がない様子で一安心をした。しかしなぜか、斧で脅され家まで案内させられる人質状態だったりするわけだが……

「なあ、捜し物って何だよ。俺、なんか拾った覚えないんだけど」「うるさいな」

「もしかして、何か勘違いしているとか？俺、自転車なんかパクってませんよ、交番なら……」

ゴスロリメイド少女がしかめっ面で全否定する。墨江は諦めて黙り込む。捜し物ってなんだよ。自転車じゃなかったら、人形か？

「そうだ！」

商店街のアーケードを抜けると銀行へ寄ろうと思いつく。なにしろ、やっとの思いできまっただ就職が先が突然閉店。明日からの生活を考えないわけにはいかない。銀行の残金を確認して次の仕事が決まるまで無事やり過ごすだけの貯金があるかどうかぐらいは確認しておきたい。

駅前でバイトいらんかねー時給900円とプラカードを掲げている、怪しげなシスターみたいな格好をしていた男を横切りATMのある方へ向かおうとする。ゴスロリメイドの少女がふと足を止め

うつむく。

「ちよつと、どこいくの」

安龍が思いつきり、腕を掴んでもとの道へ戻そうとした。その細い腕のどこにそんなちからがあるだというぐらい強く握りしめ「痛い痛いいいっツ！」とみつともなく叫びながらゴスロリのドレスを睨みつける。

視界に、変なシスターふうのお男がニヤけた視線を送ってくるのが痛い。

「あんまり手をけないでくれる？私急いでんだけど」

「はあ、と言つても俺、今失業中だし明日からの生活とかイテテテテテッ」

「わかりました。わかりましたよ！！」

駅前の通りを抜け、住宅街に入る。すると底には……

さっきのヤクザ連中の一人、スキンヘッドのグラサン野郎にばつたり。

「なんやにいちゃん、借金かえさんとデートか、ええ身分やな！」  
スキンヘッドのヤクザさんが指をゴキゴキしながら近づいてくる。ゴスロリメイドの少女は「あー、めんどい！」とうざったそうなに一言放つと、一千万くらいはするであろうヤクザが乗っていた黒塗りの外車に斧を思いつきりたたきつけた。クルマのガラスは粉碎。スキンヘッドのヤクザノボルテージはMax。「てめー何しやがる！」と鬼の形相で、周りに散らばった仲間サインを送り、墨江たちに襲いかかる。

しかし、安龍はそんな緊迫したシチュエーションに焦りもせず、墨江の耐性を思いつきり無視して、強引に腕を引っ張り路地と路地の間、時には他人様のお宅の庭におじゃまして、さらに言えば黒くてごつい物騒な物を携えた連中を足蹴り、斧をふりまわし、なぎ倒すというすぐくハードボイルドアクションを披露し、ヤクザをすべて一人で蹴散らしてしまった。

そんなシーンを演じながら命からがら、なんとマンションの在る

一角にたどり着いた。

「ここなの？」ゴスロリ少女愛想なく言う

「あーそこを曲がったなら」と指を指して、

「ところであなたはなんですか。ヤクザとまともにやりあえるほど戦闘力を持ったあなたはどこぞのエージェントさん？」

「あーめんどくさい。悪魔だけどなにか？」  
と不機嫌そうに答える。

（なんだそりゃ、そういう設定の中二病か？）

まあしかし悪魔だと妙に納得だ。

とはいえ、この得体の知れないゴスロリメイド少女を本当にマンションの部屋に入れて大丈夫だろうか。何かを勘違いしているらしいが、危険きわまりないことに変わりない。それに、家にはあの少女が居る。もしかしたら関係者か？と一瞬思ったが、捜し物としか言っていないこの子があの子のことを知っているとは思えなかった。それにしても、ここでまた違う女の子を連れ込んだらそれこそ、ロリコン犯罪者の素質が一気に開花するのではないか。それはそれでまずいような気がしたので、ヤクザを倒してくれたのは感謝するが、家に入れるのはやはり気が引ける。適当に巻いて逃げようか、一瞬そう思ったが、先ほどの戦闘力が脳裏によみがえったので「無理だ」と早くも諦めモード。

突然電子音が鳴る。墨江は慌ててポケット二手を突っ込んだが、ゴスロリメイドの少女が、ちっ、と舌打ちして小型のタッチパネルを搭載携帯電話を取り出し、した不機嫌そうにタッチパネルに指をなぞらせてから耳に当てた。

「なに、なんの用？」と不機嫌そう背を向け電話の主と話しを始める。

今だ！千載一遇のチャンスをとらえた墨江はエスケープ！

（あんな電波家に入れてたまるか。あそこは俺の城なんだ何人たりとも神聖オカスベカラス（ニシテ）不可侵！）

安龍はそんな恩知らず（でもない？）な墨江に気づかず電話を続ける。

「だから仕方ないでしょ？邪魔が入ったんだから」『あんなところで騒ぎを起こしてわかってるの？』「管理局が来たら引くわ。どうせチンピラの騒ぎだと思ってるでしょうし」

『そういう問題じゃない！あんた自分の立場解ってるの？』「うるさいな！さっさとやりやいいんだろ！」

安龍は鬱陶しそくに、電話を耳元から話した。

「ちよつと待ちなさい。まだ話は……」

安龍はうざったに声を無視して電話を切った。

「さあ、案内してちょうだい」

しかし、ボサボサ頭の男、墨江紫音すみえしおんはすでに居なかった。

ちっ！安龍はいらだちながら周囲を見渡す。すでに彼はいなかった。

「何処行ったのよあのバカ！」

「確かマンションって言ってたけど……」

この一画にはコンビニもマンションも古い昭和のにおい漂う文化住宅、ごく普通の一軒家も混在する。安龍は歯がみして走り出す。シヨルダーバッグからタブレット端末を取り出す。

緑色の斑点が周囲に分布しているもの、反応はどれも希薄で場所の特定には不足だ。

「クソツ！せつかくここまで着たのに。ババアめ、余計なところ電話してきて！」

苛立ちながら走ったものの、宛も無く彷徨うのは無駄だと悟りやがて足取りは重くなる。

白いトラックが視界に入った。フロントのバンパーに市の紋章が記されている。

「管理局……」

安龍はトラックから遠ざかるようにその場を離れた。

少女は屋上にいた。夕焼けで赤く染まった空をぼんやり眺めながら鉄柵を超えた、コンクリートの縁に座り足を宙にぶらつかせていた。

ぶかぶかのワイシャツの腕をまくり、裾を腰のところで結んで、その下は制服の紺色チェックのプリーツスカートをはいている。足は靴どころか靴下もない裸足だった。

髪を結ぶ梱包用にひもが風になびいて揺れる。

少女はうつむく。

マンションのすぐ側、暗く深い、細長い用水路を見つめ、ため息をつく。

少女はゆっくり立ち上がった。大きく息を吸い込んで、腕を思いっきり伸ばし、まるで背中に翼が生えた取りが今飛び立とうとするようなそぶりですっと……

墨江はゆっくり歩み寄る。そして少女の細い腕を握った。彼女の背中があまりにも切なさに見えたからだ。

「こんなところにいたのか」墨江は優しく諭すように言った。

少女は振り向く、夕方の風が黒く長い髪をさらう。振り向いた少女の目から、銀色の、真珠のような、涙が風に舞った。大きくぱちりとした目を潤ませ、墨江の顔をとらえる。

墨江は少し視線を逸らして「危ないぞ」と言った。少女は何も言わない。

「晩ご飯、何がいい？」

墨江は低い声で言う。少女はうつむく、そして両手で涙をぬぐうと、顔を上げ

「お腹すきました。唐揚げか何か、お肉がいいです」と笑顔で言った。

そうか。墨江は短く返事をして、彼女の手をひいた。彼女はゆつくり柵を越える。墨江は彼女が柵を越えるまでその手を離さなかった。

「ほれ、履き物ないから」

墨江は背中を差し出し、少し照れくさそうにいった。彼女はほんの少しあごに手を当てつつむくと、そつと負ぶさってきた。

少女の細い腕が首に絡みつく。柔らかいほほが少しあたり甘い吐息がこそばゆく当たる。

「ぐるじじいいい！もつと下の方！！」

少女は腕を緩める。墨江は足の方へてをまわす。

やわらかい。柔らかい物が背中にあたる。ちょっと待った。こいつ今……

そんな幸せ感に浸るのもつかの間。歩いて二・五歩、時間にしておよそ五秒。重い。とても重い。身長150センチ後半はある彼女。少なく見積もっても体重は40キロ前後。ずしりと全身の重みが体力のない草食系男子を襲う。悶絶しながら、彼女を部屋に運ぶ。

「なあ、おまえ」と言いかけて墨江は言葉を噤んだ。幸せそうな寝息が、聞こえたからだ。

少女は結局目を覚まさなかった。リクエストに答え唐揚げ弁当を買ってきたが、あまりにもぐっすり眠っていたので起こさず冷蔵庫に放り込んでおいた。

一向に起きる気配を見せない少女は、そのまま墨江のマンションで一晩を過ごすことになった。さすがに見知らぬ少女と一緒に眠るのは気が引ける。唯一の布団は彼女に譲り、墨江自身は台所の床に枕だけをおいて眠ることにした。といつてもなかなか寝付けない。床の堅さが彼の安眠を阻んでいるのは言うまでもなく、ふすま一枚を隔てた部屋の真ん中には十代の見知らぬ少女が眠っているのだ。邪な考えを起こしたわけではないが（起きかけては必死に押さえ込むの連続）、なんともいえぬ緊張感に、一晩中うなされていた。

ちなみに、パジャマは昨日来ていたTシャツと同じ無地の青に「和」の白丸がプリントされたTシャツであった。少女が眠っている部屋の明かりをつける訳にはいかなく、スリッパの中を手探りで探した結果出てきたのは全く同じデザインのTシャツだったのだ。そして元々パンツ一枚で眠るつもりだった。パジャマ用のズボンを持っていない。したがって寝心地最悪のGパンを掃いたまま眠った。結局、墨江自信が睡眠に入ったのは明け方であった。限界まできて遂にといふ具合だ。

墨江が目を覚ましたのは、日が昇ってずいぶんになる。生ぬるいあくびをして、ゆっくり体を起こすと、携帯電話の時計を確認する。「11時38分」

「ヤッバ！初日早々遅刻！」思わず声に出したが、そういえばと昨日シャッターが下ろされ、べたべた借金取りの張り紙が貼られていた状況を思い出して、安堵する。

（つか、安心してどうするよ。とりあえずハロワ）



墨江はふすまの前で立ち止まる。開けていいのやら、悪いのやら……。  
念のためノックをして（自分家なのに何とも変な感じだな……）、  
「入っていいですか？」と確認をとる。開けてびっくり着替え中と  
いうのはさすがにデリカシーがないし、それはそれで喜劇だが、い  
や悲劇だ。これ以上罪を重ねてはいけませんと自問自答をしながら  
返事を待つが、いつまでたっても返事がない。念のためと、もう一  
度ノックを繰り返すが、返事はない。墨江はするりとゆっくりふす  
まを引く。

「あれ？」

飛び込んできたのは引越したばかりのがらんとした、何もなし  
部屋。

まさかと思いますが、今までの全文妄想でした？

だが、昨日少女のために用意した布団と、冷蔵庫の中に放り込ん  
であった唐揚げ弁当の空のパックがきちんとふたをされ、部屋の中  
央に置かれていた。墨江は部屋の中に足を踏み入れる。まるで見知  
らぬ部屋に初めて入ったかのようにゆっくり、慎重に。

弁当のパックの上に、割り箸の封に使われた白い紙が置かれてい  
た。

「お世話になりました」白い紙には鉛筆ので、一言だけそう記され  
ていた。

墨江はゆっくり立ち上がる。机の引き出しから、さびた十円玉を  
取り出す。これも祖父がくれた昭和六十四年の十円玉であった。墨  
江はそれを右手の親指に乗せると、目を閉じて静かにいう「このま  
まもう会えないのか……」

はじかれたコインは宙を舞う。くるくる回転し、鋭い放物線を描

き彼の手の甲へ舞い戻ってゆく。墨江は左手を振り上げる。コインをキヤッチする体制を整え、表と念じる。

ピンポン！ ドアフォンがなった。墨江は振り上げた手を思わず引っ込める。

コインはそのまま落下を続ける。墨江は慌てて玄関に向かう。コインがチャリンと床にぶつかる。「あっちゃああ」と、墨江の右足がコインを押さえつける。慌てて足を上げるが、コインは彼の足にくっついたままだ。手を伸ばしてコインを足からはがすと、そのままポケットに突っ込んだ。

扉を開けると、あの少女がにこやかにほほえんだ。そして言った「ただいま」

「ただいま、じゃねえよ！」墨江は苛立ちながら、けれども本心ではほつと一安心下心を隠しながら彼女を部屋に迎え入れる。そして頭をなで「どこ行ってたんだよ」と優しく声をかける。

- そんな情景を何故か期待した期待した -

けれどもそこにいたのはあの少女ではなかった。ごく普通のありふれた日常。ただの宅配便のだった。受け取った荷物は衣類の入った箱であった。これで和Tシャツとはおさらばできるのだが、なぜか今は開ける気が起きなかった。箱をそのままにし、昨日来ていたワイシャツを上から羽織る。ネクタイを締め、髪を適当に整えとりあえず、目先の目標、再就職先を探すため部屋を出る。

夕方になった。結局再就職先はみつからなかった。それどころか、応募する候補すらまともに見つからない。職業斡旋センターの職員さんが、苦虫をかみつぶしたように「ないですねー」と言うたび、やる気は損なわれてゆく。気がつけば、本屋で立ち読み、駅前をぶらぶらとした後、日が傾いてきたので仕方なく帰りの電車に乗った

という次第だ。

墨江すみえしおん紫音は駅を降りるとだらりと力の抜けた格好で商店街目指して歩いていった。

まだ日差しの強い夕焼けに照らされながら帰宅途中の学生やサラリーマンが手で顔を仰ぎながら通り過ぎてゆく。その中にひととき目立つ黒い修道服を着た男が看板を掲げ、

「バイトー！、バイトはいらんかねえ」と通り過ぎる女子高生に話しかけて逃げられるという珍プレイを繰り返している。看板には時給950円と書かれていたので何気なくそちらに気を引かれたが、  
「いくら、仕事がないからってあれはなあ」とため息。

平和な住宅街を歩き、今日こそは一人ゆっくりとなんて思いながら夕焼け空を見上げる。

「あいつ、家に帰ったのかな」  
ポケットに手をつ突っ込む。昼間のさびた十円玉がまだ入っていたので、それを握りしめ、そっと手のひらを開く。10円、昭和六十四年。さびた十円玉に記された文字を見て再びポケットにしまった。

「げっ！」 マンションの前につくと、墨江は凍り付いた。

「見つけたわ、まったく手間かけさせやがって！」

エントランスの段差に腰をかけていたのは、昨日の斧を振り回してやくざ十数名を撃破したゴスロリメイドの少女安龍美あんりゆうみやび弥毘であった。頬杖を付いてうざったそうに座っている。

「何の御用でしょうか……？」

「何の用じゃねえよ。あのゴキブリは何処に居るかつつてんのよ！」

「はあ？ いったい何のことでしょうっ？」

「まったく、めんどくさい！」

安龍は斧を杖のように地面に突き刺さして立ち上がった。墨江は、  
（冗談じゃねえ！こっちは就職難民状態で途方に暮れてこんな電波  
を相手している余裕なんてミジンコほどもねえんだ！まさかこいつ  
も飯をたかるんじゃないやな！）なんてことを考えながら、その  
悲劇的シーンを描く。

「あ、空から女の子が！！」

適当に虚空に指を指すと、すかさず、ゴスロリメイドを払いのけ  
階段を一気に駆け上る！

「なに！？」

安龍美弥毘あんりゆうみやびは本気で反応してしまった。思わずボサボサ男の元に  
駆け寄って空を見上げるが、ボサボサ頭はいきなり肩を払いのけ、  
マンションの中へ消えていった。

「クソッ！」

反射的に斧を振り上げたが、墨江はマンションの狭い階段をタ  
ーンして視界から消えた。安龍は仕方なく斧を引っ込め、マンショ  
ンの中へ駆け込む。階段を上る音が聞こえる。安龍はフリフリのだ  
レスのポケットから、黒くて物騒なもの（小銃）を取り出す。

最上階、五階までたどり着くと、墨江はオロオロ情けない背中を  
見せながら、廊下の奥へ急ぐ。たどり着いたのは廊下の一番奥。そ  
こが彼の部屋だ。墨江は慌てながらポケットから取り出した鍵を差  
し込むと、ドアを開いたとたん部屋の中へなだれ込む。

そこへ安龍は間一髪間、斧の柄をかましてドアを締めるのを妨害  
した。

「おまえの探し物、ここにはないと思いますけど……」

安龍は扉をこじ開け足で止めると、立ちふさがる墨江に向かって  
斧を振りかざし脅す。

「じよ、冗談じゃねえ。帰ってくれ、おまえみたいな暴力非行醜女

を部屋に入れたら、即刻退去処分確定だ！」 墨江は恐怖しながらも抗議を続けた。

安龍は苛立ちまじりのため息をついて、玄関扉の横に備え付けられた、小さな扉を指し

「ねえ、これなんだか知ってる？ガスとか水道とか電気とか管理する機械がはいってんだけど、ここ壊されたらまずくない？」と不敵な笑みを浮かべ言った。

仕方なく、墨江は観念しましたといわんばかり玄関から一步部屋に入って道を開けた。

「ふん。それでいいのよ、それで」

安龍は墨江を押しつけ土足のまま部屋の中に入り込んだ。ボサボサ頭の墨江ははただでさえボサボサな頭をかきむしると

「なんなんだよ」とやや半泣き状態でつぶやく。

ゴスロリメイドの少女、安龍美弥毘あんりゆみやびは部屋の中央に立った。そんな彼女に墨江は何一つ忠告することもできず台所で立ち往生していた。

「ターゲット補足。実体化のためエクトプラズム実行」

安龍はすうつと息を吸込み、コクンと頷いた。

「祝詞奏上、空間封鎖」

「黄泉の国に跋扈する魑魅魍魎、罪と汚れに満ちた恨み、怨念、汚れをもち手、その地から今ここに顕現せよ！」

部屋の中に風が舞い込んだ。竜巻のように、ゴスロリ少女を中心に渦を巻く。

ゴスロリ少女を中心に、禍々しく青く光る円陣が現れる。窓を閉めきっているはずの部屋に豪風が吹き荒れる。バキバキと、音を立て、周りが見えないタイルのようなものが現れ、この部屋だけがまるで別の空間に映ったように異界へと飲み込まれる。

一体何が。まるで思考の追いつかない墨江は、ただ呆然と立ち尽く

し、光景を眺めているしかなかった。

「そこか！」

安龍は斧を構え、押入れのふすまめがけ振り上げる。

「ちよつと待った」墨江は慌てつて遮った。

「引つ越したばかりでそんな事されたら、弁償！」しかしゴスロリ少女は「うるさいだまれ！」と、これまで観たことないような恐ろしい表情、赤い瞳を向け言い放つ。

その時だった。押入れの藪がスパンと開いた。

「しまった！」

安龍が叫んだその時、ベランダに通じる窓ガラスは粉碎されていた。

「クソッ！」

安龍は、ベランダに駆け寄る。続いて墨江もベランダに立つ。ベランダの下、黒いアスファルトに白いライン。駐車場に止まっていた車の屋根は大きく凹んでいた。

「あーめんどくさッ！」

ゴスロリ少女、安龍<sup>あんりゆうみやび</sup>美弥毘は部屋の真中に寝そべっていた。脱ぎ捨てた靴は床に転がっている。粉碎された窓ガラスの方へ目を向けると、呆然ベランダに立ち尽くし、駐車場を眺める、ボサボサ頭のいたんだ茶髪をした男の背中が呆然と佇んでいる。

「はあっ！」ため息を付いて、体を起こす。

「あのさあ、いつまでそうして現実<sup>リアル</sup>逃避してるわけ？うざいんだけど」

(にしても面倒だな後始)

「ん？」安龍の脳裏に疑問がわく。

(いくら急いでたとはいえ結界内になんてこいつが?)

「ちょっと待って。なんであんだここに居るわけ？」

ベランダに居る男墨江紫音すみえしおんが振り向く。

「はあッ？ここは、俺の家だ！俺の家なんだよ！」

「だから、どうして結界の中に入ってこれたのよ」

「だいたいお前は何なんだ！あの娘は何だ！てゆうかこの状況は？意味不明だ！！」

「あーもうめんどくさい！！」安龍はますます苛立った。

携帯が鳴った。安龍はポーチから携帯を取り出す。画面には「ババア」と表示されていた。安龍はうざったそうに受話器のボタンを押した。

「状況は？どうなってるの？報告もしないで一体何やってるのよ！」スピーカーの向うで甲高い声が怒鳴る。安龍は思わず電話を耳から離す。

「ちょっと聞いているの！安龍！答えなさい！」

「ってるさいな。聞いているでしょうが」

安龍は物凄く鬱陶しそうに言った。

「つか、逃げられたのそつちでもわかってるでしょ？」  
「だから聞いてんのよ！どうしてそんな事になったの！」  
「邪魔が入った」  
「まさか奴ら？」  
「別に、ただの一般人よ。」  
「一般人」以外表現しようのないほどの「一般人」  
「はあ？何で一般人が介入してんのよ！結果はどうなってるの結界は！」  
「知らないよ！なんか結界の中に入り込んでたみたいだし！！」

「だから！どうしてそんな事になってるのって言うてんのよ！」

「あーもう、うざー！」

安龍は携帯を耳元から外すと、ボタンに親指を押しつける

「ちよっと！待ちなさい！」という甲高い罵声が聞こえてが無視して電話を切った。

墨江紫音は怪訝そうに部屋の中央で寝そべっているゴスロリ少女に視線を送る。

(一体何がどうなってんだ!)

窓ガラスは突然割れるし、ベランダの外の車の屋根は減っこんでいるし。そういえばさっき押し入れからあの子が出てきたような気がする。

墨江は押し入れを覗く。上の段は布団以外何も入れないようにしていた。布団は部屋の隅に畳んで起きっぱなしなので現在は何もおいていないはずだ。しかし押し入れの中央に銀色に光る丸い円が置かれていたのだ。

「これは……」

墨江は手に取った。コインの文字は50円、日本国、昭和64年。間違いない。これはあのコインだ。墨江はコインを握りしめた。

「おい、お前!」安龍が唐突に声をかける。

「なんだよ、てっかお前まだいたのかよ!」墨江は怒りを交えながら返答した

「ババアのせいでのど渴いた。なんか飲み物ちょうだい」

少女は寝転がったまま指図する。女王様が、お前は。墨江は怪訝な視線を送った。

「ふざけんな!こっちは土足のまま家の中に上がられるわ、めっちゃくちやにされて、おまけに意味不明な状況に混乱してるんだ!呑気にジュース入れてる暇なんかあるか!」

ゴスロリ少女は墨江の言葉を全く聞かず、立ち上がって、勝手に冷蔵庫からジュースを取り出した。昨日、あの少女のためにかっとおいた缶ジュースだった。

「炭酸じゃないの、ダっさ!ってかい歳したおっさんがオレンジジュースってバカじゃないの」

「それは、俺のじゃねえよ!」



「あっそ」

「さつきからなんなんだよ！お前は！」

墨江は台所のゴスロリの元へ向かいながら言い放つ。

電子音が鳴った。携帯ではなくタブレットの方だ。安龍はすかさずポーチから端末を取り出した。

「来た、来た！掛かりやがったな！ゴキブリ！」

安龍はジュースを飲み干すとそれを放ったらかしにし勢いよく出ていった。

墨江が引き留めるまもなく、玄関の扉は閉じる。

「何なんだーっ」

## 行間一

ただ、ほんの少しだけ、安らぎの場がほしかった。何もいらぬい。食べ物さえほしくなかった。

ただ、ほんの少し、眠りたかった。

汗を流して、眠りにつく。

ただそれだけのことが、あまりにも心地良かった。

何者かに追われていた。それが何なのか。なぜ追われていたのか、全くわからなかった。

記憶がなかった。名前も住所も両親も家族も何もわからなかった。

逃げて、逃げて、逃げて…

公園のトイレ、駅のホーム、閉店後の商店の軒先、道路の降下。

とりあえず雨のしのげる場所に来る日も来る日も一夜を明かした。

時には、野良犬、時には中年の男、時には年下の中学生に襲われそうになり、警察にも何度も訪ねられ、そのたびに

逃げて、逃げて、また逃げて…

食事は何とかなった。わずかな金銭が携帯にチャージされていたのだ。

けれども汗を流したかった。何日も風呂に入っていない。

せめて一回だけでも。けれどもホテル台を払えるだけの残高は、もうなかった。

夜、誰もいないことを念入りに確かめて、公園で水を浴びた。

上半身だけ脱ぎ捨てた。さすがに全部脱ぐのは躊躇った。初夏とはいえ、夜に水を浴びると凍えるような寒さだった。スカートがぬれてしまったがかまわなかった。

懐中電灯の光が見えた。はっとして、身をかがめた。追っ手だった。慌ててブレザーを羽織った。逃げるしかない。

ブラウスも、下着も、携帯も置いてきてしまった。

もう、ダメだ。終わりにしよう。

たどり着いた、古い神社軒下で一夜を明かした。食料はもう手に入らない、いずれ死ぬ。

運良く、一度おにぎりをくれた人がいた。服もくれたが、着替える気にはならなかった。

雨が降る。

たどり着いたのは、夜のマンション。最上階まで上ると、廊下の先から声が聞こえた

中年ぐらいの女の人と若い男の人が向かってくる。怪しまれないよう、ごく自然にすれ違う。幸い暗いせいか格好を見て不審に思われることはなかった。

一番奥の部屋の前で立ち止まる。ドアを背にして腰を下ろす。立ち上がる気力もない。

気がついたら部屋の中にいた。誰も居なかった。どうやって入ったのかはわからない。

部屋の電気はつけなかった。

黙ってシャワーを借りた。お湯は出なかったが水浴びることができた。

それだけで満足だった。

布団が置いてあった。机と、冷蔵庫。部屋の中に置かれた荷物はそれだけだった。最低限の引っ越し。そんな印象だった。

布団で眠りについた。何日ぶりだろう、いや初めてかもしれない。こんなに、心地よくて、幸せな、時間。

ここで終わりにするつもりだった。

けれども、欲張った、一日、もう一日と欲張った。その結果、迷惑をかけてしまった。

ごめんなさい。

本当に、

ごめんなさい……

少女は公園の遊具の中、かろうじて雨がしのげる場所にうずくまっていた。

雷が鳴った。雨が降る、そんな予感のする夜空だった。

これからどうしようか。携帯はもうない。食料を調達するのは難しい。風呂に入ることもできない。そして、あの人の元には絶対に戻れない。少女は途方に暮れた。

残飯をあされば、しばらくは何とかなるかもしれない。けれども追われ逃げ惑う日々は延々と続く。そこまでして、そんな苦痛を味わいながら生き続ける理由はもうない。

少女の元に子犬がやってきた。首輪が付いている。飼い犬だろうか、茶色い、小さな犬だった。もしこのまま飼い主があらわれなかつたら一人で生きてゆくことなど、とうてい出来ないだろう。そんな弱い小さな犬だった。少女はそっと抱きかかえ、頭をなでた。

「迷惑、かけちゃいましたね」

「一日、一回だけのつもりだったのに……」

少女は小声でつぶやくよう、子犬に向かって懺悔をした。

「ダメだってわかってっただのに……どうして……」

視界が涙に濡れる。声が震える。少女は子犬を抱きしめた。あの人に甘えてしまった自分を悔いた。そんな弱い自分を嘆いた。こみ上げる悲しみをどこにぶつければよいのか、少女はクンクンと鳴く子犬をぬいぐるみのように抱いた。

砂を踏む音がした。足下が月明かりに照らされた。少女は八つと

すみえしおん

墨江紫音は暗くなった住宅街を走っていた。コインを握りしめる。あの子を探すべきか否か。出た目は裏だった。

(けどな、なんでだろうな……)

ゴスロリの少女に部屋を引つ掻き回されたが、どうもあの娘のことが気になる。探す資格などないのかもしれない。もしかしたら迷惑なのかもしれない。そう思ったが、じっとしていらなかった。

(まあ、めちゃくちやになつた部屋とか仕事とか、現実逃避のつてもあるけど)

そんなことを思いながら、薄暗い住宅がいを走り回る。

何故か白いワゴン車をよく見かける。テレビ局の中継車のようにいくつもアンテナがついていて、周りには上下白の作業服のような格好をした男たちが何人もいた。管理局の職員だ。なんでも凶悪犯罪者が出たとかで臨時の検問所をあちこちに設置しているらしい。

何となく嫌な予感がした。犯罪荷巻き込まれて、最悪な結末を迎える。そんなドラマチックはごめんだ。もしかしたら管理局荷保護されているのかもしれない。そうであれば良いのだが、しかし墨江は足を止めることができなかった。

(まさか危ないやつに襲われているところ間一髪助けにきましたよーってなチープな少年漫画的登場なんてねえよな！)

住宅街を抜けて、大通りを渡る。自転車であればよかつたと思うほど遠くに来てしまった。検問は大通りでも行われていた。帰宅ラッシュの時間を過ぎていているのに、車が列をなして進まない。墨江は横断歩道を渡り道路の反対側の細い脇道へ向かう。

細い道路に入ったところだった。またか。管理局の車が止めてあった。しかし、検問を行う職員の姿がない。

不思議に思いゆっくりと近づいた。

「これは」

作業服を着た男たち、すなわち管理局の職員が気を失って倒れて

いる。もしかしたら死んでいるのかもしれない。墨江はぞつとした。誰がこんなことを。例の凶悪犯罪者か。墨江は齒がみする。とにかく、一刻も早くあの子に再会しなければ。嫌な予感さらさら増す。当てもなく探しても無駄だ。どこだ。路地裏、店の軒下、公園、駅のホーム。管理局がこれだけ出ているんだ。保護されていないとすれば見つかりにくい場所にいる。なら、公園か路地裏。

墨江はコインを握る。どっちだ。公園なら表、路地裏なら裏。墨江は素早くコインを投げた。表。根拠などない。これはどちらから探すべきか、その順番をきめたにすぎない。墨江はそう言い聞かせ、とりあえず近くの公園にむかうことにした。

その足音に、少女はボサボサ頭の男の優しい姿を想像した。

「そんなところにいたのか」

だが、その希望はもろく無残に壊された。

「つつたく、手間かけさせやがって！」

その声とともに、暴風が少女のいる遊具を襲った。少女はとつさに子犬を胸に抱えたまま外に転がり出る。

コンクリート製の遊具はあっという間に吹き飛び、周囲に破片を飛び散らす。少女は息を切らし、転びそうになりながらも何とか立ち上がる。胸元の子犬が、きゃんきゃんと恐怖荷おびえながら鳴く。

「ってゆうか、まさかと思うけど、あのポケナスがあんたを召還したってわけ？」

不気味な声をの元を辿る。そこにいたのは、自分より少し年下とといった感じの、女の子だった。ただし、その腕には持つてる本人の身長の八割荷達する長い棒の先に、重厚感たつぶりの、ただ木を切るだけにしてはあまりにも大げさすぎる斧。それはまさに死に神の斧そのものだった。そんな物を携えている。服装は暗がりによく見えないが、フリルがついたものの、かわいらしさよりはむしろ毒々

しさを強調する、悪魔のファクションだ。それがいわゆるゴスロリというファクションと呼ばれることを少女は知らない。

(なんのこの人……)

少女は言葉を失う。

「まあいいわ、さつさと死んでくれる？てかあんたもう死んでるけどさ」

言い終わると同時にゴスロリの少女は地面を蹴る。重力を無視した弾丸のように加速し、あっという間に目前に迫る。そして、不気味な死に神の斧を、そのまま勢いを殺さず振り翳した。少女は間一髪、身をかがめ回避する。少女の黒髪が、斧の刃に触れて切れる。直後、その場にある物すべてをなぎ倒すような暴風が砂を巻き上げ襲う。少女は地面を何度も転がる。公園のゴミ箱の空き缶が背中をたたく。

ゴホッ、肺の空気をすべて押し出すような衝撃に身もだえしながら、少女は何とか立ち上がって、子犬を必死にかばい、少女は逃げ惑う。

「あーうざいつ。化け物のくせに、何そのヒューマニズム。きもつ！」

さつさと死ね！振り上げた斧が少女の顔面めがけて飛び込んでくる。絶体絶命。

なんとか、この子だけでも逃がさなきゃ。少女は身をすくめ子犬を逃がそうとする。

けれども斧が少女の首筋めがけ思いっきり！

キーツ！

甲高い鉄のぶつかる音がした。手応え確かにあった。けれどもそれは人間のものではない。

「なっ！」



安龍美弥毘は驚いた。首筋に熱が走る。手で触れて確かめると、赤い血が指に張り付いた。攻撃対象の少女に視線をやると、首筋に当てられた、斧が、まるで鋼鉄の壁にぶつかるよう、全く食い込んでいない。

安龍はすかさず斧を引く。そして斧の刃を指でなぞる。わずかながら刃こぼれをおこしている。目の前の少女に目をやる。特に何の変化もない。だがしかし、瞳の色が明らかに違った。それはまるでこの世の物とは思えないほど、冷たい氷のような、青く光る瞳。やがて少女の黒髪が光り始めた。黒くつややかな長い髪が、月明かりをそのまま照り返したような、銀色に変わる。

少女はゆっくかが身、子犬を地面においた。そして逃げるよう促した。

「よくも！」

安龍は刃こぼれした斧を強くなぞった。指が切れて赤い血が噴き出したが、かまわなかった。

「よくもやってくれたな！このゴキブリやろう！！！！！」

安龍はこみ上げる前進の怒りを斧にぶつけた。その気迫だけで周囲の暴風が吹き荒れた。公園の木々を揺らし、転がった空き缶、コンクリート、木の破片を吹き飛ばし、少女めがけて突進する。

重力を無視した、加速で少女に一気に迫り、その勢いを殺さず斧を振り上げ、容赦なくたたきつける。

対して、少女は銀色の髪のまま、無言で、無表情のまま、かわし、あるいは受け止め、後ろへ、後ろへと下がってゆく。

「この！このツ！このおおおツ！」

怒りのまま斧を叩きつける。当たるとび甲高い金属音が鳴る。とても生身の人間の体ではない。

（クソウ！どんな霊術だ！こつは一体何！）

少女が公園の端に備え付けられた自動車進入防止用の鉄パイプにたどり着く。

追い詰めた！安龍は渾身の力で斧を振り上げる。

少女の姿が消えた。

斧が鉄パイプを豆腐のようにいとも簡単荷切り裂く。安龍は周囲を見渡す。けれどもいない。

「そこかッ！」

頭上から、少女の足蹴りが襲った。安龍は間一髪、かわして斧を振り回す。少女には当たらない。

「チクシヨーーッ！」

安龍の頭に血が上る。斧を振り回し、足蹴りを食らわせ暴風をも有無凄まじい気合を打つ。しかし銀色の髪をした少女はそれらすべてを顔色ひとつ変えずに交わす。

安龍は視界の端に何かを捉えた。安龍はニヤリ不敵な笑みを浮かべる。そしてポケットから小型小銃を取り出し躊躇なく引き金を引いた。

パンツ！

夜の公園に、銃声が響いた。

銀色の月明かり荷照らされて黒い液体は公園の砂に沁み込んでゆく。  
打たれたのは少女ではない。さっきの子犬だった。

「どうよ、ちつとは動揺したでしょうが！」

斧の例よ！安龍は吐き捨てている用に言った。銀色の髪が光を失う。少女は呆然とし、力を失い、その場に座り込んだ。

「なにそれ？シヨックなの？化け物のくせに、小動物かばってバツカじゃないの」

「さっさと死ね！」

安龍は座り込んだ少女の首筋に斧の刃を当てた。少女は何も言わない。暗がりでは表情は見えないが、大方顔面蒼白状態なのだろう。いい気味だ。安龍は不敵な笑いを浮かべた。

「安心しな、その下等生物には墓ぐらい作ってやるよ。もっともあんたはここで消えてなくなるだけだから墓なんてないけどさ」  
処刑の時間よ！安龍は斧を振り上げた。

「づああああああ」

安龍の手が止まった。

「は、離れる！」

男の叫び声でした。

安龍はハツとして手を止めた。

墨江すみえしおん紫音走っている途中、稲光のような閃光を目にした。と同時に轟音が耳をつんざく。轟音の正体が銃声だと判断することはできなかった。銃声なんてものを間近に聞いた経験は皆無なのだ。

無我夢中で走ると公園荷たどり着いた。自販機や、木々がなぎ倒され、公園のそばに止めてあった車さえ横転している。ただ事ではない。

シルエットのからあの少女だと判断した。そのそばには不気味な斧を振りかざそうとしているのは間違いなくあのゴスロリだ。

「は、離れる！その娘からはなれる！」

墨江は横倒しになった自販機のそばから、声を震わせながら叫んだ。

手に持っているのはコンビニで買った100円の傘。雷がなかったので雨が降るかもしれない。そう思って持ってきたのだ。

こんな物が何の役に立つのか。武器にはあまりにも頼りない傘を前に突き出しながら、一步、一步と足を震わせながら近づいてゆく。



たところで

「行き止まり！」

ブロック塀が二人の行く手を阻んだ。ゴスロリメイドは斧を引きづりながら、ゆっくり近づいてくる。昼間あったときは様子が違う。何か物凄い殺気のようなものを感じる。髪は闇と一体化するほどドス黒い。白いはずの髪飾りさえ真っ黒に見える。それに対応するよう、瞳が真っ赤に染まっている。左目にはなにやら怪しげな紋様が浮かんでいる。

「何でこんな事するんだ！畜生ーッ！」

墨江が叫ぶ、少女は息を切らして何も言わない。

「黙れ腐れ妖怪！さっさと死ねえええ！」

ゴスロリメイドの少女が地面を蹴る。弾丸のように飛び込んでくる彼女を目にして、墨江は少女をかばった。

ゴオオオオオオッ！

突如、民家のブロック塀が破られた。家の中から悲鳴のような声が聞こえた。すると、白いバスのような大きなワゴン車が突っ込んできた。

墨江と少女はブロック塀になぎ倒された。

粉塵で視界の悪いなか、かろうじて市の徽章を確認する。管理局だ。助かった。墨江は安堵を覚えた。

ワゴンの扉が開いた。白い装束に身を包んだ、職員が、次々と降りてくる。

「助けてくれ！斧を持った女に追われている！！」

墨江は、よろけながら立ち上がり、両手を広げて保護を懇願した。「だめです！！」

少女が悲鳴のように叫んだ。墨江のワイシャツの首をつかみ、無理矢理地面に伏せさせる。直後、管理局の男達は、ライフルのよう

な物を構え、墨江達に照準を向けた。

墨江は呆然とする。思考が追いつかない。

だが突然、閃光が真横に走った。白いワゴン車の中央部がレーザービームを浴びたように青白い光を放ち一刀両断。その余波と残骸が職員達の腰を殴打し、次々と地面にひれ伏してゆく。

直後墨江は立ち上がった。この上ない身の危険を感じたのだ。

「こつちだ」少女の手を引いて車が突っ込んできた、壊れた民家に踏み込み走り出す。

瓦礫によるめきながら、墨江達は走った。車が強引に突っ込んできたせいか民家はめちゃくちゃに壊れている。瓦礫で足場が悪く何度も転びそうになるが、少女の手を引いて全速力で走り抜ける。

「きゃああつー！」

少女が悲鳴を上げた。

突然、視界がスローモーションにかわる。

ブーメランの世に飛んできた斧が、少女の、背中を切り裂く。

赤い血しぶきが、宙を舞う。

そのまま、崖のような坂を転がり落ちる。墨江は少女の手を離さなかった。

草をなぎ倒し、木の枝を折り、石ころをはね飛ばし転がってゆく。

背の低い垣根のような街路樹にぶち当たって、ようやく二人は止まった。

「緊急連絡319号車、全滅です！」

「こちら223号車、ターゲット捕獲に失敗、職員は全員負傷！重傷者多数！」

「38番隊、ただいま交戦中、ぎゃああああ！ザザザザッ！」

七堂幸は白いワゴン車の中で、けたたましく警戒を知らせる赤いアラート文字を眺めていた。スピーカーから聞こえるのは緊急信号ばかりだ。ターゲットは未だ捕獲できていない。

全く情けない限りだ。やはり一介のサラリーマンにこういった軍事行動は不向きか、七堂は心底失望のため息をついた。

「い、いかがいたしましたよう。司令……」管理局職員が声を震わせながら言った。

「作戦は継続だ。遠くには行ってないだろう」

「しかし、我々の重火器が全く通用せず、すでに八割が壊滅状態です」

「だからなんだというのだ、我々には任務を遂行する義務がある」

職員はまだ何か言いたげだったが、七堂はめがねを外して目で合図した。従わないならおまえを殺すぞと。

（それにしても、死に神か。おもしろい、そんな物がこの世にいるのだとすればあながちあの教祖の言っていることも嘘ではないかもしれない。もつとも、そんな物が本当にこの世に存在するとはどうてい思えないが）

「コードB9993を発令しろ、該当区域を緊急封鎖。名目は巨悪犯罪者潜伏の疑い」

管理局に与えられた権限は絶大だ。「疑い」それだけの理由で市民の財産権を一時的に停止することができる。すなわち戒厳令が敷

けるといっわけだ。

七堂はニヤリ笑った。

「死に神か、おもしろい。ならばこの目で直に確かめてやるっ」

ゴスロリメイド服を着た少女、安龍美弥毘あんりゆうみやびを中心に、周囲数メートルがなぎ倒されていた。ソニックブームのような鋭いカッターが一瞬に周囲の物すべてをなぎ倒したのだ。

辺り一面がれきの山だ。アスファルトはえぐれ、道路標識、電柱はすべて切断されている。そこにたっている物は一つたりとも存在しない。その少女を除いては。

白いワゴン車もその面影を失っていた。三分の一は車輪を地面につけたままとどまっている。人を乗せる車体の部分は横倒しになり、椅子や配管などがむき出しになっている。その車を囲むよう、白い装束を着た男達が倒れてる。死んでいるのか、意識がなく倒れているのかわからない。直撃を免れてもその余波だけで十分命を断てる、それだけ恐ろしい攻撃だった。

安龍美弥毘あんりゆうみやびは手を高く上げる。ブーメランをつかむよう、舞い戻った斧をつかむ。

先ほどから投げではつかみ、投げではつかみ、を繰り返している。無差別攻撃。それ以外の何物でもない。

男は震えながら銃を構えた。周囲に飛散した瓦礫に身を伏して、かろうじて命を守っていたのだ。

瓦礫の隙間から、銃を構え、狙撃の体制を何とか整えようとする。このままでは、いずれ見つかかり殺される。そう思ったのだ。

男は意を決して引き金を引く。だが、そのわずかな殺気を感知したのか死神と化した安龍は地面を蹴り、弾丸の速度で男の身をかる





もないように、静かに。

バタリ、男が地面に倒れる。

ゴスロリの少女は振り返ることなく、闇に消えていった。

墨江すみえしおん紫音はもつろうとしながら街路樹の垣根に身を伏していた。

目の前にはタイル張りの歩道があり、その向こうには片道3車線の大通りがある。

顔を上げれば、崖の上、鋭い刃で切られた木や草の断面がいくつも確認できる。

「おい！しっかりしろ！」

声を殺しながら、肩を抱いた少女を揺さぶる。

「おい！」

少女の背中に回した手に、べっとり生ぬるい液体が貼り付く。傷口はかなり深い。背中の、肩胛骨のあたりをズサリ、えぐられている。少女の腕がつかっているのかさえ怪しい。墨江はぞっとする感触に嗚咽した。

落ちた崖の上を見上げる。落差は五メートル弱、45度を超える急斜面であったためか、ゴスロリ少女そのまま追ってこなかったようだ。

目の前の車道を赤いランプをならしながら進む白いワゴン車が何度も通り過ぎていった。少し離れた場所にも止められている。

男達がひっきりなしに車から出入りしてはあたりを右往左往し、なにやら切迫した様子で無線か携帯か何か連絡を取り合っている。

このままじゃ見つかるのも時間の問題だ。墨江は身をかがめたまま、何とか場所を移動しよう少女を抱きかかえゆっくり進む。少女の息が弱い。

「だっ」

少女の目がかすかに開いた。かすかな声で言う

「だ・・めです」

「黙ってる!」

「お・・・いて・・・行つてくだ・・・」

息を切らし、切れ切れに、かすかな声で言う少女。墨江は拳を握りしめた。

「立てるか?」

白い作業服を着た男達の姿が消えた。それを見計らって墨江は立ち上がる。少女の肩を抱きながら、墨江はゆっくり、ゆっくり進む。少女は支えを失えば今にも倒れそうだ。虫の息。頼りない呼吸と、背中に回した手の間からどろり流れ落ちる失血。

大通りにできれば、管理局に捕まる。このままとどまっても捕まる。そしてなにより、今度あのゴスロリに見つかれば即死。

「どうすりゃいい」墨江は悪態をついた。

首筋に金属筒のような物が当てられた。

「騒がないで」女の声だった。少女の物ではない、もちろんゴスロリもない。もっと大人の落ち着いた声だった。

「おとなしくして、悪いようにはしない」

墨江の額からいやな汗がにじみ出る。

「携帯を。ID追跡機能があると厄介だから」

言う通りにするしかない。墨江はポケットに手をつ込み、携帯を取り出して、女に渡した。女はそれを片手出操作して電源を切った。

女は首を振って。合図する。車道のすぐそば、止めてあったファミリーワゴン、そこに乗れと指図した。墨江は何一つ抵抗できず、女の指示に従い少女とともに車に乗り込んだ。

墨江すみえしおん紫音は車の後部座席からヘッドミラーに映る、女の顔を覗みつける。暗がりではつきりとはわからないが、色素の薄いブロードヘア、青い瞳、彫りの深い目鼻立ちのはっきりした西洋人であることが伺える。真夏だというのに律儀に上下黒いスーツ、タイトスカートというフォーマルな格好をしているが、靴だけはブーツという少し不自然な格好をしている。

彼女の話す日本語に不自然な訛りはない。極めて流暢な日本語を自在に操っていることから、日本での生活が長いのだろう。

(もしかしたらどこかの諜報機関のヤバイ職員とか)  
「冗談じゃねえよ」墨江は吐き捨てる。

「上野木かみのぎだけど、白鳥はいる？」

女の名前は上野木かみのぎというらしい。ハーフか、あるいは国際結婚か、墨江は思った。

「はい、シスター。白鳥氏はさつき飛び出していきました」

電話のスピーカー越しに聞こえた声のは子供の声だった。

上野木はしかめっ面をする。

「負傷しているわ。沢野先生はいるの？」

「いますよー」と、今度は緊迫感にかけるのんびりとした女の声が返ってきた。

「まあ念のためと思って用意してたけど、あんまり道具ないのよー」エンジンの回転音が上がる。車は唸りを上げて加速する。

墨江は少女を抱いたままなんとかこの場から逃げ出そうと、扉のロックの解錠を試みる。

「無駄よ、こっちでロックを掛けているの。それにこのスピードで飛び出せばあなたもはなんとかなくてもその子は確実に死ぬわ」

「なんなんだよお前ら！」

墨江はヤケクソに叫んだ。こうしているうちにも少女の息はますます弱くなる。

モタモタしていると死んでしまうかもしれない。墨江の額に嫌な汗がにじみ出る。

「ごめなさいね。こんな乱暴な方法はとりたくなかったんだけど」と区切つて、ステアリングを切る。

「ぼやぼやしてたら間に合わないからッ！」

車はかなり早い。おそらく時速八十キロを超えているだろう。明らかに法定速度違反である。そのため車体は大きく傾き、交差点を横切る。

封鎖されているのか、車はほとんどなかった。ラジオからは「現在南ブロック、第二十四地区とくべつかいげんれいに特別戒厳令が敷かれています。主な幹線道路は通行禁止、該当区域内の方は自宅から出ず、外にいる方は速やかに近くの建物に退避してください。繰り返しお伝えします。現在凶悪犯罪者……」というところで女はラジオを切る。

（凶悪犯罪者だと？こいつもか！）墨江は歯噛みする。

路肩には白い大きなワゴン車と、赤く点滅したパトカーが何台も連なっている。墨江は警察がサイレンを鳴らして追いかけてくる光景を期待したが、パトカーも白いワゴン車も全く追ってくる気配がない。

目前に踏み切りが迫る。遮断機が下りて、信号機が赤く点滅しサイレンが鳴っていたが、かまわず突進する。車の速度は更に上がる。バンパーに遮断機がぶつかり、ゴトンと音を立てて折れる。視界の端をしろい光が照らした。直後、警笛が鳴り響き、きーっという金属音が耳をつんざく。列車が急ブレーキを掛けた時の音だ。

列車が迫ってくる。それらをすべて無視し、踏切を渡り切つて、また交差点にさしかかる。

ハンドルを切った車は、一台がかろうじて通れる細い脇道へ入る。

住宅の目の前をすれすれに、猛スピードで通り抜けると、ネオンサインがほとんどなく、街灯と月明かりだけしかない薄暗い場所にたどり着いた。

いくつもの木が生茂る雑木林、木々が風に揺れている。駐車場のバーをそのままつききり、車が数十台止めれる神社の駐車場にたどり着いて、甲高い音を立てながら車は急停車する。

墨江の体が大きく前のめりになって前の座席にぶつかりそうになるが、少女をかばいながら何とか耐える。外から見ていけば、火花がちり、タイヤから煙りをはいている状況に呆然とするだろう。

「着いたわ」上野木が短く告げた。

彼女は後部座席の扉を開き、出るように促す。墨江は喧嘩慣れしているわけではない。だが従うはずもなかった。すかさず肘鉄砲を食らわせようと試みたが、上野木はあっさりそれを受け取り、腕をねじ伏せた。

「痛たたたああッ！」

「ごめんなさいね、乱暴に扱って」半ば呆れ声だったが申し訳なさそうでもあった。

強引に車の外に引きずり出された墨江はその場によるめいて尻餅をついた。

「沢野さん！」

木々の陰に隠れてい別の女のシルエットが現れる。墨江はよろけながら何とか体制を立て戻す。すぐに少女を助けなければならぬ、けれどもあの女は飛び道具を持っている。うかつに近づけば銃弾を浴びせられるが、焦っていてそこまで思考が回らなかった。

「沢野さん！早く！」と上野木は別の女に向かって叫ぶ。

「はい」と短く答えたのは、巫女装束の女だった。身長は160センチ台後半、暗がりによく見えないが、ショートヘアをして、ス

「ツ姿の女とは対照的に典型的な日本人の目鼻立ちをしていることが伺える。歳は十代後半くらいに見える若い女性だ。」

「巫女服みこの女は手に何か箱を抱えている。救急箱か、まさかと墨江は思った。その程度の手当ですむはずがないからだ。彼はべつとりと血のこびりついた自分のてを握りしめる。」

「沢野という巫女みこは一直線に車の後部座敷に向かい、そのまま上半身だけ車の中に入れる。」

「おい何してる！」  
墨江は車の中に入り込もうとしている女の腰に手を回し、押しつけようとした。

「きゃッ！」  
いつもならどきまぎしていしまう、少女のようなかわいらしい声を上げたのだが、かまわず女を押しつけ傷だらけの少女の元へ駆け寄る。

「どきなさい！」  
今度は上野木かみのぎが無理矢理墨江をどかし、地面に倒れたところ銃口を向ける。

「相変わらず野蛮なこと、よいしょつ」といいながら沢野は車に乗り込む。

「懐中取って」とバトンを受け取るような格好で上野木かみのぎに指図する。  
上野木は銃口をむけたまま救急箱のような箱から懐中電灯を取り出して沢野に手渡す。

ほんの数秒、沈黙。誰も言葉を出さなかった。銃口を向けられて身動きをとれない墨江はもちろん、スーツの女も、車の中に体をねじ込んだ巫女服みこの女も。

沢野はゆっくり車から降りると、深呼吸をした。  
「ここでやるわ。今動かすと危ないから」

懐中電灯の光が不意に巫女服みこの女とスーツの女の顔を照らした。

二人とも表情を曇らせていた。

「それから、この傷」と巫女服みこの女があごで合図し、スーツの女が車内に上半身をねじ込ませる。上野木かみのぎは、銃を仕舞う。何やらとてつもなく不快な表情を浮かべ、車から離れた。

「大丈夫。この子は必ず助ける」

沢野は車の中に体をねじ込んだまま独り言のように言った。

隣に止めてあった車のヘッドライトが突如点灯した。上野木かみのぎがちよつどファミリーワゴンの横から光が当たるよう、ライトの光を当てたのだ。

「大丈夫、この子は必ず助ける」その言葉は妙に説得力を持つ、力強いものだった。

しかし墨江は「ふざけんな！あんな状態でどうするってんだよ！」と巫女服みこの少女に詰め寄った。

「ごめん、早くしたいから、話なら後」

「私は、社務所に戻って装束を整えるわ」

それだけ言い残して上野木かみのぎは足早に駐車場から消えて行った。

沢野は何も言わず、救急箱を拾い車の中へ。墨江も駆け寄るがびりびりと服を破る音、そして破られた服の破片がヘッドライトに照らされて赤黒くぬれたシャツを見るや、言葉を失い、力が抜けた。

「そこにいると邪魔。ただでさえ暗いの」

「なに、やってんだよ」

「何って、縫ってるのよ。動脈まで損傷してるから、早く止血しないと出血死よ。霊障による傷は祈祷で沈められるけど、物理的に損傷している部分は処置しておかないと助からない」

「……」

墨江は言葉を継ぐんだ。車の中に半身入れた巫女服みこの少女は何か



処置を淡々とこなす。

車の中の少女は抵抗する様子もなく、悲鳴を上げることせず、ただただ、座席に転がっているだけだった。

七堂幸は現場に急行した。役立たずの部下どもに任せておける事態ではない。

（せめて退役軍人、元自衛隊員といわず警察機構の人間であれば役に立っただろうが、管理局にいる連中はどいつもこいつも小役人ばかりで、戦場では赤子同然だな）

ここに辿り着く前にも幾つか現場の惨状を目の当たりにした。倒された職員の大半が気絶している。何度も打ち付けられてひどいダメージを全身に負っていたものも少なくない、首を鋭い刃物で掻き切られ虫の息だったものもいたが、そういった重症者はあえて射殺しておいた。その方が本人のためだろう。そう思ったからだ。

暴風のように周囲をなぎ倒すサークルは小規模な物で直径五メートル、大きな物、公園など障害物のない場所では二十メートルにもおよぶ。空間の破壊と称する程のものだった。

（これを、たった一人でだと……）

職員達の報告からはとても想像できない。もしも彼がこの世の物理の法則をねじ曲げる存在という物を認知していなかったら、とても信じられないと絶句していただろう。

だが七堂は恐怖していなかった。

（すばらしい、確かにあるのだ！）

ともすれば武者震いのような、そんな熱い感情が全身に広がる。七堂はめがねを外してその惨状を一望する。砂埃がエレガントな黒いスーツを汚していたがかまわなかった。

髪をかき上げ、額をあらわにし、めがねをかけ直すと、わずかにネクタイをゆるめる。一步、一步ゆっくりと足を進める。

## 中央公園。

ここは本来大きな公園だ。休日には家族連れが遠くからわざわざやってくるが、入り口の門は銃弾でいくつも穴が開き、コンクリート塀は破壊されている。戦場である。

傾いて路上に転がった銀色のアルミ看板で一度立ち止まったがまたゆっくり進む。

公園のすぐとなりの大通りには、戦鬪の爪痕とおぼしく、鋭い刃物の傷が道路を掻き切られ、車道と歩道を分け隔てる柵は切断され散乱し、白いワゴン車は横転していた。

当然、そのそばにも荷数人が気を失って倒れている。特に傷ついている様子もないことから、一撃で気絶させられたのだろう。相手にする程でもない雑魚と判断されたのが幸いだったのかもしれない。

本来緑多く、植木と花壇に囲まれた、庭園にさしかかったところで足が止まった。

なぎ倒された木々、横転して、粉々に崩れた花壇。その中央に、月明かりを浴びた怪しいシルエットを確認したからだ。

「おまえか」七堂は臆することなく声を掛ける。

振り向いたのは地獄のような赤い瞳、闇に染まる漆黒の髪をした、ゴスロリ呼ばれるワンピースのドレスを着た少女だった。身長もさして高くない。せいぜい150センチ台前半くらいだろう。子供かと七堂はつぶやく。

「これはまた」

七堂は周囲を見渡した。

ゴスロリの少女ゆっくりと七堂の元へやってくる。

「どこだ」開口一番、少女は言った。そして斧を振り上げる。

「あれのことか、残念ながら所在不明だ。我々として足取りをつかめていない」

それを聞くや、少女は斧を下げ振り返り、歩き出す。

「横やりが入ったそうさ。どこのエージェントだか」

七堂は独り言のように言い放つ。

「まあ俺にとってはどうでもいい。むしろ俺の興味は君だ」と言つて、

七堂はスーツの中に隠した金属の固まり、すなわち銃を取り出した。

ゴスロリ少女は振り向く。

「おっと、いくらおまえでもこの距離からは避けられない。それに、これには実弾は入っていない。何でも。」

ゴスロリ少女の姿が消えた。

「なにッ！」

ほんの一瞬、少女は七堂の背中に回り込みんだ。七堂はとつさに回避行動をとる。もし彼がただの一般人であればとつくに切り裂かれていただろう。だが彼は元軍人だ。普通の人間よりは殺戮の場に慣れている。そのため間一髪、命を守ることができた。それでも、無傷ではいられなかった。左肩にあつい亀裂が走る。すぐに手当てすればどうにかなるレベルの傷であったが、七堂は驚きを禁じ得なかった。

「さすがだな」と、しかし七堂は余裕の笑みを崩さない。

二人は相手の隙をうかがうよう向かい合いにらみ合った。

「一応教えてやる。こいつは霊気銃というらしい。なんでも霊体に反応する光線が出るらしいが、君に出会うまでこんなオカルトグッズが必要になるとは思わなかったよ」

七堂は引き金を引いた。緑色に光る光線が走る。ゴスロリの少女は地面を蹴り光線をかわす。髪がほんの少し焼き焼ききつた。

「なるほど、効き目はあるようだな」七堂は改めて感心した。

ゴスロリ少女は宙を舞う、真上から、斧を振り落とし、容赦なく七堂に襲いかかる。足しいて七堂は光線を少女めがけて何度も放つ。よけてはうち、打ってはかわし、そのたびに的を失った光線は地面や壁、あたりに転がった木々やコンクリートの破片を焼き切るよう溶かす。

同じく、ゴスロリ少女の斧は何度も地面を割り、コンクリートのかたまりを切り裂く。それは刃のあった部分に限らず、その余波の衝撃はさえ凶器となりあたり一面の物というものを切り裂いてゆく。「私の目的を言ってみよう、力だ。この世の物理の法則をねじ曲げる力がほしい！」

七堂は誇らしげに宣言をし、目前荷迫る少女めがけて光線銃を撃つ。少女は目の前で消える。残像か！七堂がそう思ったとき、視界端が少女の斧をとらえた。

まずい！

七堂は体をねじらせよけようとする。間に合わない。脳裏に初めて恐怖がよぎる。

ザンツ！

鼓膜を破るような金属音が響いた。視界に映ったのは、目の前の斧の刃。しかし、斧は制止していた。目を凝らすと刃の少し下、柄の部分に人の手があった。少女の物ではない。七堂とゴスロリの少女の間に割り込むよう。一人の男が立ちふさがっている。もう片方の手は七堂の持つ銃をとらえている。ちょうど手をクロスさせるよう。両者の武器を封じた男は、斧をとらえる手を震えながら低い声で言った。

「美弥毘、やめろ」

七堂はバランスを崩し後ろ尻餅をついた。

「美弥毘、ええ加減にせい」

男は上下黒いスーツを着ていた。表情は見えない。光線銃を遠くへ投げ捨てると、片手のまま少女の持つ斧を強く握りしめる。両者

の手足が小刻みに震えるところを見ると、両者ともにありったけの力を注いでいるに違いない。

（あれだけの力を、片手でだと……）七堂は啞然とする。

「これ以上は、体が持たんぞ！ ええ加減にせい！」と男が叫び、強引に斧少女から引きはがした。

斧に向けた力の矛先が抜けた少女は後ろに倒れかかるが、男は少女の手を引いて支えた。

七堂その隙を見逃さなかった。光線銃とは別の小型小銃をとりだし、男の額めがけて発射する。

だが、男は銃の軌道をふさぐよう斧を振り銃弾を地面に叩きつけた。

七堂は驚いたがさかさず二発め、三発目と引き金を引く。

斧は間に合わない。今度こそ男に着弾するはずだ。七堂はそう思った。しかし、今度は空気の弾幕、いやバリアのような物が銃弾軌道をそらした。

一瞬そこに暴風が吹き荒れる。

「物理の法則をねじ曲げるのは、御法度やけどな」

男は低い落ち着いた声で言う。

「正気に戻れ」

思いつきり、少女のほほを平手打ちした。

「帰るぞ」

少女は両手の力を失った。右腕を男に引かれ、もう片方ををだらし地面向かってぶら下げたまま、ゆっくり歩き出す。

「待て！ おまえ達は！」

「悪いな。お前の願いはかなえてやれん」

男はそう言い残すと闇へ消えた。後を追うよう掛けて行ったが姿はもうなかった。

七堂は夜空を見上げた。

「フフフツ」不気味な笑い声を上げる。

「ハハハハハハハハハハッ！」

こみ上げてくるおかしさに笑い声をこらえきれなかった。この世の物理を無視する、強大な力。確かに存在する。存在するのだ。

「ならば手に入れてやろう。いかなる手段を以てしてでも」

白鳥大社しろとりだいじやは千八百年の歴史を持つ由緒正しい神社だ。この界限では随一の規模を誇る、一宮神社で、少し前までは全国各地から参拝客が訪れる観光スポットであった。

特別市は宗教的、オカルト的なものをことごとく否定した、それは市の利益とならない納税義務のない法人格を認める義理はないという、徹底的な利益至上主義によるものであった。

白鳥大社も例外ではなかった。お賽銭や祈祷によって玉串を受け取ることは特別市の靈感商法禁止条例に違反する。よって、この神社の収入はほとんどなくこれまで寄付金だけで運営してきただ。だが、とうとう市民税ロイヤリティを払えなくなった。神社は強制売却の対象になった。

そんな白鳥大社を白鳥朱雀しろとりすずくは買収する救った。そのため神社の神職達は彼のことを宮司くわじとは区別して敬意を込めて「神主様かみぬし」と呼んだ。ただ、白鳥本人はあまり快く思わなかった。  
(できれば、すーざんと呼んでほしいんやけどねえ)

白鳥は風に揺れる夜の神社の木々を見つめる。敷地を囲む塀に沿う形で神社中央の入口に聳える大鳥居を目指して歩いた。裏の門はこの時間、閉まっているからだ。

少し離れて後ろにはゴスロリメイド服の安龍美弥毘あんりゆうみやびがいる。彼女の足取りは神社が近づくに連れて重くなる。

「美弥毘」

白鳥が立ち止まった彼女を急かす。声をかなければ止まったままだ。

「美弥毘。行くぞ」

白鳥は振り返らない。後ろでゆっくりとついてくる少女の足音だ

けを確認して、黙って歩き続けた。

墨江すみえしおん紫音は駐車場にいた。巫女服みこの女、沢野百合亞さわのゆりあは次々に血のべつとりついた包帯や綿、ワイシャツの端切れなどを地面に捨ててゆく。

「何やってんだよ！そんなんで治る訳ないだろ！早く病院に！」

「無理。この状態じゃ着く前にあの世行き。そんなに気に入らないなら、救急車呼べば。公衆電話ならそこを出て右のところを少し走ればあるから」

この女に彼女を任せて大丈夫だろうか。けれども墨江に出来る行動はなにもなかった。

「畜生！」

少し躊躇ったが、じっとしていられなかった。墨江は駆け出す。

駐車場のゲートを出て右に曲がる。タイル張りの歩道を少し走ると、電話ボックスが見えてきた。街灯の光に誘われてか、虫がたくさんたむろしている。虫の苦手な墨江にとっては、普段なら近づきたくない光景だが、手で払いのけ、電話ボックスの扉を開け放つと、そのとき、視界の端に人影を捕らえた。

ちようど五メートルほど進んだところだろうか、そこにも街灯があったためシルエットからはつきり確認できた。ゴスロリと、もう一人スーツを着た男がこちらに近づいてくる。墨江は身をかがめた。「なんであいつがここにいるんだよ！」

上野木は薄明かりの中、スーツを脱ぎ捨て、巫女服みこに着替えていた。社務所の中には誰もいなかった。こんなところに脱ぎ放しのスーツやパンスト、ブラウスが放り出されている光景を誰が見たら失笑するだろう。けれども今は片付ける余裕はなかった。



着替えを済ませ、玉砂利の敷き詰められた、境内を足早に歩きながら 短いブロンドヘアを後ろで束ねる。ウェーブした髪質がこういうときは不便だと思った。いつもならきちんと溶かしてから結ぶのだからさほど不便さは感じなかったのだが。

足袋を忘れた。おかげで巫女服みこに不釣り合いなヒールの高めのブーツを履いたままだ。玉砂利を踏みしめ、朱塗りの門をくぐり抜け、そして律儀に振り向いて頭を下げる。

すぐそこに鳥居があったが、そこでも一度立ち止まって礼をする。これが作法であり、そして人間よりも優先される神への作法である以上どんなに急いでいても省略する事を彼女自身が許さなかった。

手水舎てすいしや（神社や寺にある手や口を清める水のあるところ）の前で いったん足を止める。

ひしゃくを一つ手に取り、その場に転がっているとたんのバケツにみずを入れた。

通りには太鼓橋たいこはしを通るのが一番近い。この橋は半円の形をしており、わずか十五センチ程の幅しかない階段が急勾配で取り付けられている。そのためヒールの高いブーツだと渡りにくいのだが、バケツを持ったままバランスを崩すことなく足早に階段を上った。てっぺんにさしかかったところで、中央の大鳥居前に人影を確認した。駐車場へ向かうつもりだったがそのまますぐ大鳥居に向かうことにした。

階段を駆け下り、石畳の前にたたずむ二人の元へ駆け寄る。片方はサングラスをしてスーツを着ている。が、ネクタイもなく、シャツもはみ出してだらしない格好をしてる男が、斧を持ってつたっている。男の名は白鳥朱雀くわくすうしやく。もう片方はゴシックロリータを基調としたメイド服のような格好をしている。安龍美弥毘あんりゆうみやびという少女だ。どちら神社という神聖な場所にはあるまじき、とんでもない格好を

している。二人を見え上野木は苛立った。

上野木の姿に気づいたのか、白鳥は鳥居に向かって半歩踏み出す。

「シスター」白鳥が言った。

「シスターではありません。私は巫女です！」上野木は抗議する。いつものことだ。この風貌からなのか、それとも実家がインチキ教会喫茶をやっている、そこで修道服を着ているため、白鳥を始め、この神社の関係者は生真面目な性格の宮司を除いて皆、「シスター」と呼ぶのだった。

「お、シスターが巫女服着ている」

なんて、白鳥は場違いな冗談を言う。

上野木はいちいち取り合わない。

バケツの中の水を柄杓ですくい、バシヤツと鳥居の向こうめがけて投げ付けた。

「どういふつもりですか！わかってるんですか！」

水を掛けられたのは安龍だった。

「あれれ？」

慌てたのは安龍ではなく白鳥の方だった。

「あなたはもうここへ来る資格はありません！」

「まあ待て、シスター」

「あなたは黙っててください。今回ばかりは見逃すわけには生きません」

安龍はうつむいたまま、水に濡れた腕をさすっただけで何も言わない。腕が少し腫れて赤くなっている。

「シスターの代えあるか」

「何を言ってるんです！」

「シスター紙垂かみの代えや」

「……」

何も答えなかった代わりに白鳥が、鳥居のすぐそば木に括りつけ

られたしめ縄を外した。そして、しめ縄に飾られた紙垂を外すと鳥居の外にいる安龍の元へ持ってゆく。

「ほら、代えんと真つ黒やで」と、紙垂を差し出す白鳥。

しかし、安龍はそれを払いのけ、「いい、自分でやる。汚れるから」といつて紙垂をひったくった。

(クソツ！やつぱりあいつの仲間だったのか！)

墨江は背筋に悪寒が走る。今さっき少女の背中を切り裂いたゴスロリ少女がこの場にいるのだ。しかもその隣には何か叫んでいるスーツの男と、ここからでは姿が見えないが女の声もする。一人でも最悪としか言いようのない強敵なのに仲間までいる。

(見つかったら殺される)

この悪条件では逃げることさえ難しい。文字通り絶体絶命。墨江は息を殺し、身を身を縮込ませ、なんとか見つからないように努力する。

「少年！隠れてらんと出てこい！」

不意に声がした。どうやら自分を指しているようだ。

「少年、大丈夫やって！なんもせえへん」

関西弁の男は手招きをしていた。よくみるともう片方の手で斧を支えている。あいつがボスか。墨江は思った。

(逃げるべきか)

だが姿を晒していた。不思議と敵意のようなものは感じない気がした。墨江は素直に従い、けれども警戒しながら男達の元へ近づいた。

鳥居の前の石段で少し足を止める。

「あなたは」

鳥居の方から女の声がした。見覚えのある顔だ。確か名前は上野<sup>かみ</sup>木と言った。

彫りの深い西洋人の顔つきをして、月明かりを照らしたようなブルンドヘヤーを後ろで束ねている。瞳は青く肌は白い。さつきとは打って変わってなぜか不釣り合な巫女服<sup>みこ</sup>を着ているのが何より異様だった。

「白鳥！その子は……」上野木が男に向かって叫んだ。男は「わかつとる」と言って遮った。

名前は白鳥というらしい。ゆつくりと墨江の元へ近づいてくる。見た目は二十代くらい。墨江より少し上か、もつと上かもしれないが老けている感じはしない。しかし妙に落ち着いた大人の雰囲気を感じさせる。

まず髪型。ストレートな黒髪をワックスで整えエレガントに仕上げている。目はサングラスをしていてよく見えないが鼻筋は割とはつきりしている。現代の日本人の理想型という印象だ。もしも彼が学校の先生なら女生徒からの人気は抜群だろう。少女漫画に出てくる年上の、ヒロインの憧れ対象の男という感じだった。

だが、その容姿とは対照的に服装がとても奇異だった。細身の筋肉質の体に、スーツを軽やかに着こなしているものの、襟元は大きく開いて、銀色のネックレス鎖が垣間見える。そして、ワイシャツにはボタンの代わりに金色の安全ピンで止められており、スーツの裾から不良高校生のようにシャツがはみ出しているというだらしのない格好だ。そして足先をみれば、これもスーツに不釣り合いなスニーカーを履いている。墨江がもしスポーツに明るい人間であればそれがサッカー選手のはくトレーニングシューズだと認識できただろう。

「話長くなりそうやから中でしようか」

白鳥はそう言って、鳥居の中を指さした。落ち着いた声だった。別に強要するわけではないといった感じだったので、墨江はコクン

とうなづいた。

白鳥が手招きをして、墨江はその後に続く。ゴスロリだけはついて来なかった。

「ちよつと、鳥居をくぐる時は一礼」上野木がかみのぎ大幣の枝を脇腹おおぬさに当てて制止した。

「今はそんなこと言ってる場合か」と、墨江は思ったが、ここは従っておいた方が無難だと判断したので深々と頭を下げ、上げて、もう一度下げて、パン、パンと手をたたいた

「あなたはそこで待っていなさい。ここから先に入ることを許しませんよ」

巫女服みこの女はゴスロリ少女に対してきつく言い放った。

奥の方から、別の男がやってきた。中年くらいの袴着はかまぎの男だった。神職らしい。

「宮司！」白鳥が中年の男を呼んだ。

「処置は無事終わりました。ただ傷口からただならぬ妖気が。おそろく……」

「得体の知らないあの娘こを神域に入れるわけにはいかないわ」

「そう思っつて、事務所の二階に運んでおります」

「んじゃとりあえず、俺らもそつちに行こう。話ならあつちのほうがいいわ」

「彼に状況説明をしてなやらんとな」と、白鳥は墨江に向けて言った。

墨江はこくと頷いて、彼らの後について行く。とりあえず、一命を取り留めたらしい。と、なると彼らは少なくとも少女の命を奪う存在ではなさそうだということだ。

白鳥は中年の男に何か耳打ちした。指示を受けたのか、その男は足早に去ってゆく。

(けど、あのゴスロリは一体……)

墨江の脳裏に疑問がいくつも沸く。仲間なのか、敵なのか。そして管理局が牙をむいた理由は。そしてこの男達の目的は一体。墨江の頭の中の整理がつかず混乱した。

円を半分煮切ったような大きな木の橋の前を横切り、脇道に入る。石畳の道の両脇をトンネルのように木々が生い茂っている。ほのかに磯の香りがする。海が近いのか、風も割と強く、汗だくのシャツを冷やし、少し肌寒さを感じさせた。

堀を渡す石橋を渡り終わると、最初に着いた駐車場の端に出た。さっきの車が止めてあった場所はここからは確認できない。

石畳が途切れ、舗装されていない砂利道に変わる。その五十メートルほど先に白いプレハブ小屋があった。建設現場か工場の事務所といった感じの簡単な二階建ての建物があった。その前に、黒いワゴン車が横付けされている。思わず駆け寄ろうとしたところで「大丈夫、部屋の中に寝かしてるから」と上野木が制止した。

カン、カン、カンツとプレハブの外に備え付けられた鉄の階段を駆け下りる音がした。

さっきの駐車場で治療をしていた巫女、沢野だった。三人の視線が彼女に集中する。

「応急処置が済みました。祈祷の準備が整いましたのでお願いします」と、頭を下げて言った。

「わかりました」とブロンドヘヤーの巫女、上野木は答えたが、「ちよい待ち。シスターは少年に事情の説明をする義務があるうな」と白鳥が引き止めた。

「いえ、その……、私じゃやっぱり力不足かと。あくまでも私は医者の身。物理的な怪我は治せても霊障を直すのはちよつと……」

「いや、沢野つちは立派な巫女さんやで。もつと自身もってええんや。それにここには、白鳥の神がおはすんやから」

「ええ……、わかりました」 沢野は少々不安気に返事をした。

「ちょっと待てよ!」

墨江は声を上げる。そして白鳥の元へ詰め寄る。

「よくわかんねえけど、お祈りやお祓いでだけが治るかよ! やっぱ  
り病院に」

「それはだめよ」 ブロンドヘヤーの巫女みこは言い放つ

「いい? 管理局が敵に回っている以上、この辺りの公的施設は危険  
と考えるべきよ」

「どうして管理局が敵に!」

白鳥は重い表情を浮かべた。雷が轟音を立てて鳴る。雨はまだふ  
らないがときおり不気味に光る空が、不穏な空気をより一層かきた  
てる。墨江は頭が真っ白になった。

墨江はなお、階段へ向かおうとした。

「待ちなさい!」

「なんだよ」

「何処へゆくのか?」

「あの子の無事を確かめてくる。悪いけどお前らみたいな得体の知  
れない奴にあの子は預けられない!」

ブロンドヘヤーの巫女みこはため息をついた。代わりに沢野が口を開  
く。

「今、包帯ぐるぐる巻きの血まみれよ。女の子のそんな姿見て、あ  
なたはそういう悪趣味の持ち主なの?」

墨江は何も言えない。

「彼女の無事は私が保証する。何なら、私の命をかけていい。もし  
助からなかったら私を殺しなさい」 言い終えて沢野は背を向ける。  
そして二階へと続く階段を登って行った。





時刻は八時五十分。辺りはすっかり闇に包まれ、夜風が木々を揺らす。

少女は傷口を包帯で包み込み、うつ伏せ状態で寝かせている。その隣りにいるのは、黒髪の軽くウェーブのかかった巫女、沢野百合亜である。彼女の後ろにはちょうど部屋の真ん中を仕切るよう、学校の保健室でよく見かける水色のパーテーションが置かれていた。

沢野は少女の直ぐ側にひれ伏す。頭を上げてもう一度ひれ伏す。そして、ポン、ポンと拍手をうち、もう一度ひれ伏して、ゆっくり起き上がり、目を瞑る。

ゆっくり深呼吸をし、精神統一をする。そして直ぐ側に置かれた大幣を手に取り、右へ、左へゆっくり祓う。その動作を3回繰り返した。そして、もう一度深呼吸をしたのち、やや上顎を上げてから、「祝詞を奏上します」と静かに言う。

「高天原に神留坐す 神魯岐神魯美の命以て皇御祖神伊邪那岐命」

…」

沢野は腹の底から歌うように唱える。体がほんの少し熱くなる。沢野に靈感なるものはほとんどない。けれども何か力のようなものをほんの少し感じる。そんな気がした。

漫画やアニメのように、例えば突如部屋の中に風が吹く、体の周りに得体のしれない光が現れる、あるいは何か文様が浮かび上がりそこから天使や龍といったもの現れる。というあからさまな反応はない。けれども、彼女は確信していた。何かが、自分の中に力を注ぎ込んでいる。この神社に神そのものが働きかけているのか、自分の内に潜むパワーが増大する感覚を全身で感じる。

祈る両手に汗がにじむ。両手の合わさる部分が、熱くなる。体中がぼかぼか暖かくなる。

「小戸の阿波岐原に御襖被ひ給ふ時に生坐る被戸の大神等諸々（もろもろ）の枉事罪穢を被ひ賜え清め賜え……」

沢野は唱える。歌うよう、抑揚をつけ、そして腹の底から力を込めて声を震わせ力一杯。

墨江は白鳥達に連れられ、事務所の一階の小さな応接室にいた。部屋はさほど広くない。小さな簡易玄関を入つてすぐ中央部を簡易パーテーションで区切つてあり、右側四畳半ほどの空間に、二人がけのソファが向かい合うよう、ガラステーブルを挟んで置かれている。奥には社長が座るような椅子と机が置かれているが、パソコンもなければ、書類も置かれていない。逆にこの場には不釣合なアニメのフィギュアや漫画が無造作に並べられている。そんな部屋だった。

始まつたか。白鳥は一人つぶやいた。

まあ座れ。白鳥にそう言われ墨江はソファに腰を下ろす。

「お前らは一体何なんだ！あのゴスロリは！管理局の連中はなぜ襲つてきた！」

ガラステーブルを両手で叩きつけ、墨江は怒鳴った。

「そう慌てるな」

上野木がパーテーションの向こうからお盆にグラスを3つ載せて持ってきた。

氷の入った冷たい麦茶だった。上野木はそれをテーブルに置きながら言う

「さつきはきつく言つてごめんなさいね。それから乱暴に連れてきたことも謝罪するわ」

墨江はその謝罪を聞き流した。まず、彼らを信用していいのかど

うか、未だその判断がつかないのだ。素直に謝罪を受け入れる状況ではなかったのだ。

「そうそう、自己紹介がまだやったな。俺は白鳥朱雀。すーざんと呼んでくれ。一応この神社の管理会社をやってるねんけど」

白鳥が軽い口調で自己紹介をした。こんな状況にもかかわらず、冗談っぽく言った。

「そんでこっちが上ッかみ」

ブロンドヘアの巫女何故が白鳥の脇腹めがけてパンチを食らわせた。ちよつと、何言ってるんですか！と上野木は白鳥に詰め寄る。白鳥は少し、悶え苦しんでいた。

「上野木です」

と、改めてブロンドヘアの巫女は軽く会釈した。

「墨江紫音です」

墨江は素っ気無く名乗った。

グラスのお茶を見る。喉が乾いていたが、飲んで大丈夫だろうか。毒などは入っていないだろうか。なんて思う。

向かいに座る白鳥は「なんでジューズやないんや」と上野木に向かって抗議していたが、上野木は取り合わない。墨江は恐る恐る一口付けた。特におかしな点はなかった。安心して、グビリと一気に喉へ流し込む。街中をかけずり回り汗だくになっていのだ。少し生き返った。

「さてと」

白鳥が膝をついて立ちがる。奥に置かれた、長机の引き出しを開け何かを取り出した。

そして、それを墨江の前に置いて言った。

「マネーカードや。五千円分ある。タクシー代にしてくれ。残った分はお礼やと思ってくれたらいい」

「はっ？」

墨江はグラスをテーブルに置いた。

「いやー、あの子を助けてくれてホンマにありがとう。管理局に捕まったらえらいこっちゃやった。ホンマサンキューッ！」

「えっ？」

何故か上野木が驚きの声をあげる。

「あの子はうちの関係者や。わけあって管理局に追われてるのをうちで保護してたんやけど、行方不明になってたんや。それを君が助けてくれた。感謝感謝！」

「さ、夜も遅いことやし、早よせんと雨も降るさかい。それ飲んだら帰えんなっせ」

「ちよつと待てよ！」

墨江は疑問に思った。おかしいのだ。たしかに彼女は管理局に通報しないでくれといった。ゴスロリに襲われたとき、管理局に助けを請うのを拒否した。どうやら管理局があの子を追っていたのは間違いないらしい。けれども、この連中が果たして彼女の味方と断言してよいだろうか、そもそもあのゴスロリと白鳥は一緒にいた。ということはゴスロリの関係者でもあるわけで、だとすれば……。

墨江は立ち上がる。そして白鳥に詰め寄る。

「悪いが、あんたの言うこと百分百信じる訳にはいかない。第一、あのゴスロリはお前の仲間だろう。お前たちがあの子の関係者だとして、どうしてゴスロリに傷つけられた！」

その瞬間、銀色の物体が眉間にあたる。目の前の白鳥がサンングラス越しに鋭い目付きをして睨みつける。

直後、それを握る手のポーズから、銃だと理解した。

「S&amp;W 357マグナムって、骨董品。もちろんモデルガンや。けど、改造してるから君の脳天に風穴開けることぐらいはできるぞ。尤も、照準は狂ってるから実践には使えんけどな」

墨江はゴクリと唾を飲み込んだ。部屋中に緊張が走る。隣に板上

野木は何も言わない。静止するわけでもなく、協力するわけでもなく、啞然としていてまるで予想外といった感じで表情がひきつっていた。

墨江の額に嫌な汗が滲み出る。

(畜生! どうすればいい。やっぱりこいつもヤバイやつじゃねえか!!)

「君の言うとおり、あのゴスロリ娘は俺の仲間や。ちょっとばっかし特殊な力を持つてる」

「おとなしく帰ったほうが見のためや。明日からの生活もあるやろう。今日のこととは忘れろとは言わん。けど君みたいなど素人がどうにか出来る問題やない。関わらん方が身の為や」

「し、白鳥……、これは一体」

「シスターは黙つとれ!」

上野木はビクついて押し黙る。

「心配せんでもええ。あの子は無事やし、安全は保証する。だから戻れ、君の日常に」

何故かその言葉が響いた。日常に戻る。そうだ。たしかにそうすべきだ。部屋を開けたら知らない女の子がいた。斧を持ったゴスロリが襲ってくる。管理局に追われる。銃をつき受けられ、拉致される。なんてのは確かに日常ではない。けれども思った。せめて、自分に、そしてあの子に何が起こっているのか、それだけでも知りたい。

「あの……子には……、もう……会えな……いのか……?」

口をパクパクさせながら、切れ切れに言った。白鳥は何も言わない。

「どうして……管理局……が敵に……?」

「お前たちとゴスロリは……敵なのか……?」

白鳥の表情がより一層険しくなる。墨江は拳を握る。汗が滴り落ちる。

「知ったら。必然的に関わるようになる。一度関わったらもう戻れんぞ」

墨江は黙っ頷いた。

「最後まで責任持てるか。途中で投げださんか」

重い口調でだった。空気さえ重く感じる。肩にどつと、この場の空気すべてが押しかかるような重厚感に苛まれながら、墨江は握った拳を少し持ち上げ、再度頷いた。

「このままあの子……、放って帰る訳にはいかない」

「そうか」

そう行つて白鳥は銃を引っ込めた。

「ついて来い」

白鳥は黙って扉の前に立つ。背を向けたまま言った。黙って見つめる上野木に墨江は頷いて合図した。墨江は拳を握る。大丈夫なのか。とても不安だった。だが行くしかなかった。確かめたい。まず、それを確かめてから、考えたい。そう思ったのだ。そしてなにより、あの少女の安全を、確かなものにした。

事務所を出て、二階の窓あかりを目にする。鉄の階段を駆け上りたい衝動に駆られたが、先をゆく白鳥達を追うことにした。

三人は夜の砂利道を歩く。元きた道を戻り、石段の道へと出くわす。

雷がなっている。紫の雲が時折青白く光る。

「あのゴスロリはな。俺と契約関係にある。けど、正直今回の行動はうちとしては誤算やった。わざとやないと言ったら言い訳にしかならんけど、俺の意図した行動やない」

それを聞いて墨江は拳を握った。

「ぶざけんなよ！！やっぱりお前たちがあいつを！」

「暴走や」 白鳥が立ち止まる。そして振り向いて墨江に視線を合わす。

「文字通りのな。まあ、さっきも言ったけどちょっとばっかし得意な娘やっでな……」

「悪魔っていう」

「はっ？」

聞き間違いだろうか。墨江は思った。

「悪魔や。真正正銘の」

白鳥は二度繰り返す。間違いなく言った。悪魔と。

「悪魔だって？」

「ああ」

白鳥は再び歩き出した。上野木も続く。

急にぶっ飛んだ話になった。悪魔なんてほんとうにいるのか。墨江は思った。

「君もあいつの力を目の当たりにしたんやろ。だったら分かるはずや。あいつは人間の力をはるかに超えている」

墨江の脳裏に、地獄のような赤い瞳、漆黒の闇色をした髪、真っ黒にし染まった紙垂、あたり物全てを一瞬で切り裂く斧を振り回して追いかけてくるゴスロリ少女の姿が描かれる。

(確かに、悪魔と表現するにふさわしいかもしれない)

「人間には靈魂というものが宿っててな。体内のマナを根源として靈氣って能力を発することができらんやけど」

歩きながら白鳥は話を続ける。墨江は黙って聞いた。

「普通の人間は微弱やからそんなもの意識せん。せいぜい、虫の知らせとか、靈感ぐらいのもんや」

「ええ、本来神に許された者以外は」

「そういう力は善悪の前に、この世の法則をねじ曲げることになる。だから無闇矢鱈に使われたら困るんや。この世の物理原則をねじ曲げることになるしな」

「ちよつと待った！話がぜんぜん見えない」

話が突拍子も無い方向へゆく。墨江は理解が追いつかない。

「あのゴスロリは……、人間じゃないって言うのか」

「御霊はな。体は生身の人間や。いや、元々はただの人間やった」  
「呪いを繰り返したのよ。それであの子の御霊は汚れ、悪霊次々に憑依した。それこそ地獄の底のようなとんでもない質量の悪霊がね。本来なら本人が靈障を受けて病気になったり、事故に遭ったりして、場合によつたら死ぬのだけど、あの子の場合は偶然が重なった。不幸が更に不幸を呼んだとでも言うべきか、憑依した悪霊を取り込んで自ら悪に染まったの」

「そして、その力をさらに使い続け悪行を繰り返す。悪行を繰り返しては魂を汚れせ力を増やし、また呪いを増やす。その悪循環やった。だから俺が保護をした。戻すことはできんでも、これ以上罪を犯さんようにな。けど、今回また暴走しよった……」

信じられない。そんなことが本当にあるのだろうか。確かにあの、とんでもない力は人場馴れしている。

墨江は思った。これは本当に現実なんだどうか。仮に真実だとしたら、この世に悪魔なるものが存在する。そんな馬鹿な話が本当にあ



り得るのか。とても信じられない。

「あいつはかつて、特別市の殺し屋でな。暗殺とか、反抗勢力の一掃とかを稼業としてた。それを一年前俺が保護してこの神社につれてきたんや。これ以上悪させんようにな」

「暗殺や、反抗勢力の一掃を専門とする特殊部隊の長を勤めてたの」  
上野木が足を止める。そしてうつむいたまま低い声で言う。

「けど、今回暴走した」

白鳥も立ち止まった。振り向いて上野木に視線を送る。

「やっぱり、あんなのここに置いておけないわ」

「なら、どうする？契約を破棄するか？あいつを自由にしたところで、あの力はロクでもないことに使われかねんぞ」

「ですが！」

「殺すか？おまえじゃ無理やぞ。白鳥大神が直接手を下せば話は別やけど、一時的とはいえあいつの中に込められた妖気がこの神社を乗っ取るぞ」

「けど、神との契約を破ったのはあの子です！」

「蔵に閉じ込めとる。妖気はすぐ静まる。今はそれが最良の選択肢やろ」

白鳥がきつく言い放った。上野木は何も言い返せず、黙ってうつむく。

場所は最初に大鳥居の威近くだった。鳥居の直ぐ側、木に隠れてあまりはつきりとは見えないが、小さな小屋のようなものがあつた。あの中にゴスロリはいるらしい。

朱塗りの手すりの半円を描いた、木の橋に迫る。太鼓橋たいこはしというらしい。割と急な斜面に階段杭打ちされているが、幅は結構狭い。幅十五センチほどのしかない。

橋の下を流れるの海水は、満潮なのだろうか、さつきより潮位が上がっていた。

「管理局があの子を追いかけた理由、それはな……」

白鳥は端の階段に足をかける。ゆっくりと二段、三段とのぼり、

空を見上げる。

「まさか」

「ああ、たぶんあの子ども人間とは違う」

「それじゃあいつも？」

「悪魔やない。けど、なにか力を持っていることは間違いない」

（それも莫大な）と白鳥はつぶやいた。

墨江は白鳥の後を追う。橋を渡ろうと石段をひとつ登る。

「待ちなさい」

だが、上野木が静止した。

「ここは神に許されたものしか通ることはできません。あなたは、向うの石橋をわたってください」

墨江は指を刺された方向を確認する。少し大回りしなければいけない。

面倒だと思っただが、ここは彼らに従っておいたほうが無難だろう思った。仕方なく墨江はそちらに向かおうと体の向きを変えようとした。

「待て。時間が惜しい。通ってええ」

「ですが！」

「神が許せばいいやろ。今許した。少年、一緒に行こう」

月明かりが、白鳥の黒髪を照らす。エレガントにセットされた神が潮風になびく。

白鳥は手を差し伸べた。上野木は不満そうにうつむいて、橋に足をかけた。

（神が許す？）

どういうことだろう。まさか白鳥が神と交信したとでもいいはるつもりだろうか。だとしたら馬鹿げている。

（悪魔は居るらしいけど……）

橋の真ん中は意外に高い。水面下から三メートルくらいはあるよ

うだ。

堀の水に映る月が波に揺れて銀色に光る、両脇に植えられた木々も涼し気な音色を立てる。幻想的な光景だ。墨江は素直に思った。「この橋を渡るとだけでお祓いの効果があるのですよ。真ん中は歩かないで下さい。そこは神様の通り道ですから」と上野木は言う。手すりがないと少し心細いのもとより真ん中を歩く勇氣はなかったのだが、前を歩く白鳥はど真ん中を平然と歩いている。怒らなくていいのか？と墨江は思ったが、この神社の所有者だからかと、適当に考えた。

橋を渡り終えると、手水舎てすいぐらに差し掛かる。上野木は手水舎てすいぐらで柄杓をとって、墨江に渡す。こうするのですよと、左手から柄杓の水をかけ、右手にもかける。墨江も続いてまねをするのだが、これは小さい頃祖母に連れられて寺だったか神社だったか行った経験があったのでなんとなく解った。

柄杓の水を口に含む。この水綺麗なのかとやや疑問だったが、上野木がためらい無くやっているの腹を壊すことはないだろうと思った。その場に水を吐き捨てた墨江だったが、上野木は胸からタオルを取り出してそこに口の水を吐いていた。礼儀的にはこちらのほうがより好ましいらしい。墨江は一応のマナーとして自分が水を吐いた場所に水を流しておいた。それからもう一度右手に水かけ。白鳥は何もせず二人を待っている。

ハンカチを持っておらず手をぶらぶらさせていた墨江にシスターはこれまたこの上なく和風な水墨画のかかれた高そうなハンカチを差し出した。洗って返すべきだろうかと思江は思ったが、手を拭き終わると上野木はひったくるように奪い取ってしまった。

十段ほどの石段を上がると、また鳥居をくぐる。鳥居をくぐるたび、シスターは礼儀正しくおじぎをするので、墨江の習って頭を下げる。

鳥居をくぐるとつてすぐ、今度は朱塗りの門が構える。そこでも

シスターは律儀に礼をする。墨江も同じく。

門をくぐると、玉砂利の敷き詰められた広い空間の奥に、荘厳な佇まいの建物があった。それがご本殿らしい。月明かりに照らされて、砂利を踏みしめながら三人はゆっくり歩く。街の外れなのか、とても静かだった。さつきから鳴り続けてる雷の音を除くと、遠くの方に微かな波音を感じるだけだ。

潮風が社務所の隣にたくさん掲げられた絵馬を揺らし、カラカラと音を立てる。白鳥たちは本殿の参拝客が手を合わせる場所には行かない。そのとなりの古び建物、神楽殿ときの看板が掲げられた場所に向かい階段に足をかけ木の扉を開いて、手招きをした。

建物に入って、玄関のような場所で靴を脱ぐ。薄暗い長い木の廊下を少し歩くと、広い空間が現れる。そこには時代劇の団子屋に出ているような畳の長椅子が幾つも並べられていて、中央には真ん中に大きな鏡を起き両脇に神がの飾られた神棚が置かれている。ここはどうやら祈祷を行う場所らしい。

「博士」

白鳥は静かに言う。薄暗い闇から出てきたのは十二歳くらいの少年だった。神社の神職と同じ袴はかまきを着ていた。「お待ちしておりました」と少年は言って頭を軽く下げる。

墨江は少年を見やる。頭を上げた少年はずり落ちた黒縁のメガネを指で整えると、少年は腰をおろし、背を向けた。何をすることもりなのだろうと、墨江は少年に近づく。

すると、少年のまわりがあかあかと光りだした。それは心霊現象ではない。普段良く目にするものだが、こういった場所で見ると異様と言わざるを得ない。パソコンモニターだった。

少年の目の前に彼に合わせた低い台がある。その上にノートパソコンが置かれていて、それを囲むよう左右に4つのモニターが並べられ白く光っていた。

光りに照らされて様々なケーブルが少年のノートパソコンに接続されているのが伺える。モニタには何やら色々表示されているのだが、さっぱりわからなかった。

「解析結果出るか？」

「今出します」

白鳥と、博士と呼ばれる少年は何やら二人で議論を交わし始めた。上野木も議論に加わる。墨江はだけが取り残された。墨江は長椅子に腰をおろした。

「彼は？」少年が問う。

「関係者や。軽く説明したってくれ」

白鳥がそう言つと、少年が近づいてきた。身長は百四十センチ前後。見た目は子供だが、黒ぶちメガネを持ち上げるしぐさ、人を観察するといふよりはむしろデータや資料を見るような目付きで、顎に手を当て考え事をするしぐさは何処かの大学の教授か研究者を思わせ、正直言つて子どもらしい可愛らしさというものを感ぜさせない。

「始めまして。僕は若干十二歳にして学会から一目置かれるオカルト科学の研究者、沢野秀和さわのひろかずといひます」

自己紹介をされたので墨江も軽く名乗つて、手を差し出す。

「では簡単にオカルト科学について説明しましょう」

少年は背を向けたまま言った。さっきのは一体何だったんだろう、笑えばよかつたのか？と墨江は少し悩んだが、まあいいかと思つて黙つておいた。

「まず、非科学オカルトについてですが、これは言うまでもなく心霊現象や超常現象を指しますが、現在オカルト科学の主な研究は心霊現象です。それはかの有名なダイナー博士や天野博士による心霊存在仮説に基づく心霊研究を発端とするものなのですが」

と言つて、少年はキーボードを叩いた。

（なんだ。いきなり電波なこと言いやがったぞこいつ）

少年は一人勝手に続けた。

「要するに、オカルト科学は靈的存在を科学的に肯定する学問です」

「えっ？」

「従来、科学は非科学オカルト、つまり解き明かされない現象から科学的法則を発見することによつて解き明かし、それらを説明する事によつて成り立ってきました。言うなれば科学は非科学オカルトの領分を犯すことによつて成り立ってきたのです。しかしオカルト科学は逆に、心

霊現象や神話など非科学的であるとされるものをあえて肯定し、実際に観測できた現象から科学的考察を試み、場合によってはその力を制御を試みたりもします。実際、霊的な存在の観測、制御は今の技術である程度可能となっておりますし、オカルト科学は人間を遙かに超える巨大な霊体の存在を、つまり神の存在を予測しています」

「か、神の存在？」

「そうですね。神は存在すると。あくまでも仮説の段階ですが。オカルト科学の最終目標は神の存在証明およびコンタクト」

「そんな馬鹿げたことできるのかしらね」

上野木が怪訝な表情を少年博士に向けた。

「さあ、ですが神との更新もしくは神の力を手に入れようと、世界各地で碌でも無い実験がや事件が起こっているのも事実。僕の当面の役割はそれらの阻止です。そして僕らは神と直接交流を持っています。だから神の命に従って行動するのみです」

少年博士は白鳥を一瞥する。上野木も同様。

（なんだか、とんでもない話になったな。マジで現実なんだろうな。夢オチとか全部妄想でしたなんて事ねえよな。それにしても神が存在する？悪魔も存在する……、どうなってるんだ現実！）

墨江はますます混乱した。

「全部理解せんでええ。少年、君はあの子のことだけ考えたらええ」（そうだよな。今はそれだけ考えよう）

「んで？博士の見解は？」

そう言うと、少年はキーボードをカタカタ叩いた。モニターには何かの画面がいくつも表示された。

「おそらく人工的な手段を以って、かなり無理やり人間とは違う靈魂を宿されたか、もしくは変質させたと考えるのが妥当でしょう」

「なるほど」

白鳥は顎に手を当て何かなん考えているようだ。上野木も腕を組んだまま眼を閉じている。

「ですが、データで見る限り少なくとも僕の知る霊体のパターンには当たらない見たことない波形が現れています。これについて神主様のご意見を伺いたいのですが」

「そうか」

白鳥は右へ左へと往復する。顎に手を当て、考えをまとめようとしている。まるでドラマの探偵が推理するシーンのように。

「人間にしては質量があまりにも莫大すぎます。我々の技術で観測制御できる霊的存在はせいぜい浮遊霊か地縛霊程度のもですが、それと比べてもおかしいのです。まるで……」

「確かに、神気に似た感じがするのよ。でもまさか……」

上野木が驚嘆の声を上げる。

「いや、」

白鳥は踵を返す。そして、腕を組み上野木と墨江に向かって言う。

「神の類ではない」

「それじゃあ」

「神に近く、神の如くあるもの……、やろうな」

「それって」

「天使やる」

神社の社に轟音が響く。フラッシュを焚いたような閃光が走る。

雷だ。そういえば、

屋根を叩く雨の音は激しさを増す。外は土砂降りの雨だろう。

（天使だと？）

悪魔が出てきたと思ったたら今度は天使だ。突飛な話に、墨江の常識が拒否反応を示す。いくら何でも電波過ぎる。墨江は何か否定の言葉を探した。

「ありえなわ。天使なんてだいそれたもの地上に落としたらどうなると思ってるの。それだけで世界が終わりを迎えるわ」

上野木が代わりかみの代に否定した。ただしあくまでもオカルト的な理由



を以てである。その反論の意味を墨江は納得も理解もできていない。「天使研究が盛んな欧州ではすでに、天使降臨は不可能だと結論づけていますが。その理由として霊域があまりにも広く制御はおるか干渉すら不可能であり、仮に何らかの干渉ができたとして逆流がおれば一瞬にして銀河系レベルの規模を破壊する可能性すら指摘していますか」

続いて少年が黒フチメガネを持ち上げながら言った。

「そもそも、この日本で天使なんてものが存在するの？八百万の神を有するこの日本神界では神と人は極めて近く、神格化した人間さえ存在する。一神教の欧米では神の媒介として天使の存在が不可欠だけど、龍神や蛇神みたいな眷属ならいざしらず、もともと人と直接交流可能な日本の神が、天使なんて使いを必要とするの？そんな日本で天使なんて、現れるだけでも不自然なのに、それを降臨させるなんて……」

「西洋では神の使いである天使を掌握すれば神にたどり着くとしていたんですが、同じ研究を日本でやろうとしてもデータが少なく学問は成り立ちません。まして、降臨させるなど到底不可能と思いませんが」

「いや、間違いない。お前らにはわからんかもしれんけど、かすかに残滓を感じる。」

「まさか……」かみの密上野木さえ言葉を失う。

しかし白鳥の確信は確信したように言う。

「かつて日本にキリスト教が伝わったとき、カトリック教会は日本の守護として大天使ミカエルを使わしめるよう儀式を執り行った。その宣教師ザビエルが守護となったが、以後禁教時代が続いてキリスト教神界の影響は極めて薄くなる。残った信仰は隠れキリシタンとなって日本神界に根ざす形で土着化した」

白鳥は考えをまとめるよう一人続ける。聞いている三人に理解が及んでいるか否か、それを気にする様子もなく一人勝手に続けた。

「結果、天使の精霊は役目を失いほとんど消滅し、力を失った。その残骸みたいな精霊なら質量も小さい、たぶん、それをコピーしたんや」

「なるほど。そうだとすればこの質量も納得できなくはありません。ですがそれだときゃ逆に実体化しているのが妙ですね。僕はこっち方面に詳しくありませんが、このレベルだと上野木さんクラスの靈能者でも相当集中しないと気づかないと思います」

「だから生身の人間に憑依させたんやろ。実体化の手助けとして」

「人間の靈魂にウィルスのように天使の靈氣を上書き（インストール）して、クラック改変したというわけですね」

「なんて事を。」と上野木は親指の爪を噛んだ。とてもやりきれない。そんな表情をした。

沢野百合亜の儀式は続いていた。全身の意識を集中させ、腹の底から歌うよう祝詞唱え、大幣を左右に大きく振り、両手に力を込め、神の力を借り自己の靈氣を増幅させる。

全身が熱い。冷房の効いた部屋の温度は変わっておらず、特に激しい運動をしているわけでもないのに、体中の汗がにじみ出ていた。祈りとは、意を乗せること。そしてその強さは、想念の強さ、つまり思いの強さである。沢野は懇親の思いを込めて、祈る。目の前に傷つき、横たわる少女の回復を。沢野は袖で額の汗をぬぐった。

「ん？」

何か変化を感じた。あまり靈力の感じない沢野であっても空気と何か空間の変質を感じとった。沢野はうつすらまぶたを開く。

「あつ、」

何か力を受けたわけではない。だが、沢野の体は後ろに仰け反った。

少女の体が宙に浮いたのだ。布団からほんの十数センチ。ふわりと体が宙に浮いている。それだけではない。体中に青白い光を帯びており、黒いつややかな髪が銀色に光っている。

「これは一体？」

少女に柔らかい風が舞う。その風の渦を受け、銀色の髪が緩やかになびいている。

これまで神秘的な現象は何度か確認してきた。けれども、あくまでも一般的な人間の域を出ない沢野にとって、目を閉じていればわずかながら感じるような気がするというレベルのごくわずかな物。たとえば、占いが当たったときの当たったという自覚。それはこじつけと言えばこじつけで片付けられ、偶然といえば偶然で形出方づけられるレベルの神秘である。その程度の物が信仰の対象であり、神秘なるものだった。しかしこうあからさまな、不可思議、神秘的な場面を目の当たりにしたのは初めてである。

目の前の摩訶不思議な光景。しかし彼女は不安や驚き、恐怖をさほど感じなかった。

少女の体から光が消える。銀色の髪は元つつややかな髪に戻り、浮いていたからだはそっと優しく元の布団に戻った。沢野は傷口の上に手をかざす。そしてやさしく、母親のようにさすると、このままつつぶせしておくのも疲れるだろうとおもい、仰向けに寝かせることにした。肩の下にタオルをかませる形で傷口を少し床から浮かせておけば問題ないだろう。

（後はあなた次第ですよ）

沢野は部屋中を見渡した。なんとなく、先ほどの刺々しい、ピリピリした空気が落ち着いたような気がする。傷口の妖気が収まったからだろうか。詳しいことはよくわからないが、

少し安堵して、沢野は正座を崩し休むことにした。

「それじゃああの子は一体？」

「たぶん人間の手によって人間の魂から別の、擬似的な天使の精霊を無理やり宿らせた擬似的な天使ってところやろうな」

「けど、なんでそんなことしたんだ？ やっぱりあれか、神様の存在を知りたいかと思ってる奴のしわざか？」

「Y・NETコーポレーション。我が南エリアを掌握する特企業。市の議決権26%を有する市内第四位の企業グループですが数年前よりある教団の残党との関係が取りざたされています。無論週刊誌レベルの情報なので確証はあまりありませんが何でも代表取締役が教団に入れ込んでいるとか」

博士がメガネを押さえてながら言った。

「そっぴやその社長、最近テレビの討論番組で『市民に幸福を！』とか、『私は神に選ばれ、神に選ばれた私は人々を導く使命がある』とか訳の変わらんこと叫んでたな。まるでインチキ宗教の教祖みたいに」

「管理局が出てきたのもそいつらが関係してるってことなのか！」

墨江は拳を握る。もし彼が少年漫画のヒーローであれば、今すぐここを飛び出してぶん殴りに言っただろう。しかしなんの力も持たないただの若者でしかない墨江は齒噛みするだけで何もできない。

「たぶんそうでしょう。実は十日程前に、Y・NET本社周辺からおかしな靈気波動を観測しています。目的は不明ですが、天使を創り出したのは間違い無く彼らでしょう」

「その教団ってのは？」

白鳥がモニターに手をかけて言う。

「教団は煌々神明教じゆうしんめいきょうといって、教祖阿啓驛あみんだを筆頭にかつては全国数十万人程度の信者を抱える新興宗教団体でしたが、特別市が発足して以降は活動の痕跡が途絶えています。旧政府時代には公安からマークされるほど過激な活動を行っていたようです。何でも教祖は空を飛べるとかで、そういう摩訶不思議な演出で信者を虜にしていた

ようですが」

「うさんくさいなあ。俺が言うのもなんやけど」

「目的が何であれ、奴らの企みは止めなきゃ。天使なんてとんでもないものを地上におろしただけでも危ういというのに、それを何かに利用されたらたまらないわ。それこそこの世の危機よ」

天使、管理局、教団。そしてその陰謀。墨江は齒噛みする。話のスケールが急に大きくなった。ただの家出少女を拾っただけなんて呑気な話のレベルをとうに超えている。

「あの子は……大丈夫なのか」

「今はまず、体の回復が先や。祈祷が終わった頃やろ、そろそろ見に行っただれ」

白鳥がそう言ったので、墨江はとりあえずその場を後にすることにした。難しいことは後だ。とにかく今はあの子の安全を優先したい。そう思ったのだ。

後のことは白鳥に任せましょう。そう言って、上野木は外へ案内する。

本殿を出ると、外は土砂降りの雨だった。事務所まで傘を持ってきます。上野木が軒を伝い、木造の倉庫のような場所から真つ赤な大きな、時代劇に出てくるような蛇の目傘で雨の神社を歩く。墨江は少々困惑したが、渡されたのコンビニのビニール傘だったので安心した。

墨江は傘の柄を見つめながら思った。よくこんなので戦おうとしたな、俺。我ながら無謀としか言いようがない。自分で自分に呆れた。

「どうしたのですか」

「あ、いや……」

「あの、白鳥さんってなんかすごい霊能者さんかなにかで？よくわかんねえけど」

「そんな生易しいものではありませんよ。あれはそういう次元をはるかに超えるんです」

上野木は低い声で言った。

土砂降りのか、玉砂利の境内を歩く。雨が傘を激しく打ち、地面から跳ね返った水しぶきが靴を濡らす。

途中で足が止まった。静まり返った神社の境内。本殿の茅葺屋根を雨が打つ。足が自然と拝殿に向かう。そして静かに手を合わせて祈る。

「本当に神さまなんてものがいるのかわかんねけど、本当にいるんならあの子を救ってやってください。そのために、俺ができることがあるならなんだってしますから」

上野木かみの木がにこりと微笑んだ

「白鳥の神は大きな志を持って困難に立ち向かう人のなによりの方です。誠意誠意、謹んでお願い申し上げますと叶えてくれることでしょう」

「ところで、これは何ですか」

拝殿の、お賽銭を入れる場所に、なぜかスナック菓子（封が開いているかっぱえびせん）が置かれていた。

「あの大馬鹿野郎！」上野木は拳に力を込め苛立ちながら駆け寄って、お菓子の袋をひったくった。

「なんでもありません、この神社の神様は時々非常識な行動を取りますが、ご利益は期待して間違いないはずです」上野木はブツブツと自分に言い聞かすように言った。

さ、行きましよう。そう言って墨江の手を引っ張った。しかし握る手が少々きつく、なんとなく怒っているようながしたのだが

「なるほど、最もお前の努力次第やぞ」白鳥は静かにつぶやく。

神楽殿残った少年博士と白鳥はまだ議論を続けていた。博士はキーボードを叩いて何か操作する。

「特別市につぶされたが宗教団体は企業に取り入れることはめずらしいけど、どうもきな臭い匂いがするな、博士」

「ええ、それから北ヤードの特務機関が動き始めたという情報も入っています」

「そうか」

白鳥は長椅子に腰を下ろす。

「美弥毘の暴走の原因は？」

「実は天使の方も暴走らしき莫大な霊気を確認しております」

「それは俺も感じた。だから、俺の結界を溶かしたんやな。あいつにかかっつた妖気封じが木っ端微塵に吹っ飛んでたわ」

「とにかく、天使の解析を急いでくれ。まだデータは不十分や」白

鳥は立ち上がる。

「けどまあけどけど適当に休んでくれや」と博士の方に手をおいて優しく言った。

「まあ、僕にとって研究は醍醐味ってやつですからお構いなく」

「そうか」

白鳥は少し微笑んだ。

「ところで……、俺、なんか忘れてる気がするけど……、博士なんかわからん？」

「僕に聞かれても……」

「なんやっただかな」

安龍美弥毘は薄暗い蔵の中にいた。壁に凭れて、高い位置に備え付けられた小さな窓から差し込む街灯の光を見つめていた。

墨江紫音が白鳥たちに連れていかれ、一人鳥居の外に残ったところで、中年の頭の薄い宮司と神職の男二人に連れられ蔵の中に閉じ込められたのだ。

「神主様のご指示でして。申し訳ない」

宮司は気の毒そうにお茶の入ったペットボトルだけ渡して扉を閉めた。

斧は没収された。蔵には何重もの結界が張られている。それでもその気になればこの蔵を破って外に出ることは難しくない。だが、そんなことをする気にはなれなかった。というか意味が無い。

蔵に閉じ込められるのは初めてではない。かつて、白鳥に敗北し、契約に従い彼の配下に収まる事になった時、四十日もの間、閉じ込められていたのだ。ここに入られると当時のを思い出す。

出せ！と怒鳴っていたのはせいぜいはじめの3日ぐらいだけだった。その間は食事は与えられず餓死するかと思うほどの苦痛を味わった。

「お前は罪を犯し過ぎた。どうあがいても地獄行き決定や。だから生きている内に地獄に慣れした震度感となあ。死んでから困るでー」



と白鳥はからかった。

体が重い。頭が鈍い。少し眠くなる。神社の神気、結界のせいだ。悪魔で、悪に満ちた、汚れた魂を持つ、安龍美弥毘にとって、普通なら心地良さを感じるであろう、神社の神気というものは毒でしかなかった。

体中に漂っていた妖気が少しずつ引いてゆく。それにもない疲れもどつと湧き出してくる。外は雨だ。昼間とは打って変わってひんやりとした空気が少し寒気を感じさせる。

そして悲劇は訪れた。

「ちよつと！いつまで閉じ閉じ込めとく気よ！」

蔵の中は空っぽだ。一年前、閉じ込められた時には冷蔵庫と布団だけはおいてあり、扉の前には常に誰かいたのだが、今は誰もいない。それはすなわち、彼女の悲劇を意味していた。

「無理だつて、これ以上！」

早く出せ！安龍は蔵の戸を叩く。誰も返事はしない。無理だつて。安龍はその場に座り込み珍しくベソをかいて、助けを請う。少女に悲劇は更に襲う。

「誰か助けてーっ！」

ゴトンと音がした。

「姫、助けに参ったぞ！」

高い塔に閉じ込められたお姫様を助けに来た白馬の王子様風に現れたのは、少女漫画なら間違はなくヒロインの憧れる年上の男キャラという美青年、白鳥朱雀である。

グギンッ！

涙目の安龍は白鳥の顔を見るやいきなりドロップキックを食らわせた。白鳥はうぎいと言って少しよろけると「いや、悪い悪いすっ

かりわすれてらわ」と頭をかいて笑いながらいう。

安龍は涙目のまま、女の子としては押さえてはいけない場所を押さえながら、蔵の隣の公衆トイレへ猛ダツシユ。

「あんなに慌てて、うんこだったのかな。ごめんねえ」

白鳥はポツリつぶやいた。すると割と大きな石が飛んできた。

墨江すみえしおん紫音は本殿を出たあと、上野木かみのぎと共に二階で眠る少女の元へゆき、少女の無事を確認した。沢野の話によると、命に別状はなく容態も安定しているとのことだ。

墨江はほっと一息着いた。眠っている彼女を見てみると、どうしても信じられない。これが天使だなんて。ただの女の子にしか見えないのだ。

安堵したら急に眠くなた。大あくびをしていると、「今日は遅いですから、休んでいかれては」とブロンドヘアみこの巫女、上野木かみのぎに薦められた。

それに甘え、一階のソファを貸してもらうことにした。

階段を降りて、一階の扉を開こうとしたとき、向こうから斧を振り回していたゴスロリメイド服の少女、安龍美弥毘あんりゆうみやびとさっきまで一緒に居た白鳥朱雀しろとりすずくが一緒にやってきた。

墨江思わず一方後ろへ下がった。

「ほら美弥毘」

白鳥が安龍を促す。

「大丈夫よ」

隣にいる上野木かみのぎが諭すように言ったが、墨江の顔は引きつったままだった。

安龍は墨江の元へ歩み寄る。

墨江は微朽ちて一步後ろへ下がる。

「ごっ、めんなさい……」

わずかに口を開いて言った。うつむいたまま、表情を見せないで

言った。

まるで子供が、親に叱られたときのように。

「はっ？」

「迷惑かけてごめんなさい」

「えっと……、あの……」

「だから、ごめんなさいって言うてんのよー！」

言うて、安龍は踵を返す。

「おまえも休んでいきやええのに」

白鳥がすれ違ふ安龍を呼び止め言った。

「人殺しに何言ってるのよ」

「言っとくけどお前、今回は誰も殺しとらんぞ。トドメを刺した奴は他の奴や」

「そんな言い訳通じると思ってるの？」

「炎大王の地獄裁判には弁護人をつけることが出来るんやで。言わんかったっけ」

「またそんないい加減な事を」

「ホンマやのにな……」

安龍と白鳥が何かを話していたが、墨江の耳には届いていなかった。

「蔵に戻る。謹慎中でしょ？」

安龍は土砂降りの中、傘も持たずに走っていった。

墨江は、何故かその背中が寂しげで、悲しげな感じがしてとても切ないと思った。

「少年、すまんがあんまり美弥毘のこと責めんたつてくれんか。今回の暴走はあいつのせいだけってわけでもないんや。まあへ々な言い訳なんやけどな」

墨江はコクンと頷いた。それを見計らって白鳥は続ける。

「別に許せっていうわけない。けど、あんまりあの子に負の感情を向けんたってほしい」

白鳥は踏み出す。踏んだ水たまりが音を立てる。スーツに泥が跳ね返っているが気にしない。勝手で悪いな。それだけ告げて、白鳥はゴスロリ少女のあとを追ったのだ。

ソファーに横たわる。墨江は思い出す。あの少女に出会った日のこと。

「一晩だけ止めてください！お願いします！」

（一晩って言ったよな。その後どうする気だったんだあいつ）  
（一人で、死ぬ気だったのか）

墨江は、ポケットからコインを取り出す。

” そうなのか……あいつ……”

コインを投げる。

コインは告げる。

”表”

「ちっ、」

墨江は舌打ちした。コイン占いに根拠など無い。でたらめだ。こんなもの当たるはずがない。だがしかし、墨江は確信した。あの少女は自分一人で消えようとした。

天使なんておかしなものを体に宿したまま。

「なんだってんだ……」

墨江はコインを握った。カいっぱい。

「今日は冷えるかもな。寒ないか」

「余計なお世話よ」

そうか。白鳥はそう言って、蔵の扉を占めた。さっきとは違い鍵は掛けられなかった。

別に信用されたわけではない。どうせ逃げ出すことはできないのだから。

安龍美弥毘は腰を降ろして壁に寄つかかった。体中がだるい。風邪に似た重たい感じが全身を支配する。美弥毘は思った。こんな思いまでして生きている事自体馬鹿馬鹿しいと。いつそのことあの天使に殺されればよかったのだと。もしかしたら自分の暴走はその願望によるものかもしれない。

屋根を打ち付ける雨の音が、眠気を誘う。安龍は壁に寄っかって目を閉じた。

(このまま、朝なんて来なけりゃいいのに……)

四十センチ四方の青白いタイルが敷き詰められた空間。天井は二十メートル近くあり、ちょっととしたコンサートホールほどの広さを誇るこの場所は、「部屋」や「オフィス」と表現するにはあまりにも不適格だ。なぜならここは大都会にそびえ立つ高層ビルの面積ほぼすべてを、間仕切りなしで作った場所なのだから。

敷き詰められたタイルはアクリル製だ。透明な板の下からは青白い光が見えるが、そのひとつひとつに電子回路のような細かいスジが走っていて、時々光の粒のようなものが行き交う。これ自体がコンピュータのマザーボードに相当するといつのであるから、馬鹿げていると言わざるを得ない。

馬鹿げた存在はなにもこれだけではない。この空間の中央。入り口からはまるで奥に控えているかと思うほどの遠くには仰々しい金色の屏風があり、その前に雛人形を飾る台座のようなものがあり、その上にどこか滅んだ王朝の王が座っていそうなきらびやかな、ここまでくると悪趣味と言わざるを得ない、金色のソファが背を向けて置かれている。

「妙舞か」

金色のソファから、喉から搾り出すようなしゃがれた声した。

「はい」

答えたのは、二十代後半くらいの女だ。黒々とした髪を胸のあたりまで伸ばし、釣り上がったキツイ目に赤いアイシャドーを乗せて、赤い口紅をしている。スタイルは極めてよい。身長は百七十センチ代、黒のジャケットを大きくふくらませる胸、タイトスカートからはみ出す足は程良く肉付き整ったラインが魅力的だ。

彼女は一步踏み出す。カツンと黒いヒールが床を叩く。

「よい、ブクがゆく」

金色のソファアームはくるりと回転する。そこにはあぐらをかいて座る白髪頭の男。髪もヒゲも伸びっぱなしだ。一步間違えればホームレスとさえ思ってしまう不気味容姿で、仙人のような装束を着ているが、キラキラひかるダイヤや金色のネックレスが何十もかけられ、指には産油国の王がしていてもおかしくない大きなダイヤの指輪がいくつも付けられている。

「よいしょつと、あれっ？おかしいな」

男は両端の膝を抱えなにやら座ったジャンプする。まるであぐらをかいたまま宙に浮くことができるんでも言わんかのようじ。

「飛べないぞ？」

男は舌打ちする。機械の調子が悪いようだ。全く。と言って飛ぶのを諦めた。

女はそんな様子を見てもなんともしらない。ただ静かに口を開いて言う。

「教祖、七堂との連絡が途絶えております」

「ふむ。ブクの計画に失敗は許されないのだが」

この距離でも十分超えは届く。なぜならこの広い場所には二人しかないのだから。

「いかがいたしましたよう」

「あのような雑魚一人遊ばせていたところで、ブク計画には何ら支障はない。放っておく」

「かしこまりました」

「君には妨害に加担した一人をいなしてもらおう」

「例の女、ですね」

女は頭を下げる。それから一步引いて、踵を返しエレベータのボタンを押す。

「ハツ蜘蛛」

金色のソファの前にスクリーンが出現する。ただしそれは布のスクリーンではない。SF映画に出てくるような、虚空に映像の映しだされた、最新鋭のスクリーンである。

スクリーンにひどいノイズが走っている。映像から銀色の髪をした男の姿が確認できる。十代後半ぐらいの少年だ。

「ハツ蜘蛛、ターゲットがもう一人増えた。七堂のミスは許しがたいがこれは思わぬ収だ。ブクはとっても嬉しい。ぜひこれもコレクシヨンに迎えたい」

「あみんだ教祖阿愍驛」

「三ツ蜘蛛をやる。2つとも、必ず持つてきてほしい」

「わかりました。我等が父、教祖阿愍驛」

スクリーンは消える。金色のソファに座る男は見上げる。天井には無数の光、床と同じおびただし数の電子回路。夜空のようだ。教祖は思った。しかし、その光の粒はまるで死骸に群がるウジ虫のよう、不気味に動き回っていた。

「世界は我が手に、我が神科学の光に基づいて……」

フフフ、フヒヒヒヒヒツ、フヒヤヒヤヒヤヒヤアッ！

煌々くわくわく神明教、教祖阿愍驛あみんだは笑う、不気味に、不敵に、声を上げて笑う。



「気がついたようです」

ソファーに横たわる墨江紫音すみえしおんを起こしに来たのは、少女の治療に当たっていた巫女みこ、沢野百合亜さわのゆりあであった。部屋の時計を確認すると、時刻は午前十時を回ったところだった。

沢野に促され、墨江は事務所の外へ出る。彼女に続いて外の鉄階段を登る。

太陽はすでにかなり高い位置にあり、鉄の階段を熱しているため、手すりは火傷するか思うほど熱かった。

「普通なら一週間は入院してもおかしくないのですが、どうやら特殊な力があるらしいですね。何でも天使のコピーがどうたらという話を」と、背後から声がした。

「母上」

墨江は振り向く。そこにいたのは、袴着はかまぎの少年。昨日何やら電波なことを延々解説していたオカルト科学の第一人者を自称する、博士と称される少年、沢野秀和基（十二歳）である。

「ハハウエ？」

沢野少年は黒ぶちメガネを人差し指で持ち上げ墨江を見つめる。

墨江は少年と巫女みこ沢野を交互に見つめる。沢野百合亜はぱちりと不思議そうな表情をしていたが、やがて紅潮し握った拳を震わせ、「私はこれでも医学部卒業したれっきとした医師です！子供一人ぐらいいいたっておかしくないでしょう！」と怒鳴った。

「いやだって、」と言いかけてその先を飲み込む。（どう高く見積もっても大学生ぐらいにしか見えないですよ！）は、この場合禁句だろう。

何かフオローしようと必死に言葉を探すが適切な言葉が出てこな

い。

「母上のそれは少々貧弱で大人としての条件を満たしていないと、その若者は判断を下したようです。最も僕はその貧弱なそれに育てられたわけですからそういう失敬な判断をするこのボサボサ頭になにか言つてやりたい気がしなくもないが、あいにくこの方面には関心がなく知識が乏しいので反論の材料が見当たらない」

「いやいやいやいや！そんなコトコト思つていません絶対！！！！」

墨江はわなわなと手を振って全面否定するが、沢野母の頭にはおもいつきり怒りマークが出ている。そして手に持っている鍵をおもいつきり投げつけようと、ピッチャーの様なフォームを描くが、それではかえって大人気ないと思つたのか何とかとどまった。

畳の部屋の中央部に置かれているパーティーシヨンの向うに少女がいる。沢野母は不機嫌そうにさつさと足袋を脱ぎすて、少女のいるパーティーシヨンは反対の側へゆく。

奥の棚から何か持つてきたようだ。沢野母は息子である少年博士に渡す。

「あの、入つてよろしいでしょうか」置いてきぼりの墨江は情けない声で断つたが、沢野母は答ええない。

するとパーティーシヨンの向こうから覗き込むよう、あの少女がパチリとした大きな瞳を墨江に向けた。

「よう、大丈夫だったか」

墨江がそう言つと、少女は布団をまとつたまま飛びついてきた。

「ええつと……」

抱きとめて、彼女の細い腕の暖かさを両手に感じる。布団の下は包帯以外何もつけていない。無論包帯はサラシ状態で巻かれているが、それははつきり言つて下着姿よりも上位ランクであり、あまりにも刺激的だ。墨江は焦っているもののどうしていいのかわからずそのまま硬直。

「まだ起きてはいけませんよ」

沢野百合亜がツンとした声で言う。少女はしゅんとして布団に戻る。墨江も靴を脱いで畳に上がった。

「それじゃ、僕は続きをやるので」

少年博士こと沢野秀和基が何かメモリースティックのようなものを持って部屋を出ようとする。墨江は呼び止めて少年の耳の位置にしゃがみささやく。

「博士のお母様は本当にあなたのお母様で？」

「血縁関係という面から言えば真正正銘の親子と違って間違いありませんが、どういう訳か僕ら親子に血縁関係を否定したがる男性陣が多いようで、何がそう思わせているのか研究の余地があるかもしれません」

「ええと……、母上様のお年はおいくつで？」

「さあ、僕は興味がないので。本人に聞けばいいでしょう。母上」と少年が言いかけたので慌てて口をふさぐ。なんでもありませんよ、と。

一般的に女性に年齢を尋ねるのはタブーだ。この状況ならなおさら。本人はあまり年齢のことには触れられたくないだろう。

尤も、この少年が十二歳である以上。仮二十六歳でこどもを産んだとしても二十八歳。大学卒業とっているから、それでもつじつまは合うのだが、おしとやかなこの女性がそんなに早く子どもをつくるだろうかなどと考えていると、三十を過ぎている可能性も否めなくはない。いずれにせよ実年齢と見た目のギャップがありすぎるのは確かだ。ここは聞かないほうがいいだろう。墨江はそう考えつばを飲み込んだ。

少年博士は口をしばらくきょとんとしていたが、興味がなくなつたのかさつさと部屋を出てしまった。墨江はふうつと危機を回避して安堵のため息を付いてから、部屋へ上がる。そして布団に横たわる少女のそばに腰をおろした。少女はすかさず彼の手を握りしめ離さない。

「ええと……お嬢さん？」

柔らかく冷たい細い指の感触が墨江の汗ばむ手に広がる。

「おー気がついたかー！ピュアピュアエンジェル！」

白鳥が勢い良く扉を開け放って部屋へ上がる。後ろにはゴスロリの少女もいたのだが、彼女は入ってこない。

「何なのそのへんな呼び名」

続いて、バケツに携えたブロンドヘアの巫女、上野木が続いてやってくる。

「大丈夫だ。あの人は昨日たすけてくれたんだよ」

襲ってきた奴も一人いたが、墨江は彼女を安心させるためそういった。

少女はゆっくり起き上がって布団を羽織る。

「ご迷惑おかけしました」

そう言ってお辞儀したのだ。

「礼儀正しいのね」上野木はにかやかに微笑んだ。

「ところで、その子の服どうにかならない？シャツ一枚みただったし」

「それなら巫女装束はいかがでしょう？社務所に予備がありますから」

中年の男、宮司と呼ばれた男が、が浄衣という白い装束で笏を持ってやってきた。うちの宮司ですよ。上野木が簡単に紹介する。昨日の簡易な袴とは違い、神事を執り行う際に身につける正装であった。

だらしなくあぐらを書いて座っていた墨江はなんだか申し訳なくなり慌てて正座した。

「なんなら取ってきましょうか。サイズは……」

「ダメに決まっているでしょう！巫女の装束は髪に使えるものが着るものです！」

だが上野木が抗議したので、そうですかと宮司はしゅんとなって腰をおろした。

「それなら美弥毘さんの着ているゴスロリメイド服はいかがでしょう？ね、浅香くん」

「いやいや、細井さん。この子の場合、ゴスロリではなく正統派メイド服のほうがお似合いでは？」

今度は、二人の神職の男が達が割り込んできた。一人は二十代前半くらいの少し茶色がかかった髪の若い男浅香、もう一人は三十代後半の、サラリーマンタイプといった感じの七三分けをした男、細井だ。

「いやいやいや、そこはやっぱりこれやる！」と、白鳥がさつと畳の上に広げたのは……

セーラー服（赤いリボンバージョン、しかもスカートが短いコスプレ用）……

男性陣の視線が一気に集中。墨江も思わずゴクリとつばを飲む。

宮司の烏帽子がずり落ちる。薄い紙を横に流していたためか髪の毛数本広いおでこにずり落ちる。

「ないと思っていいたらあなたが持っていらっしゃったのですが、神主様」

「神主様はやめい、すーざんと呼ぶべしと言っとろーが」

と二人なにやら不穏な会話をしていると、背後になにやら殺気を感じた二人が振り向くと「どういうことですか」と、上野木が低い声でいう。

それを見た少女がパチリと目を開いて言った

「あ、バーコードさん」と。

墨江は怪訝な視線を宮司の薄い頭におくる。宮司は厳かに少女の顔を見つめる。

「これはこれはお嬢さん、あなただったのですか」

「ハイ！」

「よくぞご無事で。ようこそ我が白鳥大社へ。宮司の永尾と申しま  
す」

「その節はどうも、おにぎり美味しかったです！」

(ちよつとまで、確かおにぎりといっしょに……)

「ってか、おっさん！ブルマの体操服を着せて何しやがるつもりだ  
った！」

墨江は突っかった。宮司はわなわなと手を振って「何って、何  
も？」と言ってるが慌てている。

「なんや、ブルマ無くしたってゆってたけどその子にあげたんか」

「はあ？」上野木が怒りマックスの声を上げる。

「そやけどスクール水着はどうしたんや宮司」

空気を読まないで白鳥がまたしてもよからぬ単語を発する。宮司  
の額から汗がにじむ。床に手をついて装束を着崩し、宮司は口をパ  
クパクさせながら

「いや、それはですねえと……」と言い訳を必死に探そうとする  
が言葉がでないらしい。

直後、怒りの沸点を越した上野木が「あなたという人は神職であり  
ながらそんないかがわしいことを！」と言って、柄杓で頭打つ。

宮司は頭を抱えて「違うって、私はただそのお嬢さんが濡れた服で  
寒そうにしていたからたまたま持っていた服を」と下手な言い訳  
をする。

「だったらどうしてたまたまそんなものを持っていたんですか！」

「それは神主様に渡されて」

「二人共なにをやってるの！！」

柄杓の標的が白鳥に向く。「違うって、宮司に頼まれたから渡し  
たんやって」と白鳥は宮司に罪をなすりつけようとする。

「ひどいですよ神主様、マネキンに着せる衣装はこれがいいといっ  
たのはあなたじゃないですか！！」

「はあ、何言ってるのよ！二人とも！」

「だから切ったご神木で作ったマネキンにブルマとスクール水着を

きせて鳥居の前に置いといたら客引きできるかな……なんて……」

事の真相はこうである。宮司は彫刻が得意だった。それに目をつけた白鳥が、古くなって切り倒された木の丸太を宮司に渡し、女の子のマネキンを作るよう指示。始め巫女服みこを着せるつもりだったが、宮司が調子に乗って三体も作ってしまったので（しかも等身大）ブルマの体操服とスクール水着（旧型）を宮司くわじに私それぞれを着せるよう指示したのである。宮司は素直でお人好しだ。そして白鳥に絶大な信頼を置いている。当然白鳥の指示を断ることが出来ず、彫刻が完成するまで隠し持っていたのだが……嫁に見つかり問いただされ、やむなくするか隠そうか悩んでいた。そしたら偶然腹をすかせた少女を発見し、ついでに体操着を上げたというわけだ。決していかがわしいことをしようとしたわけではない。その説明をし終える間宮司はずっと柄杓攻撃を食らっていた。ただでさえ少ない髪が乱れて余計に悲惨さを醸し出している。

ちなみに、宮司が水着だけを捨てたのはそれが使用済みだとわかったからだ。どうしても旧タイプが欲しかった白鳥がネットで手に入れたらしいがそれはさすがにダメだろう。

「しゃあねえ」

呆れた墨江は、とりあえず自分のシャツを脱いで少女に渡す。シャツの下はあのださい和 Tシャツだが、それも仕方なかった。

「汗臭い」

少女は不満そうに受け取って羽織る

「できれば下着も……」と、少女が恥ずかしそうに言う。

沢野はそうねといったが、あいにく彼女も持っておらず、食事を取ってくる。と言って怒ったまま出て行ってしまった上野木のだとちよつと大きすぎる。

すると、扉の向こうに白い子供用のブラジャーを差し出す細い腕が。沢野はそれに気づいて受け取って「なんで持ってるの？」と聞

くと「れ、レディの嗜みよ」とゴスロリ少女は言葉をつまらせながら答えた。

沢野はパーテーションで男どもの視界を遮り、少女にブラを渡す。墨江も追い出された。

「うっ、キツイですねこれ」

「そうね。やっぱりあの子発育悪いのね。呪いのせいかしら」

ゴスロリ少女安龍美弥毘は扉の向こうでつぶやく

「うっ、うるさい！」

上野木が食事を持ってきた。お盆に乗っていたのは典型的な日本の朝食。焼き魚と味噌汁と白いご飯。神職達はすでに終えているらしい。墨江と少女はそれをいただく。

「うまい……」

みそ汁の味に感心した。さすが神社つてだけのことはあるなと墨江は思った。

（誰が作ったんだろう？沢野先生あたりかな）

「そういや、ピュアピュアプリティエンジェル、なまえきいてへんかったな。あ、そっか俺は白鳥朱雀くわかしらすうせ。すーざんと呼んでくれ。この神社の管理会社をやってる」

少女はうつむく。そして何も言わない。墨江はその理由を知っている。

「なまえ、わからないそうです」

墨江は彼女のかわりに言った。

「気まずい空気を取り去ろうと、宮司みやじが口を開く。

「ええと、こっちの二人は浅香君と細井君で、それからこっちが沢野百合亞先生、それから……」

と、宮司は上野木を紹介しよとしたところで口を噤んだ。

「私は上野木かみのぎ」

仕方なく上野木自ら名乗ったのだが、何故かブロンドヘヤーの巫み女も口をつぐんだ。





午後、上野木紗智子は制服から少女の見元を割り出そうと、そのデザインを採用している学校に向かった。

少女は墨江がそばにいないと落ち着かない様子だった。沢野百合亜によると「極限状態で出会ったあなたが優しくしてくれたから、たぶんあなたが一番安心できるのでしょう」とのことだ。それを聞いて墨江は複雑な気持ちになった。

（生まれて初めて女の子に好意を向けれた理由がそんな非劇だなんて……）

墨江すみえしおん紫音は白鳥朱雀に呼び出され神楽殿に向かった。少女が眠ったのを見計らって。

この神社は広い。ドーム球場一個分ぐらいの敷地があるのかもしれない。事務所のプレハブごやから神楽殿まで行くだけで汗だくになった。

なるべく彼女のそばに居たかった。けれども知っていることを話しておきたかった。そしてそれは出来れば彼女のいないところで。

「なるほど、記憶喪失ですか」

神楽殿のコンピュータ前にいる少年はキーボードを叩きながら言う。

墨江は少年博士と白鳥に、これまでの経緯を話した。まず部屋にいた事（裸を見てしまったことはこどもの前で話せないので割愛）、記憶を失っていること。それも、彼女個人に関するものだけ都合よく。

白鳥は少年と共にモニタに写った数列を見つめていた。

「沢野つちが催眠誘導で過去の記憶を辿ったけど、十日以前の記憶には辿り着けんらしい」

「やはり天使憑依との関係があると考えるのが妥当でしょう。考えられるケースは、憑依のシヨックで記憶を失った。もしくは、天使を憑依させるため自己存在証明を希薄化させる目的で個人的記憶を意図的に削除したかのいずれですが、僕は後者の可能性を高いと仮説付けます。おそらく地が喪失による心の隙間にねじ込む形でエンジニアリングをインストールしたのでしょう。最もこのへんはオカルト的で僕の範疇を少々こえているので断定致しかねるのかもしれませんが」

「じゃああいつの記憶は戻らないのか？」

「母上が無理だといえは無理なんでしょう」

「せめて名前だけでも分からないか？」と、その時、白鳥が携帯電話を取り出した。

「残念やけど、それも難しいみたいやな。シスターが学校に行つてくれたけど無駄足やってみたいや。そういう生徒はおらんらしい」

「僕も学校のサーバーを調べましたが、同一人物と思しき写真は在校生にも卒業生にもいません。制服は彼女の身元特定にはつながらないと考えるべきでしょう。おそらく何処かで拾ったか、あるいは誰かに意図的にきせられたか。それ以前に、市のIDデータベースを洗いましたが、同年齢の失踪者や死亡者から該当の人物はいませんでしたし、情報管理が不徹底な外の人間となると、こちらでは全く把握できません」

「じゃあ、あいつについては何もわからないのか……」

(そんな……)

墨江の表情が曇る。こんな全部折れの妄想だ。そう思ったか。だが、すべて現実に起きたことなのだ。

墨江は思う、どうしていつもこう現実は人の思いを踏みにじることばかりなのか。

ここに本当に、神様なんてものが居るなら一言問いたい。

「なぜだ」と

白鳥が墨江の肩に手をおいた。

「悲劇つてのは、悲劇で終わらせるから悲劇なんや。最後に笑えば喜劇になる」

それだけ言つて白鳥は神楽殿を出てゆく。

安龍美弥毘あんりゆうみやびは教室で一人昼食をとつていた。彼女に友達と呼べる存在はいない。あえて関わらないようにしている。それに学校にくる日数も最低限といったところで、学生生活なんてものには全く興味がなかった。

教師の前に備え付けられた古びたスピーカーが告げる。

「3-Aの安龍美弥毘あんりゆうみやび、今すぐ校長室に来なさい」

おかしいな、校長は居ないはずなのに。安龍はそう思ったが、うるさい教室に居座る理由もなかったので早々と弁当を済ませて呼び出しに応じることにした。

校長室にいたのは校長先生ではない。もちろん理事長でもなかった。掻き上げた髪をきざつたらしくわざと数本垂らした、眼鏡のスーツ姿の男。見覚えがある。昨日公園で一線を交えた。管理局の犬、七堂幸しちどうしゆんである。

「わざわざご足労願つて済まないね」

七堂は背を向けたまま言つ。

「そつちこそ、こんなところまでご苦労様」

安龍は髪をくるくる巻きながらうざつたそうに言った。

「で、なんのよう？ ストーカーならご遠慮いただきたいんですけど」「それも悪くないが、あいにく性的対象とするにはいささか物足りない」

安龍は胸のあたりをぎゅっと握り締める。

「何、心配ない。まだまだ成長期だ。気にすることもなかるう」

安龍はなにか投げてやりたい衝動に駆られたが。斧は神社の蔵に没収されたままである。

「セクハラもゴメンですが。(一人で十分だし)」

「おっと、おしゃべりが過ぎたようだな。本題に入るう」

七堂がそう言って指をぱちんとならした。直後、安龍の着ていた制服が弾ける。

下着姿になった安龍は両腕で胸を抱き、壁に身を寄せる。

「なっ、何すんのよ！」

七堂は背を向けたままバッグを投げた。

「着替え給え。そちらのほうが私好みだ」

「どうしてこれを」

かばんを開ける。そこには彼女の戦闘服であるゴスロリメイド服が入っていた。

「駅のロッカーに預けるのはよしたほうが良い。私のように管理局の映像を自由に入手できる人間にとってそれを盗むのはたやすい」

安龍は警戒しながら、服を着る。

「準備が整ったようだな。では、行くでしょう」

「どこへ？」

「Y・NETだ。あの教祖を殺しに行く」

「裏切りってわけ？」

「裏切つてなどいない。私は始めからあのゲスに仕える気など毛頭ない。ただ目的に近づくため利用したまでだ。目的を達成すれば捨てるのは当然だろう？」

「念の為に行っておくけど、この程度じゃなんの脅しにもならないわ」

「わかってるさ。もちろん報酬は弾む。君には手伝いをしてもらいたいのだ。ほしい物何でも買ってやるう。なんなら」

「お生憎さま。そういうの全く興味ないし」

「そうかね、ではごうしよう」

七堂は初めて振り向いた。右手には銃を持っていた。「そんなの

が脅しになるとでも思ってるの？」安龍は鼻で笑った。

「そうではない、これは前にも出した靈気銃だが、中身は違つ」

あつそう。安龍は興味なさ気に言つて校長室を出ようとする。

「あの擬天使が君を暴走させた。ならば天使の力を攻撃に変えれば君を傷つけられる。ここにはあ擬天使プロトエンジェルと同様のエネルギー体が凝縮されている」

「それが？」

「君は恐れているはずだ。自らの暴走を」

安龍は眉をひそめる。

「00特務部隊。特別市最高機密機関にして最強の懲罰部隊とされた、市の憲兵。それをたつた一人でしかも一瞬で壊滅させた君の実力を見越して頼もう」

安龍の脳裏に嫌な記憶が蘇った。かつて、暴走し、自らを長として組織された特務機関。

血の海、惨状、地獄。どんな表現をしてもまだ足りぬ最悪な過去。

「今いる仲間さえ、暴走に巻き込むこともなからう」

「残念だけど仲間なんて居ない。ただ利用してるだけだから。それに一人私の力を上回るバカが居るし」

「君の主人か。そりやまた興味深い」

「あいつに殺されても知らないけど、それでいいなら」

「その前に終わるさ」

「念の為に言っておくけど、これは利害の一致」

「ああ」

「私の願いは一つ。奴からの開放」

「承知した」

七堂はパチンと指を鳴らす。直後、轟音と主に窓を叩く空気の塊が襲つ。

七堂は窓を開け放つ。校長室の書類が風で飛ばされる。乗りたまえ。七堂は手を伸ばして迎える。安龍はきざつたらしいその男に寒気がしたが、彼に従いはしごに足をかけた。

「ちょっとあんた！見たら殺す！」足をかけて気づいた。自分が先に登ったのは失敗だったと。七堂はくツクツツと笑って、彼女がへりに飛び移るのを待ってはしごをつかんだ。

へりは飛び去る。風が校舎の窓ガラスを叩く。生徒たちはなんだなんだと物珍しそうに、窓辺に集まる。教師側でて駆けつけるがへりはあつという間に遠くへ消えていった。

午後五時を過ぎていた。外はすっかり夕焼け空になっていた。少女と墨江は二人きり、事務所の二階にいた。少し熱があるらしい。

沢野の話によると大きな傷を追った場合よくあることでさほど心配ないそうだ。墨江はほとんどの時間彼女のそばにいた。名前さえ知らない、彼女のそば似ずつと。少女は時折目を覚ますと、墨江の顔を見て安心しました瞼おを閉じる。

「お前、せめて名前だけでもわかればなあ。呼ぶとき困るんだよね……」

墨江が独り言のようにつぶやいた。少女の額を撫でる。少女がゆつくりまぶたを開いた。

「あ、起こしたか悪かったな」

「いえ……」

少女はなにか言いたげに櫻色の唇を噛んだ。

「なんか飲み物もらってくる」

「あの……」

墨江が立ち上がるうとすると、少女はかすかな声で言った。

「名前……付けてください」

「えっ？」

「私……たぶんもう思い出せないから。紫音さんが付けてください」

少女は静かに言った。墨江目頭が熱くなる。振り向かず言う

「ああ」

考えとく。墨江は振り向かない。なぜなら悲しかったから。

名前。人間の、一番基本的な、けれども、最も大切なアイデンティティ。生まれてすぐ、与えられるはじめての贈り物。両親との絆。自分と他人を識別する。誰もが当たり前にとっているそれ。しかし彼女は、それすら失った。誰かが、意図的にそうさせた。許せない。怒りよりも、むしろ悲しかった。

視界がにじむ。墨江は白鳥の言葉を思い出した。

「だったら、俺が最後に笑わせてやる！」



夜のことである。墨江紫音は神社から程近い銭湯の脱衣所にいた。  
(やつぱりちよと、家に帰らないと……)

少女のことが気になる。出来れば側に居たい。そう思っていたのだが、どうしても帰らなければならぬ事情ができた。

それは……

「まあピュアエンジェルのが元気になるまでしばらくここに追ったらええ。飯は心配せんでええし、服は俺の貸したる。宮司くわじが近くのスーパーでパンツ買ってきてくれる話やから一応サイズだけゆったつて、風呂は近くに銭湯があるしな」

という話で、収入のあてもないただ飯食えるならラッキーなんて打算もあつて、なんとなしに神社にもう一泊することを選んだのだが

浴場から上がって、体を吹き終え……

「白のブリーフ」

ブリーフパンツ一丁でブルマ体操着の女の子のマネキン掘ってる  
バーコードおやし

- というシーンが脳裏をよぎる -

あくまでも墨江の勝手な妄想です。

人の金を使わせて買ってきてもらって申し訳ないが、これはさすがにヒク。

幸い他に人はおらず、一度脱いだパンツを履くのも躊躇われるのでやむを得ずそれを履くことにしたが、

(もし交通事故とか病気とかで病院に運ばれ脱がされたら最悪だ。

ここは最新の注意を払って怪我や病気をしないよう気をつけるべし) ときが気じゃなかった。

そんなわけで小学生以来の白ブリーフを体験するはめになった墨江紫音なのだが、履き心地が極めて悪い。もちろん収まりも。

一刻も早くブリーフ地獄を抜け出したいと心の底から思ったのであった。

（いや、それ以前にゴスロリ襲撃以降ほったらかしの状態でのまらずいだろうし）

ちなみに白鳥朱雀が渡した服は、アロハシャツと短パンであった。（京都ではお茶漬け出したら帰って合図らしいが、これはこれは帰ってことなのか）

派手なアロハシャツも趣味ではなかったが、着るものがない。仕方なくそれを羽織って、ズボンは自分のものをはいておいた。さすがに白ブリーフに短パンをはこうなんて変態趣味はなかった。

「明日、一度家に帰ろう」

墨江はそう決心して、白ブリーフとアロハシャツを受け入れることにした。

翌日昼、墨江は事務所の前で紫のワゴン車を洗い流している浅香に出くわした。手には表の通りに面したところに設置された自販機で買ったジュースを二本持っていた。

墨江はチャンスと思いつかさず彼に近寄って言った。

「あの、そろそろ一端家に戻りたいんですけど、ここから、長北は近いですか？」

「ああ、それなら自転車で十五分ぐらいですけど、よかったらお送りしますよ。自分、これから暇ですし」と浅香は愛想よくに返答したのだ。

「でも悪いですよ」

墨江は本音とは裏腹、社交辞令の『断り』申し出た。

「いえ、そのくらいのお手伝いはさせていただきます。安龍さんがご迷惑かけたのは我々の責任ですから」

「それじゃお言葉に甘えて」

こうしてめでたく送迎役をゲットした。

できればブロンド巫女さんの上野木沙智子さんにきたしたかったと墨江は少々口惜しく思ったのだが、残念ながら彼女は今日は不在らしい。なんでも、何でも上野木家かみのきの大黒柱かみのき上野木恭子なる彼女の姉が運営するインチキ教会喫茶でシスター風のメイドをやっているとか。

階段の方から声がした。あの少女が、昨日と同じ格好で出てきたのだ。下着は沢野が持ってきたものを着ているらしいが、服は合うものがないらしい。一番サイズが近い沢のは何でも仕事着以外殆ど持っていないらしい。やむなく一枚限りの部屋着を持ってきたのだが、どういう訳か少女のほうが拒否を示したらしく、コインランドリーでさつと洗ってきたものをもう一回着るは目になったそうだ。

少女は階段をゆっくり降りてきた。カンカンとならす足音が軽やかというよりはむしろ頼りない。まだ本調子ではないのだ。

「私も行く」

少女は墨江のもとへ駆け寄って言った。

「ええと……でも……」

「仕方が無いわね」

沢野が後ろからついてきて言った。

「まだ本調子じゃないからあまり長いあいだはダメよ」

「いやすぐ帰ってくるつもりですけど」

墨江は頭を描いて言い訳をするように言った。少女が服をつかんで話さないからだ。

何もついてくることないのになど、思ったのだがこの様子だと泣くかもしれない。

「私も薬取ってこないといけないし……、上野木かみのきさんがいればよかつたけど、喫茶の方だから」

沢野はなんだか申し訳なさそうに言う。

「気にしないでくださいお二人は僕が責任をもってお連れしますから」

浅香が陽気に笑って言うので、なら任せると沢野はしぶしぶ承諾した。

「ここです」

浅香の運転する車に載せられ、墨江は二日ぶりに我が家にたどり着いた。

（そういや、引越して四日目、見知らぬ神社にいた時間のほうが長いつてとになるんだよな）

なんて思いながらマンションの階段を上がる。少女は付いて来たがっていたが、体の調子を考えるとあまり動かないほうがいいだろう。そう思った墨江は、すぐ戻るから車で待っていると諭し、自室のある五階へと向かった。

部屋の鍵を開ける。扉を開くと、狭い台所に受け取って手付かずのままの、衣服のはいたダンボールがまず視界に飛び込む。

それはいいや。墨江はダンボールを無視して部屋の中へ。悲惨な光景だった。

ガラスは粉々、床は雨で濡れたあと乾き、黒い水滴の跡で汚れている。

その光景に、ものすごく現実逃避したい気分になった。

（そういや、あのゴスロリが空間封鎖とかいう結界を張って靈気が外に漏れないように処理したらしいが、それがうまく作動しなかったなんて、あのブロンド巫女さんが言ってたよな）

そんな突飛な話は墨江にとってはちんぷんかんぷんでどうでもいいことだった。それを言ってもこの惨状の言い訳にはならないだろう。

押入れから銀色のスーツケースを取り出す。また出てきた。青地

に和のTシャツ。前に板おじさんが酒の景品で大量にもらった代物で、誰も着ないから居候の墨江に渡されたのだが、何も考えずにスーツケースにぶち込んだのは失敗だった。

ダンボール野中を開ければましな服もあるのだが、それも面倒なので、墨江はそのださいTシャツを二枚取って、ついでにYシャツも一枚、そしてトランクスを三枚と適当に袋に詰める。そして墨江はその場でアロハシャツと白ブリーフを脱ぎ捨て自分の服に着替えた。

スーツケースを押入れに戻す。その際、ブルマの体操着が視界に入った。

（あの子の住む場所が決まって、引き取ってもらうまで絶対に触らないぞ）

墨江は胸に手を当てて誓った。急ぎ足で部屋をあとにする。階段を飛び降り、車に戻ると少女は少しうつむいていた。

「どうした？」

少女は墨江のシャツをつかむ。

「ごめんな」

墨江は少女にむけて優しく言った。

「あの」

車を少し走らせたところ、少女が運転席の浅香に向かって言った。

「なにお嬢ちゃん？」

「すみません、ちょっと寄って欲しい所が……」

少女の指示で、とある公園にたどり着いた。斧を振り回すゴスロリ少女と対決したあの場所だ。待っていたほうがいいでしょうか、浅香はそう言っただけで車にとどまった。

目立つものは片付けられていた。横倒しの自販機も、斬撃を食らって真つ二つに折れた鉄パイプもない。コンクリート製の遊具も消えていた。しかし爪あとはいたるところにあった。レンガや植木の

傷跡、そこだけ不自然に消えたブロック塀、不自然におられた枝。  
あの夜の光景が今でも鮮明に脳裏に蘇る。

「わんちゃん……」

少女は公園に足を踏み入れて一言つぶやく。足が勝手にその現場に近づく。そんな要するで少女は歩き出す。墨江も後を追う。

「花束」

少女が足を止めた場所に、白い売りの花束が置かれていた。飼い主だろうか、墨江は思った。

「巻き添え食らったのか……」

風が吹く、少女の、なぎ黒髪をさらう。少女はうつむく。

「可哀想にな」

墨江はしゃがんで、目をつむり、そっと手を合わせる。

「巻き添えじゃ……、ありません」

少女はかすかな声で言った。墨江はハツとして少女の顔を見上げる。

「私が……、いけないです……」

墨江は立ち上がった。少女の向かいに立って、方にポンと手を載せる

「私が……」

「何言ってるんだ」

「私がいなけきや、この子が死ぬこともなかった！私がいけない！私がいたらみんなの迷惑！！」

少女の体に光が走る。瞳から虹彩が消え、青白い氷の瞳に変わる。背中からなにか出てくる。描かれたのは翼だ。うつすらと、光で

描かれた禍々しい翼。

少女の髪が銀色に染まる。

墨江の背筋にゾクリとした悪寒が走った。

「お前！！」

墨江は慌て少女の肩を揺らした。

ハツとして、少女は我に返る。元のつややかな黒髪に戻り、体を囲む光も消え、翼もなくなつた。

一体何が。墨江は理解できなかった。

少女は泣き崩れる。

「私には……名前も、帰る場所もない……」

「こんな私……存在する価値ない……」

（何言ってるんだ！そんなことないだろう！）言ってるやり返りたかった。けれども、なぜか口は重く閉じて開かなかった。

墨江は彼女を抱いた。少女の髪が揺れる、長い黒髪が風に触られ空を舞う。

少女は濡れた瞳を拭わなかった。墨江はポケットに手を突っ込んだが、ハンカチは持っていなかった。

「とりあえず神社に戻ろう」

おかしい言葉だった。正しい言葉だとも思わなかった。とりあえずでしか無い帰る場所。彼女のいる場所。

墨江にはそれ以外にも言えなかったのだ。墨江は思ったそんな事しか言えない自分は情けないと。存在する価値がないのは自分のほうだ。全く情けない。

墨江は少女の手を引いて浅香の待つ車へ向かう。公園の外、車の扉を開けるまで決して、手を放さないでいた。

穏やかに揺れる車の後部座席で、少女は眠っていた。柔らかい頬が墨江の肩に触れて、静かに、心地良さそうな寝息を立てながら墨江は少女の頬をつついた。少し疲れたのだろう。さっきまでずっと泣いていたのだ無理もない。

あの光はなんだったんだろうか。天使の力というものだろうか。墨江は先ほどの光景を思い出しながら考えた。けど分かるはずもない。墨江は考えるのをやめた。

携帯がなった。

車は神社のある一角に差し掛かったところだった。ポケットから取り出して画面を確認した。知らない番号だった。出ようとも思わなかったがすぐに切れた。

「他に寄るところはありませんか？」

浅香が親切に尋ねたので墨江はそうだ、と思い立って

「あの、銀行行きたいので先に行ってももらえませんか」と、車を降りた。

（さすがに三日も連続でただ飯食う訳にはいかない。せめて食事代を渡すぐらいはしないと）そうもいながらコンビニを探す。携帯の残金を確かめるととても人に言える額じゃなかった。

（小学生の財布か）

降りてすぐ大通りに面したところにコンビニはあった。

コンビニのATMを操作する。携帯をかざしてATMに接続し、市民IDを入力する。

めんどいな、とおもいながら携帯のメモリに記されたIDをタッチパネルの画面に入力し、パスワードを入れる。何でも、不正な引き出しを防ぐ目的で金融関連のやり取りはすべてIDを利用するよになっっているとかで銀行に行くたび、いちいちこのめんどくさい作業をしなければならぬ。



むろん、一回のチャージ金額を上げればその回数も手間も減るのだが、チキンでなおかつ機械に疎い墨江はどうも三万円以上ここにチャージする気にはならなかった。

（今じゃ現金よりこつちって人の方が多いけど、にしても一ヶ月分を持ち歩くのはさすがにリスキーだよな）

・ピピーツ・

聞き覚えのない電子音が鳴った。タッチパネルのが面が変わる。

「このIDは現在停止中です」

画面中央、赤い文字が大きく告げる。

墨江は携帯を端末から外す。もう一度はじめの画面に戻って、最初から操作をやり直すのだが、何度やっても同じ。

（どうなってる！）

墨江の額に嫌な汗がにじむ。焦って機械を叩いたり、携帯をさすったりしていたのだが、店員に不審なまなざしを向けられ、仕方なくコンビニを出た。

カスタマーセンター

市民相談窓口に問合せた。コンビニをすぐの路地、液晶画面をよく確認できる影に入って電話をかける。

携帯の画面を操作する手が震える。

（まさか……、年齢詐称がばれた？いや、でも、それはりえないはずだ。市が黙認している）

それはあくまでも噂レベルの話だ。実際はどうなのかわからない。墨江は焦る。コールが鳴る、何度もなつて、ようやくつながった。

ガイドライン

「該当のIDには市民規約違反が確認されております。今後ID停止の解除が行われることはありません。恐れ入りますが、健全な市の運営、市民の安全のため必要な措置ですのでご理解のほどよろしくお願い致します」

だが職員は出なかった。自動アナウンスが一方的に流れるだけだった。

「なんでだ！なにが悪いんだよ！！」

「申し訳ございませんが、ID停止理由につきましては、当規約に基づき一切非公開とさせていただきます。ご理解のほどよろしく願います」

「ふざけんな！！理由も言わずにいきなり停止ってそんなのあるか！！」

墨江は電話を切った。すかさずかけ直す。

「いつもご利用いただきありがとうございます。こちらは第二十四地区市民相談窓口です。該当のIDは現在利用停止中です。お問合せには自動音声サービスをご利用ください」

流れてきたのはまたしても自動音声。IDを停止された瞬間、市民としての権利は失われたのだ。よって営利都市であるこの街が、市民でもない、イコール客でもない人間に対して時間を割くことはない。金で雇っている生身の人間が相手をするともないのだ。

墨江は愕然とする。IDがなければ銀行の金も下ろせない。電気もガスも水道も全部IDがなければ手に入らない。仕事も当然できない。

ID停止、それはこの街からの追放を意味する。

(畜生！！)

墨江はその場に倒れこむ。頭が真っ白になって、遠くの車の音、歩道を歩く人の声も、自転車のベルも何も聞こえなくなった。

「はあ？居なくなつた？」

上野木紗智子が神社に戻ると、一同事務所の前に集まっていた。沢野親子、宮司の永尾や細井。今この神社にいるすべての人間が、神妙な面持ちで一人の若者を取り囲んでいた。

話の中心にいたのは浅香である。

浅香の話によると、墨江紫音が銀行に行くと言つたきり帰つてこなくなつた。それを心配してあの少女も飛び出して行つてしまい、二人共行方不明になつたというのだ。

なんて愚かな。上野木は齒噛みした。そもそも、管理局に追われているこの状況で神社の敷地から出る事自体、危険なのだ。それを浅香も沢野も理解していなかった。沢野は患者の心理状態を最優先に考えたらしい、浅香も親切心で動いたのだろうが、それにしてもうかつ過ぎる。怒りをぶつけてやりたい衝動に駆られたが、そんなことをしている暇はない。あの少年はともかく、擬天使が管理局の手に落ちれば確実に悪いことが起こる。浅香が探しまわつて既に二時間が立ったというのだ、時刻は午後五時を過ぎていた。一刻を争う。

「とにかく手分けして探しましょう。宮司はここに残っていてください。どちらか先に戻ってきたら必ず留めて下さい」そう言い残して、車に飛び乗った。

(まさかもう管理局に捕まつた?)

上野木は焦る。車のスピーカーカーにつながれた携帯電話のボタンを操作して、博士少年を呼び出す。

「まだ見つからないの？」

「監視カメラに映らないということとは、案外近くに居るのかもしれませんが。一箇所にとどまっているとか」上野木は舌打ちした。ステ

アリングを切る。道は細い住宅街から大通りへ。少女はともかく、なぜ墨江紫音がいなくなっただのは全く予想外だった。厳密には関係者ではない彼を、管理局がどうこうして何か意味があるのだろうか。アクセルペダルを踏む、車が加速するも、踏切の遮断機が降りた。上野木は（かみのぎ）苛立つがどうしようもない。さすがに、ただの人探して難題も連なる車の列を貫いて踏切を強引に超えることはできないのだ。

「何やってるのよ！あのバカ！！」

列車が通り過ぎるのを待って、アクセルを思いっきり踏む。

（お願い、間に合って！）

墨江紫音は溜息をついた。あれからどのくらい時間が経ったのだろう。ずっと路地に座り込んでぼうつとしていた。

バカだな。叔父さんのところにいればこんなことにはならなかったのに。どうしてこんな無茶したのか。後悔をしたところで仕方なかった。もうあそこへは戻れない。いや戻りたくもない。

あそこでの生活は窮屈でしかなかった。親がいないのだ。呑気に学生やっている場合ではない。仕方なくアルバイトをして生活費を稼いでいた。けれども特別市の外では働くだけ損だった。稼いだ金はほとんど消える。ただ生活するためだけに働いて、働くためだけに生きている。そんな生きた心地のしない毎日。

何のために生きているのだろう。こんな生活いつまで続くのだろうか。一生こんな生活なら、生きているのが馬鹿らしい。何の期待も持てない絶望の毎日。

母が死んで二年、いい加減うんざりした。なにか抜け出す方法はないか。そう思ったとき、特別市が若年労働者を対象にID登録料の大幅な値下げを発表した。かろうじて払える額だった。叔父には反対された。ID登録料は年齢に比例して高くなる。自分たちの歳ではとうて払えない。だから羨んだのかもしれない。

だが、ネットで歳をごまかして入る方法を知った。ダメもとで試した。どうせ無理だろう。そう思っていたがあっさり通った。就職先も見つかった。あまり長続きするとは思えなかったが、とりあえずIDをさえ手に入れてしまえばいくらでもチャンスはある。そう安易に考えて、この街へ来ることを決心した。何か変わる。自分もなにかできるのではないか。そんな淡い期待を抱いて。

だがそれもたった四日で消え失せた。馬鹿馬鹿しい  
あまりにもバカバカしくて、悔しくて。どうにかなりそうだった。

何も考えたくなかった。少しでもなにか考えれば、嫌になる。絶望する。だから考えないようにしていた。けれども、頭の中には「ちやごちや」と余計な考えや言葉が次々に湧いて出て、容赦なく心をズタボロにする。

なぜだ。どうしてだ。どうして自分がこんな目に遭う。こんな悪いことが起きる。不公平だ。

墨江は頭を掻きむしる。涙が溢れ、顔も上げられない。どうしようもない感情がこみ上げ、全身を駆け巡る。発狂したいほど苦しかった。セカイがどうにかなって仕舞う。そんな風にさえ思えた。

「そう、それはとても悲しいことね」  
声が出た。

「でも安心して、あなたにはまだ選択肢があるわ」  
はっとして顔を上げる。情けなく濡れた顔を拭い、周囲を見渡す。誰もいない。

突如、周囲を薄暗い壁が取り囲む。周りの空間と切り離され、そこだけ独立した別世界のような感覚。

(なんだ……)  
覚えがある。この感じ。

「境界つてやつよ」

路地の向こうに、シルエットが見えた。女だ。背の高い、モデルのようなスタイルをした大人の女。歳はわからない。老けているようには見えないが若々しい感じはしない。筋の通った鼻、決して細くはないが釣り上がってキツイ印象を与える目付きを、より一層強調するよう目尻を赤く染めていて、毒リンゴのような真つ赤な唇をした、美人だが女の可愛らしさというものはまるで感じさせない、異様な女だった。

格好はスーツにタイトスカートを履いている。どこぞの女社長かと墨江は思った。

「誰だ」

女は腕を組んで近づいた。わざとらしくかかとを鳴らし、ゆっくり近づいてくる。

その後ろにもう一つ、いや二つ人影を確認した。一人は若い男。十代かくらいだろうか。髪は色素が抜けた白髪、唇にいくつもピアスをしていて、前髪が顔半分を覆っている。どこか陰気な雰囲気醸し出してる。そんな男だった。だがもう一人は、一人と表現すること自体相応しくない、化物だった。

「なっ、」

墨江は凍りつく。

「ハツ蜘蛛」

若い男が静かに口を開く。化物は墨江の退路を塞ぐよう、路地の入り口にたった。

身長は二メートル。腰を曲げているので本来より低く見えるのだがそれでも十分恐怖を与える大きさだ。髪は男と同じ色素の抜けた白髪をだらり伸ばしてる。

手も足も力が抜けてだら下がつているようダラリ垂らしている。全身をボロボロの布に見にまといっているはみ出した手からは明らかに人間とは違う灰色の肌が垣間見える。よく見ると、それは肌ではない、体毛だ。

化物は舌をベロリ出す。ドローと白い液体が糸を引いて垂れる。

墨江はぞつとして一步下がる。

「属性強化のために手を入れたのだけど、残念ながら思考力が落ちてしまったわ。だけど、同じ属性をも打つ上位互換品があればなんとかコントロールできる」

それを聞いて墨江は凍りついた。逃げようとした。けれども路地の出入口は塞がれている。殺される！墨江は前後左右キョロキョロ見渡して活路を見出そうとする。

「そんなに慌てなくても大丈夫よ。今日は、一言伝えに来ただけだから」

女は不敵な笑みを浮かべて言う。

「あの少女はこちらで保護させてもらったわ」

「なんだと？」

墨江は女を睨みつけた。それを見て女はくすりと笑った。

「あなたのIDを停止するよう指示を出したのはワタシ。大丈夫よ、IDは三日後にもとに戻るから」

それまで、と言って女は携帯電話を差し出す。

「三日間好きなだけ使っていいわ。高級ホテルのスイートルームに泊まるもよし、ほしい物を買って漁るもよし、高級レストランでディナーをたのしむのもよし」

墨江の手を握り、携帯を握らせる。墨江は何も言わない。どういうことだ。IDを停止して置いてなぜ。全く意図がわからなかった。

「なんなら、女の子一人、二人買ってよ」

それを聞いた瞬間、墨江は携帯を放り投げた。

「ふざけんな！」

「そう」

女は落ちた携帯を拾い上げる。

「受け取るしかないと思うわ。IDを停止されてこの街で生きて行けるはずもないもの」

女は墨江のポケットに携帯を入れた。そして踵を返すと、指をパ

チンと指を鳴らした。

すると、薄暗いガラスのような壁が消え、周囲は元の空間に戻された。

「IDを復活の条件は、なにもしないこと。ただ三日間、あの娘を忘れ、何もせず遊んでいればいい。それで解除されるわ」

墨江は女を追おうとした。けれども女の姿は何処にもなかった。

「楽でしょ」

声だけが脳に響く。

「クソ！」

墨江は渡された携帯を思いっきり壁に投げつけようとした。けれども投げられなかった。

どうすればいい。助けに行くべきか。だが足は動かなかった。

「IDを復活の条件は、なにもしないこと」

その言葉が脳裏に響く。何もしなければ、なにもしないで遊んでいれば、IDは復活する。ふざけた話だ。助けに行ければかっこいいだろう。だが無理だ。あんな化け物相手に何かできるはずもない。第一相手は管理局だ。IDを剥奪されればこの街で背景でいけない。管理局を敵に回して、暮らしていけるほど自分は強くないのだ。

情け無い。どうしようもない屑だ。自分でそう思った。けれども、あの子を忘れてほうっておけば、三日後にはIDは復活する。悪くないかもしれない。そう思い直した。

そうなのだ。どうせ何も出来ないのだ。できるはずもない。格好をつけて、幼稚なヒーローごっこをしたところで、どうせ何も出来やしない。無駄死にするだけだ。

だったらいいじゃないか。何もしなくても、何もやらなくても。

そうだ、どうせあの神社の連中が何とかしてくれる。そうだろう。そうに決まっている。自分が動かなくなつて。あの子は助けられるのだ。だからこれは裏切りではない。賢い選択なのだ。そうだ。そうに違いない。



「フフフッ」

墨江は笑った。涙と一緒に笑い声を上げた。

「ハハハハハハッ！」

渡された携帯を握りしめ、壊れたように、高らかな笑い声を上げた。そうだ。これは賢い選択なのだ。脳裏に響く自分の声。それを何度も繰り返した。

涙を拭う。そしてつぶやく。

「いいじゃないか。俺は……正しい」

少女はその一部始終を見ていた。墨江の居るところから死角になる場所で、局員に取り押さえられ身動のできない状態で、その光景を魅せつけられた。

少女は泣いた。辛かった。苦しかった。心が張り裂けそうになった。

裏切った。なんて言えない。もともと彼は関係ないのだ。巻き込んだ自分がいけなかったのだ。だからこれは裏切りではない。彼にとっては当たり前で、なんら咎められる理由はないのだ。

「いい、あなたがおとなしく言うことを聞いたら、彼に危害は加えないわ」

女は耳元でそういった。少女はうつむいた。もう逃げようとする気力さえ失った。

だらりと両足をぶら下げたまま、局員に連れられてゆく。

少女は瞳を閉じた。閉じた視界に紫の閃光が走る。気分が悪い。吐きそうだ。閃光が次第に増え、網模様を作ってゆく。パチリ、パチリと走るフラッシュが次第にその感覚を早めやがて意識を失った。

午後六時三十分。とある列車の、車内にその男はいた。見た目は

至って普通、会社帰りのサラリーマンにしか見えない。だが奇妙なものを両手に抱え膝の上に置いている。辞書ほどの分厚さ、横三十センチ、縦十五センチの奇妙な銀色のケースだ。

列車の中、椅子に腰をかけたまま、虚空を見上げる。視線の先、焦点はまるで合っていない。天井の明かりを見つめるわけでもなく、中吊り広告を見るわけでもなく、行き先を告げる液晶パネルの文字に向いているわけでもない。

同じ頃、違う列車の車内。主婦と思しき中年の女性が、また同じように両手に銀色のケースを抱え虚空を望む。そしてつぶやく。

「我等が神、教祖阿愍驛<sup>あみんた</sup>。我等が教理は世界の真理。世界の真理に未だ気づかぬ愚者を導き救い給え。そして真の自由を……」

同様、高校生位の少女が、また同様、初老の男性が、予備校帰りの受験生が、大学生が、子連れの母親が、駅の清掃員が。口々に唱える

「神により導かれ神に選ばれた我々の使命は、未だ目覚めぬ愚者を導く事。そのために神の力を持つ教祖阿愍驛<sup>あみんた</sup>に従い、行動する」

市内主要路線、地下鉄やバス。列車の車内や駅のホーム、待合室。バス停、タクシーの乗り場、ロビー、デパート、レストラン……

「我等は教祖の手となり、足となり、世界の真理を広め行く……」  
帰宅ラッシュに溢れた交通の要所、要所各地にが市内全域に広がって、そのいずれもが、

銀色のケースを膝の上に両手で抱え、定まらぬ視点で虚空を望んでいた。

その異様な光景に気づくものは居ない。帰宅を急ぐ人々は誰一人異常を察知することなくただ通りすぎてゆく。

「我等が煌々神明教<sup>しんめいきょう</sup>に栄えあれ、我等教祖に誉あれ」

彼等はずぶやく。不気味に、静かに。混雑した街はもみ消す。この異常事態、非日常を。

「教祖、準備が整いました」

妙舞がインカム越しに告げる。

「良い、起動準備をしろ」

唖れた声で言ったのはモニターの向こうに映る、白髪の長い髪、ヒゲを伸ばし放題にした教祖と呼ばれる男。

妙舞の隣には歯医者で使われるリクライニングシーに寝かされ少女がいた。手足はで固定されている。少女の頭には電極がいくつも取り付けられていた。その電極から伸びたコードは、少女の隣に置かれた液晶パネルいつ流れ、何やら数値が示されている。その背後には大きなモニターに向かう形で背を向けて座る、白衣を着た男たちが四人。それぞれがキーボードを叩きながら画面をチェックしていた。

「こちらも整いました」

白衣の男の一人が言った。

妙舞は少女の眠る椅子へ一歩近づいて、少女の額を覆った黒髪を左右に避け、指を口でくわえて唾を付けてから頬をなでた。

「さあ、ショータイムの始まりよ」

妙舞は低い声で言う。口元が不敵に歪む。

「始めましょう」

掛け声と共に白衣の男たちがせわしなくキーボードを叩き始めた。始まりです。白衣の男は告げる。

「きゃあああつー!!」

少女が苦痛の表情を浮かべる。息を切らし、手足を激しくばたつかせる。額から汗が滲み、桜色の唇がびくびく動き、少女は仰け反って激しく拒否を示す。

「出力が足りなわ。電圧を上げて」

妙舞は顔色ひとつ変えずにいった。

「しかし、これ以上は危険です」

構わないわ。妙舞<sup>みよづぶ</sup>はためらうことなく言う。モニタのグラフが大きく上下する。少女の悲鳴は更に増す。甲高い悲鳴が部屋中に響き渡る。そんな光景に、研究者の一人は丸椅子から腰を抜かして落ちた。

「チキンはいらないの」

直後、パン！と耳をつんざく音がなり、赤い血が散乱した。他の研究者たちはそんな光景に呆然としたが、る妙舞<sup>みよづぶ</sup>にパンパンと手をたたき、モニターから目を離すなど冷酷に告げた。

「きゃあああああああ！！」

少女の目尻濡れる。涙ではない。赤い血だ。モニタのグラフは更に勢いを増して上下する。そんな状況に目もくれず、妙舞<sup>みよづぶ</sup>は少女の隣に備え付けられた別の小さな画面を確認した。

「Now Loading... \* - - - - - / 3%」

上野木紗智子かみのぎは大通りから一つ筋の脇道を走っていた。携帯の電子音が鳴る。上野木は片手かみのぎで操作して電話に出る。

「大変！すぐ神社に戻って！！」

声は沢野百合亜だった。何やら切迫した声で言っていたので内容を聞かないで返事をした

「わかったすぐ戻るわ」電話を切って上野木はアクセルを踏み込んだ。

と、その時、何かただならぬ気配を察知した。

(何、このおぞましい感じ……)

全身に悪寒が走った。鳥肌が立つ。まるでセカイを覆い尽くすようなあまりにも莫大な冷たい気配。それはある意味、神社の神の気配すなわち、神気にも似ていた。だが、神気と違って新鮮な心地良さを感じさせない。どちらかというと負の感情を凝縮した苦痛や悲しみに似る、嫌な感じだ。しかもそれは今にでも壊れそうな脆さを秘めた、奇妙なバランスをなしているながら拡大を続け急速に広がってゆく。

(増幅してる？なぜ？)

上野木は神社かみのぎへ急ぐ、恐ろしいことが起こっているに違いない。

神社に残っていた永尾宮司じゅうご、沢野親子は神楽殿の連なったモニタ―前に集まっていた。浅香や細井、上野木はまだ戻ってこない。安龍、白鳥とはずっと連絡が取れない状態だった。

「これは僕の不覚です。完全にやられました。」

沢野少年は焦りながら言った。まさかこんな事態が起きると思っていなかったのだ。今までで味わったことのない同様と焦り覚え、それを隠しきれなかった。

「そんなことはどうでもいいのです。私たちにわかるように話して！」

母親の百合亜が少年博士の肩を揺らして叫んでいた。普段冷静な母もかなり焦っていた。

「どういこと！」

そこへ、遅れた上野木が息を切らしてやってきた。

「あなたも感じたでしょう？私のような、凡人ですら感じるほどです。これはなにかとてつもないことが起こっているとしたら考えられません」

宮司の永尾はずり落ちた髪の毛をかきあげることさえ忘れて言った。

沢野少年はキーボードを叩く。モニタに市内全域の地図が映しだされた。その中に光点がいくつも動いて、点と点を結ぶよう細い線が交錯しネットワークのような図を描いている。

「このように、ある種のネットワーク形成しております。中心となるのは」

別の画面にもう一つ同じ地図が出る。今度は一箇所が真っ白に反転した、地図だ。

「おそらくあの天使でしょう。ここから発せられた、莫大なエネルギーがこの点、おそらく信者でしょう。端末を介してちょうどインターネットのように市内全にネットワークを構築したのです。そしてそれぞれが霊気の発信源となっています。ちょうどウイルスの発信基地のような感じで周囲に拡散している状況です」

少年はずり落ちたメガネを指で押さえた。一同、沈黙。皆拳を握りしめ怒りを顕にする。

「まずいわ」

上野木が焦りの声を上げた。

「天使には神の意思を伝える力がある。つまり神気拡散の力。でもその代わりに教団から発せられた霊気を流し込まれたら教団の意思が伝えられてしまう。そうなれば教団霊を市民全員に強制憑依させ

ることになるわ。そんな事されたら、市内全域がああ教団に乗っ取られることになる」

墨江<sup>すみえしおん</sup>紫音は歩いていった。家に帰るにしてもここからは少し遠い。タクシーを使えば良いのだがまだあの携帯を使うべきかためらっていた。

とりあえずの目的として、神社を目指していた。あの子がさらわれたことだけでも伝えておこう。そう持ったのだ。

あのごスロリや白鳥なら何とかしてくれるだろう。上野木<sup>かみのぎ</sup>というブロードヘアーの巫女<sup>みこ</sup>も、少なくとも自分よりは役に立つ。彼らを頼るのが一番だ。そうするのが正しい。そう言い聞かせゆくり歩いてゆく。神社が近づく。ポケットに手をツッコミ携帯電話を握る。罪悪感がこみ上げる。捨ててしまえばどんなに楽か。けれどもできない。これをなくして自分は生活できないのだ。これは賢い選択だ。そう言い聞かせ自責の念を押し込んだ。

まず、プレハブの事務所へ向かった。しかし誰もいなかった。神社の敷地を、あてなく彷徨う。人影は見えない。誰もいない静まり返った境内に、風邪に揺れた木々の奏でる葉の音だけが響き渡る。

神楽殿に緊張が走る。上野木は背筋がゾクリとした。鳥肌がたつた。なんておぞましい。想像しただけで絶句する。まがい物の天使の霊気を市内全域に広めそれを媒介として、教団霊を配信する。そんな無茶苦茶な方法で一気に勢力を広げようとしているのだ。それはある意味、ひとつの霊界を作るに等しい。そんな恐ろしい事を平気でするのだ。煌々<sup>くわんくわん</sup>神明教<sup>しんめいけう</sup>がまともな宗教であるはずがない。そんな宗教の教団霊が一気に拡大してしまえば、とんでもないことになる。

世の中は一気に邪気まみれだ。それこそ、この白鳥大社の神気をもかき消してしまうぐらいの莫大な邪気に満たされてしまうのだ。

言ってみれば、街全体を溝水で溢れさせ、綺麗な真水をすべて汚してしまう。そんなものだ。

当然、人々の心理状態もおかしくなる。悪いものが付けば、悪い霊気が御霊に流れるのだ。そうなれば、人々はみな悪霊のゾンビと化してしまう。何とかして阻止しなければ。上野木は考える。ただの悪霊の憑依であればお祓いや清めで対処できる。けれどもこんな異常事態、どう対処すればいいかわからない。

上野木は爪を噛んだ。どうしてこんな時に白鳥朱雀は居ないのか。いつも勝手に出ていっていつの間にか帰ってくる彼。出ていくときは決まって音信不通。連絡がとれなくなるのだ。どこで、何をやっている。早く戻ってきて。上野木は心の底から願った。

「対処方法ならあります」

沢野少年がおもむろに口を開いた。上野木ははっとする。

「どのようにすれば良いのでしょうか」

宮司が答えを急かす。いつでも儀式を始められるよう大幣を構えながら言った。

「彼らはオカルトの理論だけは動いていません。オカルトの理論だけでやられたのであれば僕は手出しできませんが、科学の理論を使っている以上付け入る隙はまだあります」

「こちらからハッキングをかけるのです。そして、天使の核を潰します」

「……」  
宮司も沢野も上野木も黙った。少年の意図することがわからなかったのだ。

「天使の御霊を変質させればいいんです。今ちょうど、ネットワークで教団信者とつながっています。ですから、それを逆流させてしまえば、天使の御霊に違う霊気が流れ込み変質する。そうではありませんか」

なるほど。その手があったか。もともとオカルト科学は霊体観測



と霊気操縦の研究を目的としていたのだ。要はその霊気操縦の応用して、天使から信者へながれる霊気を逆に死んじゃから天使に逆流させてしまえば良いのだ。そうすれば天使の御霊は消えてなく鳴る。上野木は即座に理解した。しかし問題がある。

「ちよつと待つて！そんなことしたらあの子はどうなるの？」

沢野百合亜が詰め寄った。どうやら沢野はそのことに気づいたらしい。

「生霊に憑依されたのと同じ状態になるわ。いいえ、あの子の場合既に御霊が変質している。そこへ更なる変質を加えれば、おそらく崩壊する……」

「確実に、廃人です」 沢野少年は残酷に告げた。そんな。彼の母親は愕然とした。宮司も表情を曇らせた。そんな様子をみて上野木は拳を震えるほど握り締める。そして言った

「やりましょう。それしかないわ」

これが神の道に生きる人間として正しい判断だとは到底思えない。けれども他に策がない。

沢野少年は頷いた。そして背を向けモニタの前に腰をおろした

「待つて！そんな方法ダメよ！」

沢野百合亜は取り乱した。上野木はそんな沢野を羽交い絞めする

「これしかないの！これ以外の方法は無いのよ！」

「でもあの子が犠牲になるなんておかしいわ！」

けれども少年はそんな母親の言葉を無視して淡々ときボードを叩いた。

「秀和基！聞いているの秀和基！！」

悲鳴のように叫ぶ母親を無視して少年は淡々とキーボードを叩き続ける。カタカタとタイプをする音が神楽で無常に響き渡った。

なんだと。あの子が犠牲になる？墨江が神楽殿にたどり着いたとき、そんなやり取りがなされていた。取り乱して暴れる沢野百合亜を上野木が怒鳴り声を上げて抑えつけていた。

「仕方が無いでしょう!!」

「だからって人の命を犠牲にしていってわけ!!」

「放っておけば多くの人が犠牲になるわ!処理を謝れば世界を滅ぼしかねないのよ!!」

そんなバカな。そんなはずない。そんなことがあっていいわけないだろう。だってそうじゃないか。それなのにどうしてこんなことになっているのだ。墨江は絶句する。なにか言葉を探す。そうだ白鳥だ。白鳥は言ったのだ。彼女の安全は保証すると。

「白鳥は!!どうした!!」

墨江は叫んだ。上野木も沢野も反応しなかった。少年はずっとキーボードを叩いていた。

宮司くさくがゆっくり立ち上がった。近づいてこようとはしない。

「白鳥様はここにはおられません」

一言だけそう告げた。どうしてだ。なぜここにいない。

「白鳥は何処に行った!」

墨江はもう一度問う。けれども、宮司は首を横に振るだけで何も答えなかった。

そんなバカな。そんなのってあるか。墨江は飛び出した。神楽殿を飛び出して外へ出ていった。

キーボードが鳴り止んだ。そして沢野秀和基は静かに言う。

「母上。これで終わりです」

沢野少年はエンターキーを押した。画面が切り替わる。プロゲラムは実行された。

終わった。これで全てが終わった。十二年の人生。初の敗北だった。人生最大の汚点。科学者を志した自分として、最悪の結末だった。

沢野少年は思う。オカルト科学は神を想定している。ならば神は必ず存在する。そして神はおそらく自分に天罰を下すだろうと。



高速道路料金所監視員の男は中年のでっぱりとした腹をさすりながら、退屈そうにテレビのニュースを眺めていた。カルト教団がテロを起こそうとしているらしい。そのため現在特別市全域に戒厳令が敷かれている。この料金所の少し手前には検問所も設置されているという。なんとも物騒なことだと男は思った。これだからカルトはいけないんだ。だから特別市は宗教やオカルトを禁止しているというのに、それでもそういうものにのめり込む輩は減らない。全く呆れたものだ。

特別市の料金所はすべて自動化されている。しかしたまに起きる機会トラブルや、不正通行防止の目的のため、主要な料金所には一人監視員を置くことになっている。退屈な仕事だ。給料もさして良くない。それでも座っているだけで金がもらえるのだから文句は言えない。それに一応管理局職員という扱いである。ただここで時間をつぶすだけで管理局の待遇なのだから悪い話ではないだろう。

チリンチリンッ！

なにか音がした。男は窓の外を確認する。

「これって単車やんな。六百円でええやんな」

男はぎよっとした。さっきの音は車のクラクションではなかった。自転車のベルだった。

そして目の前にいるのが、真っ赤な「ぼるしえ」と、平仮名で書かれた自転車だった。

「おい何ふざけてやがんだお前」

男は後頭部を書きながら、怪訝な視線を自転車に向けた。白いスーツの男が乗っている。

「だって、これ乗用車ちゃうで？ほな六百円やろ？」

「なんのいたずらか知らんが、そんなもので高速走っていいわけな

いだろ。道路交通法を知らんのか！」

「ごめん急いでるねん」

そう言うと勝手にマネーカードが投げ込まれた。あとで機械に通せばわかるだろうが、ご丁寧に六百円分だけチャージされたカードである。

「おいッ！」

直後、爆風が襲う。一体何が。男は慌てて道の先を確認するが、すでに自転車はなかった。

沢野秀和基は作業を続ける。だが何度試してもダメだった。そんなはずはない。プロセスに間違いはないはずだ。この分野で誰かに負けるなどありえない。理論上、そんなことはありえない。頭を振る回転させ、思い浮かんだ方法を片っ端から試した。だが、モニターのエラーコードが消えることはなかった。

「なぜだ！」

沢野少年はキーボードを思いっきり叩きつけた。

「もうやめて！秀和基！」

沢野百合亜が悲痛な声で叫んだ。

と、その時だった。突如けたたましい警報が鳴り響いた。神楽殿が真っ赤に染まる。そしてモニターが強制的に切り替わった。写っていたのは、神社周辺の映像。周囲を取り囲むよう、管理局の白いワゴン車が何台もズラリ並んで、通常の職員とは明らかに違う物騒な黒い警備服を着た男達が銃を構えながら降りてきた。彼らは機動隊である。警察機構も機動隊を持っているが、特別市では管理局が最高の治安機構となっているため、機動隊や一部軍隊のような組織が存在する。

「どうして管理局が……」

宮司は困惑して言った。

「機動班を送り込んできたってことですから、実力行使をしにきた

のでしょう」

「そんな。私達が一体何をしたってどういうの？」

上野木、沢野百合亜が口々に思いを発したところで沢野少年は「僕のハッキングが失敗したからここが突き止められたのでしょう」と、小さな声で言った。

「いいえ違うわ。ここは最初から明らかになっているわ。たぶん……」

上野木は廊下の方へ一歩。

「おまちなさい。ここは宮司である私が行きましょう」

「宮司、あなたはこの神社の宮司です。ですからここを最後まで守っていただかなくては困ります。私でも時間稼ぎぐらいはできます。ですからその間に白鳥に何とか連絡を試みてください。いざとなれば龍神の力で戦いますから」 そう言って上野木は大鳥居へ急いだ。

墨江紫音は神社の敷地を走りまわった。鳥居の方で起きた騒ぎには全く気づかなかった。

次第に足が重くなる。かろうじて一歩、一歩と歩き続けたが、ただ宛もなく彷徨っている。自分は何をすべきなのか。何がしたいのか、自分自身でもわからなくなった。

上野木は大鳥居へと向かった。武器は持っていない。もともと神社にそんなものは存在しない。霊力を使えば一応武器にはなるだろうが、相手が管理局である以上お被い用の大幣など神道で使う道具はまずい。白鳥のモデルガンは役に立たない。墨江のような素人なら騙せても、プロには通用しない。気休めにもならないがとりあえずバケツに神水を入れ、柄杓をひとつ持って端の階段を登った。

走りながら携帯を操作する。電話の相手は安龍美弥毘だ。だが何度コールを鳴らしても出なかった。昨日からずっとそうだ。あの悪

魔め。肝心なときに役に立たない。やはりあんなものこの神社においておくこと自体間違いだ。

画面に市の地区情報が表示された。警告というアラート文字が出ている。カルト教団のテロというトピックスが目に入った。おそらくこの神社をさしているのである。上野木は心底腹がたつた。どつちがカルト教団だ。テロ行為を行っているのはそつちではないか。太鼓橋の中央にさしかかったところで、鳥居の外にいる男達の視線が一斉に集中した。上野木はひるまない。急いで階段を下り端を渡り終えたところで言う。

「どついつつもりですか。ここは私有地ですよ。用もなく勝手に入ることは許しません」

「白鳥大社。貴様らカルト教団に破防法が適応された。直ちに解散を命ずる」

四十代くらいの武装した大男が低く汚らしい声で言った。おそらく隊長だろう。

それを聞いて上野木は怒る。男は一步鳥居へ近づぐ。

「生憎ですがこの神社には信者なんていません。ただ建物を保護しているに過ぎません！」

「それはどうか。実際はカルト教団として活動しており、テロ行為の準備を行っている」

「証拠でもあるのですか！」

「あるさ。先ほどここから市のサーバーにハッキングしたのを確認している。それだけで十分解散に値する」

沢野秀和基がそんなへまをするはずはない。おそらくあの天使をかくまっていたことから、必ず邪魔をしてくと踏んでの罠なのだろう。だが上野木に言い返す言葉は思いつかない。

とにかく時間だ。時間を稼ごう。上野木は一步、一步と大鳥居の方へ近づぐ。

「出て行ってください！」

柄杓の水を飛ばした。局員達には届かない。かりに届いたところ

で普通の人間には何の効果もない。これで汚れた心を洗い流し、改心させることが出来れば苦勞しないのだ。だがそんな都合の良いものはない。

武装した機動班隊員達は銃を構え、隊長の合図を待っている

「邪魔をすると命の保証はないおとなしく手を上げて、膝を付け」

隊長の男は銃口を向けた。鳥居の中に一歩足を入れる。そして手を上げ突入の合図をした。

鳥居の真ん中に立つ隊長の左右を次々と蟻の行列のように黒い武裝を着た男達が銃を構え迫ってくる。まずい。このままでは十分、いや五分という間に神社は占拠される。

「おいおい！鳥居をくぐるときは一礼くらいせんか」

声が出た。まるで天から届くような声だった。

「つたく、最近の産子はそんな礼儀も知らんのか」

隊員達は足を止めてキョロキョロとあたりを見渡す。

「何をしているさつさとゆけ！」

隊長が怒鳴る。だが次の瞬間。石造りの大鳥居がいきなり倒れかかってきた。隊員達はざわめきながら倒れてくる鳥居を避ける。上野木は一歩後ろへ下がって何とか回避した。

「ひるむな！ただの虚仮威しだ！」

隊員達は銃を構え、見えぬ敵に向かって発砲した。耳をつんざく轟音が夜の神社に響いた。上野木は転がって避けた。

風が吹き荒れた。かすかに目をけると、そこには無数の鳥がバタバタと羽をばたつかせてば隊員達に襲いかかっていた。しかも銃弾は一つ足りとも当たらない。上野木はもちろん神社の建物、橋、石畳、生い茂る木々、どれ一つ無傷だった。まるで神業だ。隊員達は慌てふためきながら襲いかかる鳥を払いのける。上野木は立ち上がって目を凝らす。さつきまで物騒な黒い服の男達が居た場所は無数の鳥、鳩が壁を作って行く手を阻んでいる。パン、パンと乱射する銃声は鳴り止まない。だが鳥のカーテンは消えなかった。



鳩が街灯の光に当たる。真っ白だ。白鳥大社の遣いの鳥。まさか。上野木は鳥肌がたった。

上野木は思い出す。『神がこの地に降り立つとき、真っ白な鳥が無数に群れをなして降り立ち、神の降臨を人に知らしめた。白鳥大社の由来は底から来る』という社史の一節。

と、その時、鳥たちが飛び立っていった。まるでジグソーパズルを剥がすよう、視界の向うが徐々に明らかになる。

その間から一つの人影が。背中に一つが自身の身長ほどの長さを持つ大きな羽を背負った男だった。ほんの数秒だった。その神々しさに思わず見入ってしまった。この世のものとは思えない美しさ。いや、この世の物ではないのだ。なぜならそれは紛れもなく、正真正銘の本当の「神」なのだ。

男はゆっくり振り向いた。そして落ち着いた声で言う

「スーザン参上！」

なぜか、体全身でカタカナの「ネ」のポーズをしていた。よくみると背中の中の羽はただのハリボテだった。

いつもとは違い全身を白いスーツで着飾って。珍しくちゃんとネクタイをしているが、それは紛れもなくスーザンこと白鳥朱雀だった。

「へっ……」

それを聞いて、上野木は今感じたことを思ったことをすべて取り消したくなった。

上野木は眉間に手を当てた。

「何だ貴様！フザケタ格好しやがって！」

隊長の男が怒鳴る。隊員達が一切に銃を向けた。

「俺はこの神社の神や。神を怒らせれば祟があるぞ。悪いことは言わん。さっさと帰れ」

「ぶざけやがって！」

隊長の男は白鳥の足元に向け発砲。だが白鳥は全く怯まない。パーターの余興かチープな学生映画のような天使の羽をわざとらしくばたつかせながら隊員達の元へ近づいてゆく。

「そ、それ以上動けば打つぞ」

「打ってみやがれ。たかだか人間の分際でこの世に降り立った最狂<sup>マッド</sup>神白鳥朱雀が殺せると思うのか。俺はそこいらの土地神とは次元が違<sup>ツト</sup>うぞ」

白鳥はモデルガンを構えた。男達は失笑する。どう見てもおもちゃなのだ。だが白鳥はあゆみを止めない。

はたから見ればただの中二病をこじらしたバカな大人としか思えないだろう。冗談を言っているにしても寒すぎる。だが彼は真正正銘の神だ。そのことを認識している人間は上野木と沢野秀和基だけだ。もつとも沢野秀和基は人とは違う何かという程度の認識でしか無い。真正正銘の神であることを正確に認識しているのは上野木だけだ。

隊員たちは一切に発砲した。白鳥はわざとらしくモデルガンを打つふりをしては「バン、バン」と擬音を叫ぶ。

轟音が耳をつんざく。一切に鳴り響いた。だが、隊員達は驚愕する。自分たちの銃だけ砕け散っているのだ。

「物理原則をねじ曲げるのは神様でも基本的にご法度なんやけどな。神域を汚されるのはあまり気分のいいもんやない。神に仕え真面目に祈っている者に失礼やろ」

隊長の男は一步下がる。慌てて別の銃を構えようとするが、白鳥のほうがかかった。

「バンッ！」

白鳥が声を発する。それと同時に男は後ろにはじき飛ばされた。「すまんが参拝客以外はお帰り願いたい」

白鳥が背中の似非翼を羽ばたかせた。風が吹く。さっきとは比べものにならないほどの暴風が、目も開けていられないほどの凄まじい風が吹き荒れた。

「ヒイイーツ」

隊員達は散り散りに逃げてゆく。隊長の男だけが最期まで残っていたが、白鳥がつま先立ちをしてわざとらしく両うでをだらりぶら下げ飛び立つような格好をしたのを見て、

「ば、化物ツ！」と叫んで慌て逃げた。

隊員達はワゴン車に飛び乗った。しかしワゴン車は動かない。タイヤがパンクしているのだ。車から転がり落ちた男は道の向こうへ消えていった。

神社は再び静かになった。上野木は白鳥の元へ駆け寄り少し涙声で言った。

「今まで何処に行っていたのですか」

「あれ？言わなかったっけ？フラグたてに言ってくるって」

「説明になっていません！あと一歩遅ければ神の留守中に神社はなくなっていたのかもしれないですよ！少しはわきまえてください！」

「シスター。お前はアホか」

白鳥は上野木の額を人差し指で弾いた。

「この神社の祭神はいつからこの体だけになったんや。神社何のなめにある？」

上野木ははつとした。そうだった。この神社には彼がいようと居まいと神の力が働いているのだ。白鳥朱雀。彼には確かに神霊が宿っている。だがそれはほんの一部にすぎないのだ。

ブーンという機械音だけが鳴り響いていた。音のする方へ視線を合わせると、そこには大型の、撮影用送風機が幾つか、木の影に隠れる形出設置されていた。

上野木は少々呆れた。ため息を付いて白鳥にやや冷ややかな視線を送った。

「よくもまああんなインチキを思いつきますね」

「ゆったやろ。神様であつても物理原則をねじ曲げることとは言語道

断馬耳東風四捨五入なんやって」

「途中から意味がわかりません」

「それにしても痛てえわぁ。豆つできたで」

白鳥は親指をしきりに確かめた。もう片方の手には五寸釘を持っていた。

「まさか、パンクさせたのも……」

「鳥居の弁償代や。あの車一台いくらで売れるやろ」

ニヤリ笑う白鳥に上野木は呆れた。しかしほっとした。危機敵状況が過ぎ去ったわけではないが、彼が居るだけで安心できるからだ。

神社の敷地をぐるり一周した。墨江は再び朱塗りの門の前にたどり着いた。雨が降ってきた。ポツリ、ポツリと頬に当たる。雨は次第に強くなる。墨江は門の下にうずくまった。

「糞つたれ！」

墨江はつぶやく。現実なんていつもこうだ。悪いことしか無い。

「あ、くそツ！あのクソ鳩め！俺の一張羅にクソつけやがった！」

「ちよつと、少しは場の空気を読んで下さいよ」

声がして墨江は顔を上げた。白鳥朱雀と上野木紗智子だった。墨江は立ち上がる。

上野木と目があった。白鳥はジャケットの裾を持ち上げて鳩の糞をティッシュペーパーで吹いていた。おかしい翼の飾りをしているが墨江の目には入らなかった。

上野木は鳥居の前で一礼する。白鳥は「ああ、糞！こんど見つけたら焼き鳥にしてやるからな！」なんて独り言をいいながら墨江の隣を通り過ぎてゆく。大きな羽がぶつかりそうになり、墨江は身を屈めて避けた。

上野木は少し困惑の表情を浮かべていた。

「あの……、ちよつと……」

墨江は白鳥を呼び止めた。白鳥は足を止めるが振り向かない。

「あの天使は俺たちには助けられん。既に人ではない」

「ちよつとまってよ！話が違う！」

「それはこつちのセリフや。俺は言ったはずや『最後まで責任持てるか。途中で投げださんか』ってな」

「僕には……何も出来ない。どうせ何も出来ないんだ」

「だからって途中で投げ出していいか」

「うるさい！」

墨江は白鳥に掴みかかった。白鳥は顔色ひとつ変えない。墨江の体に触れた羽がバタバタと揺れる。

「ちよつと！」

上野木が止めに入ろうとしたが白鳥が静止する。

「俺には何の力もないんだよ！何も出来やしなんだよ！あんな化け物相手に何かできるわけ無いだろ！！」

白鳥の表情がわずかに曇る。だが白鳥は何も言わない。サンングラス腰に鋭い視線が墨江の顔を捉えて逃さない。

「あんたらは違うだろ！力があるんだろ！だったら助けるよ！見殺しにするなよ！あの子を何とかしろよ！！」

白鳥は墨江を払いのけた。そして一発顔面を思いつきり殴った。

「白鳥！」上野木が甲高い声で叫ぶ。白鳥は表情を変えない。

「力の有無関係ない。俺達にできることはない。俺達じゃあの子は助けられん」

「貴様！！」

墨江は殴りかかる。だが白鳥は軽くあしらう。渾身の一発は届かない。虚空を打つだけで、よろけ地面に倒れる。それでも墨江は起き上がる。起き上がったては殴りかかる。だが白鳥には届かない。

「さつさと帰れ。お前の日常にもどれ」

白鳥は冷酷に告げてまた歩き出す。上野木も黙って通り過ぎてゆく。墨江は置き去りにされる。

「クツソオおおおッ！」

墨江は走りだす。玉砂利を蹴り、やけくそにかけ出した。そして拝殿でぐずれた。

「なんでだ！どうしてこんなことになるんだ！」

本坪鈴のロープを思いつき揺らした。ガラガラと鈴の音が鳴り響く。やり場のない怒りを思いつきりぶつけた。

「ここには神様がいるんだろ！神がいるんだろ！だったら聞けよ！なんでこんなことが起きる！なんで誰も助けない！！どうしてだ！答える！バカヤロウ！！」

これでもか、というぐらいおもいつき揺らした。ロープが切れて鈴が落ちてくるのではないかというぐらい。だが何も起きなかった。

涙があふれる。視界がにじむ。雨なのか、涙なのかわからない。

あの子は死ぬ。自分は何も出来ない。無力感にさいなまれる。墨江の全身にとつもない絶望感が襲ってくる。

「そんなことではなにか起きると思ってるのか。そんな都合よく奇跡が起こるんやったら。この世に絶望なんて言葉は存在せん！」

白鳥が叫ぶ。墨江は聞き入れない。涙は止めどなく流れる。

「神なんておるわけない！そんなもん人間の妄想や！いい加減気づけ！！盲信するな！！」

白鳥はそれだけ吐き捨て、神楽殿へ消えていった。

墨江は立ち上がる。墨江は肩を落としてゆっくり歩き出す。帰ろう。

(ここにいたところで意味はない。どうせ俺は何も出来やしない……)

上野木、白鳥は神楽殿へと続く廊下を歩いてた。

「神であるあなたが神の存在を否定するなんて……」

「んがッ」

白鳥の羽が鴨居に引っかかった。

「さっきのシリウスが台無しですよ」

「あれ、さっきのはてっきりギャグシーンやと思ってたけどな」

よく見ると、リュックのようにでかいハリボテの羽はいくつもセロハンテープで止めただけのチープなものだった。上野木は呆れたため息をつく。

「お伊勢名物、天使の羽です」

「神主様!!!」

宮司が気づいた。浅香と細井もいた。浅香は足元を怪我している。騒動が起こって裏方の塀を飛び越えて神社に戻ってきたらしい。その時に樹の枝で引っ掻いてしまったのだ。沢野が手当をした。沢野少年はキーボードを叩いたままだった。

「神主様やない。エンジェルスーザンや!」

「.....」

場の空気を見殺したおちゃらけモードに一同沈黙。だが少しだけ神楽殿の雰囲気や和らいだ。上野木は少し微笑んだ。

「博士。無理やぞ」

白鳥の声で沢野少年の手が止まる。

「そもそも前提から間違ってる。人間と天使では霊気の質が違いすぎるんや。蟻で地球を動かすようなもんやぞ」

「そうでしたか。僕はやはり冷静さを失っていたようですね」

沢野少年は即時に理解した。

「こいつの霊気を帳消しにするにはそれこそ神クラスの霊力が必要や」

「けど、神であるあなたには行動に制約があるはずよ」

上野木は白鳥だけに聞こえるよう小さく言う

「日本神界最高神、天照大御神に許可をもらってきた。神が人間の

事情に干渉するのは基本的にご法度や。けど、今回はちつとばかり厄介や。神に限りなく近い力を有していながら、神界に属さんイレギュラーが相手やからな」

白鳥は上野木にだけ聞こえるよう、ボソリつぶやいた。

「博士、協力してもらえるか。Y-NET本社に直接乗り込みや」

沢野少年は徐に立ち上がり、振り向いた。ずり落ちたメガネを人差し指で直し、

「分かりました」と一言だけいって、ノートパソコンの蓋を閉じた。

「母上、行つて参ります」

「だ、大丈夫なの」

「ご心配なく。こんどこそ必ず止めて見せます」

沢野初年がいつもの冷静さを取り戻した。それを見て安心したのか、沢野百合亜は微笑んで。彼の頭を撫でた。

「気をつけて」

「それで、シスター。一つ問題がある」

「ええ、わかってるわ」

さつきから別の気配を感じていた。浜辺の方だ。雨の日のようなじめつとした嫌な感じ。地獄の底から湧いて出てきたようなゾクリとするおぞましい感じ。天使ほどの莫大さはないが、こちらも厄介な感じだ。紛れもなく低級霊だ。時期にこの神社に攻めてくるだろう。

「俺はここを空ける。シスター一人じゃ荷が重いかもしれん。だから勝とうとするな。時間を稼ぐだけでいい。それから、あれを使うのは最悪でも一回やぞ。それ以上やったら死ぬ」

「はい」

上野木は静かに答えた。白鳥は上野木の方に手を置く。

「大丈夫や。白鳥大神はいつでもお前の味方やぞ」

手が熱い。全身にとてつもないエネルギーを感じた。白鳥の神が本当に動いている。自分に凄まじい神気を送り込んでいる。それが



わかった。上野木は感動した。

「私たちにもなにかお手伝いできることは……」

宮司が白鳥に尋ねる。白鳥は一呼吸置いて言う

「何言うてんねん。宮司こそ要やる。この神社の主なんやから、きつちり神に祈りを下げ神の力が存分に働くよう、しつかり祈ってもらわな困るんやで。浅香つちも細井つちも宮司をサポったてや!」  
「はい!」

浅香も細井も元気よく答える。宮司はにこり微笑んだ。

「では、これより我が白鳥大神に最高の祈りを捧げる為、心のそこから祈りを捧げましょう。私は浄衣に着替えてきますから、浅香くん、細井くん、準備をお願いしますよ!」

宮司の声と共に、一同意気込む。

「いざ出陣!」

白鳥の掛け声と共に、皆散り散りに消えてゆく。それぞれの目的、役目に向かい、全力を尽し、戦いに挑む。白鳥大社のため、セカイのため、そして自分のため。

そうして事件は解決した。白鳥大社の面々がY・NET、教団の陰謀を阻止した。街に再び平穏が訪れる。どのように、どう解決したのか、墨江は知らない。あ

あの少女は死んだ。誰も彼女のことを覚えていない。墨江の記憶からも次第に消えてゆく。名前も知らないあの少女はまるではじめから存在しなかったように消えてゆく。

再就職も無事に済ませた。なにもない日常へと戻ってゆく。そうして人生を歩んでゆく。

朝起きて、身支度を整えて、仕事場にゆく。仕事のあとは同僚や上司と他愛のない世間話や仕事の話を交わしながら居酒屋でいっぱい。ありきたりで、退屈だけど、そんな日常に少し充実感を見出して、毎日それなりに楽しく過ごしていった。

- そんな結末を妄想した -

タクシーのなか。墨江紫音はうつむいて考え事をしていた。雨が車の屋根を打つ。ワイパーが高速に揺れ、雨を弾いてゆく。冷房が濡れたシャツを冷やし肌寒さを感じさせる。シャワーを浴びないと風邪をひくな。そうだと夕飯はどうしよう。というか明日から何をすればいいのか。そんなことに考えを巡らせる。

(明日から……か)

現実が急速にリアリティを失う。まるでこの世が嘘の世界のよう、ふわふわ浮いた不安定さを感じさせた。

明日からのことを考えよう。とりあえず就職しなければ。IDは三日後に復活するといった。その言葉を信じて良いのかわからないが、いずれにせよ収入がなければ暮らしてはいけない。三日間はいくら使ってもいいらしい。ならいつそ家でも買ってしまおうかと思っただが、渡されたのはおそらくゲストIDだろう。自分のIDでなければ不動産や車など財産になるものは買えない。

(なんだ。結局無駄遣いしかできないじゃないか)

大して落胆はしなかった。正直コレを使うのはあまり気が進まない。金の使い方などわからない。ほしい物なんて特に無い。旨いものを食ってもいまはおいしいとは思はないだろう。なら一体何に使えっというのだ。

(なんなんだろう俺の人生)

何のためにこの街に来たのだろう。何かを変えたかった。運命を変えたかった。だから、この街にやってきた。なにか変わるかもしれない。変えなきゃいけない。

『それで、お前は何がしたい』

声が出た。誰だ。運転手か。墨江は顔を上げる。運転手は淡々と車を走らせるだけだった。

(なんだよ)

あの女に渡された携帯を握る。これがなきゃ生きていけない。こんなものにすぎりつことしか活路を見い出せない自分が情けなかった。

(俺の価値なんて所詮こんなものだ)

車が大通りから住宅街へさしかかった。車体が傾いて、体が傾く。雨の窓に視界が切り替わる。信号やネオンの光を反射した雨粒が流れてゆく。

『いつからお前の価値はその程度になりさがつた』

「はっ？」

まただ。脳に直接届くような声だった。

『そうまでIDにしがみついてなにがしたい？』

「うるさい」

墨江は小さくつぶやいた。

『IDがすべてか。この街で生きてゆくことが全てか』

「だまれって言うてんだろ！」

頭を掻きむしる。耳を塞ぐが声はとまらない。

『この街に来た理由は何や。極普通のありふれた平凡な人生が目的なんか。それが全てなんか』

「黙れ！！」

車がキューブレーキをかける。運転手がびっくりしたのだ。体が前のめりになって、座席が顔を打つ。

脳裏に浮かんだのは、あの少女の笑顔だった。

「ありがとうございます」と天使の笑顔で言ったあの子。

「お腹すきました」屋上で涙を拭いて言ったあの子。

「わかりません」と悲しそうに、切なそうに言ったあの子。

「じゃあ、つけてください」名前すらないあの子。

少女と過ごした僅かな時間の記憶が走馬灯のように走る。

『助けて！』

銀色の髪をしたあの少女の悲痛なかおが飛び込んできた。それと同時に、彼女の痛みが心に直接伝わった。セカイ住の悲しみすべてを集めたような途方も無い絶望。そんな冷たく悲しい感覚が全身で感じる。墨江ははっとする。目から涙が溢れ出した。

「なに？どうしたの？」運転手が動揺して言った。

（お前はそんなにも……）

少女の映像が離れない。ポケットに手を突っ込む。コインの感触が指に伝わる。取り出して指で弾いた。

「ふふふフツ」墨江は不気味に笑った。だが拳は固く握っていた。そして静かに告げた。

「運転手さん。行き先を変えてください」

「Now Loading・・・  
\*\*\*\*\*  
- - - - -  
- - - - - / 65%」

「ほな博士はここな」

「ちよつと待つてくたさい……」

沢野秀和基は困惑した。白鳥朱雀が持ってきたのは真つ赤な「ぼるしえ」と平仮名で書かれた自転車だった。白鳥は荷台に備え付けた子供用の椅子を叩いて博士少年に座るよう促す。門の前で見送る一同、目が点になる。

「あ、あの……私が送つてゆきましようか」

沢野百合亜の表情はひきつっていた。しかし、白鳥はそんなことを構い無しに言う。

「これで行つたほうが速いし、それに検問突破するの結構ハードアクションやで」

「し、しかしそれは子供用の……」

「何言つてんねん。博士は子どもやろ」

それを聞いて沢野少年は頭を掻いた。

（確かに僕は子供ですがしかし、それはもっと小さな子が……）とつぶやくが、白鳥は気づかない。急かす白鳥に諦めて、仕方なく飛び乗った。

「ほな行くで！」

白鳥が自転車にまたがる。と、同時に、爆音を上げて発進。竜巻のような豪風を上げ、あつという間に消えてしまった。

「だ、大丈夫かしら……」

沢野百合亜は心底息子を心配した。

墨江紫音すみえしおんを乗せたタクシーは高速道路を走る。

（誰も助けに行かないなんて、嘘だ。俺だけでも行つてやる！）

「タス……ケテ……」

弱い声、かすかな声、最後の力を振り絞つて出した助けを求める

声。そんな声が頭殻はなれない。行つて何ができるのかはわからない。けれどももう放つておけなかった。

やけくそだ。幼稚なヒーロごっこだ。名前さえ持たない、誰からも忘れられた少女をたつた一人、命がけで助けに行く。そんな妄想をする。そしてそれを実行しようとしている。

墨江は一人酔う。車の後部座席で不気味に笑う。もはや現実と妄想の区別がついてない。

妄想が、行動を狂わせる。すべてを棒に振る。墨江行動は誰にも褒められない。全く勝手に無謀で愚かな行動だ。それでも、このままのこのこ帰つて日常に戻るなんて出来ない。(あの子を忘れて元の暮らしにもどれ？ふざけるな。そんなことできるか。そんな奴はウンコ以下だ)

途中検問に、出くわした。けれどもあの携帯のIDで全て簡単に突破できた。理由は知らない。畏かもしれない。けれども構わなかった。俺がアイツを助ける。そして連れて帰る。その後のことは知らない。今は考えたくない。そんな思いで動いていた。

・ピポピーッ

電子音がなつた。液晶パネルに表示されたのが赤字の”ERROR”という文字である。

「なに？それだめじゃん」

あんりゆうみやび  
安龍美弥毘はあきれた声で言った。

「心配ないさ、この程度何の障害にもならん」

そう言つて七堂は電子ロックのスリットにパソコンにつながるようコードいくつも繋がったカードに通した。キーボードを叩いて何か作業をする。安龍はそこから少し下がって、花壇に腰をかけていた。

「てゆうかさ。こんな玩具をあたしに持たせるってわけ？それパトナとしてどうよ」

「七千七百九十七円だぞ。割といい値段なんだから大切にしまえ」  
「薪割り用って今時使い道あんの？」

「私は園芸用を勧めただろ。それに薪割りはアウトドアの際に使ったりもするだろう」

「あんたって意外と庶民？」

「庶民ではない。私の古巣は自衛隊だ。フランス軍の外国人部隊にも居た。野営は何度も経験している。そういう道具は馴染みで当然だろう」

安龍美弥毘はため息をつく。白鳥に斧を取られたままなので仕方なく用意したのがホームセンターに売っている、薪割り用の斧である。七堂に渡された斧の刃を指でなぞって切れ味を確かめるが、どうも頼りない。別に斧がなければ力が使えないわけではない。むしろ、実態の武器を持たない分力は自在に使えるのだが、あまりにも力が莫大であるため実態の武器の耐性を計算に入れたほうが制御しやすい。しかし、この武器はあまりにも不恰好だ。薪割り用の斧を振り回す悪魔なんて、白鳥が聞いたら腹を抱えて笑うだろう。

「まだかかるの？」

「ここから四十階の特別フロア直通のエレベータがある。セキュリティも表とは比べものにならないくらい頑丈なのさ。少し待ちたまえ」

あ、そう。安龍は冷めた声で言った。

「一応言っとくけど、早くしないと私も危ないのよ。もうバレてるみたいだし」

(まあ、二日も電話無視してりゃそりゃバレるわね)

安龍はつまらなそうに携帯の画面を見る。着信履歴がたまりっぱなし。大半は『ババア』と記された上野木紗智子からの電話だったが、一回たりとも出なかった。この裏切り行為は十中八九バレているだろう。時刻は午後七時四十分だった。七堂の話ではエンジェルプランの準備にはまだ時間がかかるとの話だったが、そろそろ白鳥たちも動き出すだろう。

彼らの邪魔が入る前に片付けたい。こんなところで油を売っている暇はあまりないのだ。

「どいて」

安龍は斧を地面について立ち上がった。そして七堂の元へ行くと、押しのけて斧を構える。

「おいおい、もう少し慎重に」

「うるさい」

安龍は軽く斧を扉に叩きつけた。周囲に豪風が吹き荒れる。幅三十センチはあるう、特殊合金の扉は無残に砕け散った。通常兵器ではありえない破壊力だ。

「ちっ、」

あまり手に馴染んでいない。やはり使い勝手は最悪だった。

「さっさとして」

安龍はためらうことなく、突き進む。七堂はニヤリ笑って安龍のあとをついて行く。

少女はもう叫んでなかった。胸が小刻みに上下するだけで、さきまであれだけ暴れていたというのに、その力も尽きたのか静かに横たわっている。額の汗は尋常ではない。髪の毛がべっとりへばりついて。苦しそうな表情をしている。

「Now Loading...  
\*\*\*\*\*  
- - - - - / 74%」

墨江を載せたタクシーはY・NET本社ビル前に到着した。つきました。運転手の言葉と共に車は減速する。墨江はゲートを一瞥した。バーが降りている。おそらく、警備員が居るだろう。ここで降りても突破できない。墨江は息を飲んだ。そして運転席に乗り出して、



「そのまま突っ込め！」

と脅した。手に持っているのは改造モデルガンだ。途中、ヤクザ御用達の店で買い求めた、違法なシロモノだった。

運転手はぎよっとする。

「こ、殺されたくなければそのまま行け！」

運転手は引きつる。アクセルを全開にして車は、バーを突ききりY・NET敷地へ。

・なんて事ができるわけがない・

実際は、タクシーを『Y・NETコーポレーション本社ビル』と書かれ看板の前で立ち往生をしていた。手にはなんの役に立つのか、コンビニで買った弁当とコーヒー、そしてマヨネーズの入った白い袋を持っているだけだ。

ビルはかなり高層だった。それだけで物々しさと威圧感を与える。怪しまれないよう、歩行者を装って歩きながら様子を確認した。正面玄関はまだ明るい。この分だと職員はまだいる様子だ。どうやって侵入しようか。悩んだが、ゲートの監視員はいなかった。

墨江は植木を見を隠しながら、ゆっくり、慎重に敷地へ侵入した。ゲートから正面玄関まではかなり距離があった。帰宅途中の社員がちらほら歩いている。どうしようか。ここから、は隠れていけないぞ。墨江は向かってくる社員を一瞥する。きちんとスーツを着ている社員もいれば、ワイシャツとスラックスという割とラフな格好の社員もいた。

(そつだ。ここは堂々と弁当を買って戻ってきた社員のふりをしよう)

そう思い墨江は堂々と、ロビーに向かって歩きだした。途中すれ違つたたびに心臓の激しく鼓動する。額に嫌な汗が滲んだ。

「爆発だって、例のテロ事件と関係があるのかな」

「うそ、コワイ」

そんな話し声が聞こえる。あたりを見渡すと、正面玄関から東へ外れた場所に警備員らしき男の姿を数人確認した。どうやらそのおかげでゲートが無人だったらしい。  
(なんだか知らねえけど、ラッキーだ)

墨江は堂々とロビーに入った。受付の女性に気づかれた。やはり『和』のTシャツは目立ちすぎた。せめてYシャツを着ていればよかったのあがと墨江はため息を付いた。  
変に怪しまれて警備員を呼ばれてえもまずい、仕方なく受付に向かった。

「えっと、パパのご飯持ってきたんだけど」

(しまった、いい年してパパなんて不自然過ぎる。)

「はいっ？」

「だからお父さんの晩飯を持ってきたんだよ」

(いや、ここはオヤジっていうべきだったんじゃ。クソッ！父親居ねーから分からねえ！！)

「あの、どちらの部署の？」

受付の女性は思っきり怪しい視線を向けている。

「アハハハッ」

墨江はちらり後方を確認する。警備員の男がこちらに走ってきた。墨江は走りだす。警備員の男が飛び込んでくる。ヤバイ。このままでは捕まる。殴りかかる警備員の攻撃を間髪かわず。とっさにコンビニ弁当を警備員の顔めがけて投げつけた。思いつきり熱くしてもらったのだ。一溜まりもないだろう。警備員は悶え苦しむ。その隙に拳銃を奪い取った。

飛びかかるうとした社員や他の警備員を銃で威嚇しながら墨江は後退りする。そして、非常階段の扉の向こうに消えた。

- そんなうまくいくわけがない -

「離せ！離せこのやろう！」

駆けつけてきた警備員と社員にあっさり取り押さえられた。墨江は床に倒された。

「あいつを返せ！この悪徳企業！！」

逃れようと必死で抵抗する。だが数人がかりで抑えつけられてはど  
うあがいても無駄だった。

「ID止められたぐらいでアイツを見捨てると思っているのか！社長を呼べ！あのクソ甘に悪事を暴いてやる！！」

ゴホッ！無駄な抵抗をやめない墨江に、男の蹴りが襲う。脇腹を  
思いつきり蹴られた。墨江は身悶えする。糞ッ！結局暴力で抑えつ  
けられるのか。なんて世の中だ。糞つたれ！

一発食らっただけで死ぬほど苦しい。漫画のヒーロならこれくら  
へでもないはずだ。主人公ならこんなのヘッチャラのはずだ。だが  
現実には違った。取り押さえられ腕をねじられ、男の体重で抑えつ  
られ、拳句に蹴られる。それだけでなにひとつできない。

・ こんなの嘘だ。こんなの悪い妄想だ ・

そう思ったかった。けれどもこれ現実だった。

「なんだこいつ」「IDを停止者でしょう。時々いるんですよ、  
こういう馬鹿」「警察に連絡を入れましょう」「それまでどうしま  
しょうか」「倉庫にでも入れておけ」

社員や警備員は口々に話す。声が遠のく。

「糞ッ！現実なんてやつぱりウンコタレだ……」

視界が濡れる。こんなところで終わるのか。何も出来ず、結局な  
んの意味もなく、ただ虚しいだけ。墨江はほとほと現実に嫌気が刺  
した。

湾岸高速道路を猛スピードで駆け抜ける。時速は150kmは軽  
く超える。車と車の間を駆け抜け、至る所に設置された検問所は僅  
かな隙間を塗って強引に突破してゆく。

けたたましいサイレンを鳴らしながらパトカーが追ってくる。管理局も出勤しているだろう。容赦なく銃を発砲してくるが白鳥には全く通じない。

「次のインターを降りて下さい。このあたりのはずです」

「よっしゃッ！」

白鳥は自転車の前輪を持ち上げる。前を走る車をジャンプ台に、空高く舞い上がった。博士はそんなことお構いなしにずっとキーボードを叩き続けた。

高速を飛び降りた自転車は歩道へ着地。速度を落とすことなく真っ直ぐ突き進む。

「どういうこと？」

妙舞は親指の爪を噛んだ。職員が見せたタブレット端末には市内のデータセンター稼働率が示された画面が表示されている。その稼働率が半分以下になっているのだ。

「湾岸西、本町、東部市場、第一から第五まですべて破壊されました。これで我社の稼働率は50%を切ります」

「襲撃者は何者？」

「それが、監視カメラにも映らないものすごいスピードでゲートを突破し、物の数分でデータセンターのコアを破壊されたので全く捕捉できていないのです」

「もういいわ下がってなさい」

妙舞は鬼の形相で睨みつけ言い放つ。職員の男は声を震わせ逃げ帰っていった。

（こんなことができるのは……）

妙舞は不敵な笑みを浮かべた。

「いいわ、あなたが出てくるならこちらも本気よ」

「かわなみ河南取締役。一般ロビーから連絡が」

「なんなのこんな時に」

モニター前の白衣の男が告げた。一般社員のことにかまっている暇などないというの居いちいちそんな報告してくるな。妙舞は手を払って合図したが、それよりも早く白衣の御男がモニターの映像を切り替えた。写っていたのはあの少年だった。妙舞はニヤリ笑う。「ちよつと行ってくるわ。ロードが終わるまでに戻ってくるから作業を続けておきなさい」

「は、はい」

妙舞は踵を鳴らして歩く。不気味な笑みを浮かべながら毒色の唇を指でなぞった。

「Now Loading・・・\*\*\*\*\*」  
- - / 88% 「

上野木紗智子かみのぎは浜辺に居た。右手薙刀、左手に大幣を構え、臨戦態勢を整える。

五十メートルほど先に二つのシルエツトが現れる。ひとつは若い男、だが歳はわからない。色素が抜けた白髪、唇元にピアスを複数。顔半分を覆った前髪が陰鬱な印象を与える。

もう一方は、化物。男より少し後ろにだらしなく両手をぶら下げ、同じく色素の二桁神を伸ばし放題にして、顔を覆っているのだが、上野木かみのぎはそれを見ただけですぐに悟った。

「なるほど、土蜘蛛ですか。人の肉を食らう蜘蛛妖怪。その属性を最大限に発揮するため、体の組織を手を加えたと。正気の沙汰とは思えませんね」

「さすがだな。ブラックリストに乗るだけのことはある」  
若い男は冷めた声で言う。

「自己紹介でもしましょう。私は白鳥大社しらとりたいしやの巫女長みこにして - 「上野木かみが大幣を大きく振るう。」

「白鳥の祭神より、眷属たる龍神を授けられた - 「竜巻が生じる。風が砂を舞い上げ、視界を遮った。」

「霊能力者！上野木紗智子かみのぎ！！」上野木は薙刀を差し出し一気にかけ出す。

対して、若い男は「ハツ蜘蛛だ」とけ短く答え、右手を上げる。その右手は人間のものではない。メタルで覆われた、ロボットの手だった。

「三ツ蜘蛛」

その合図と共に、今度は後ろの化物が唾を吐く。

ツバはまたたく間に広がり蜘蛛の巣を描いた。

上野木かみのぎが薙刀を振るう。

「お生憎、神社の蜘蛛の巣鳥は私の仕事ですから！！」

薙刀にこびりついた蜘蛛の巣を気合だけではじく。

ドン、ドン、ドドッ！！

手榴弾が投げ込まれるよ、浜辺に蜘蛛の巣の爆弾が降り注ぐ。

(いちいち相手にしてたら、きりがない)

「顕現せよ我が白鳥の青龍！！我が剣となり、我が宿敵を駆逐したまえ！！」

直後、青い光の柱が現れる。それがすぐ光の粒となって、形を変え龍を描いた。

「おかしな方法で得た妖怪の力と、正統に神より託された正統な眷属のちから、どちらが上か思い知れ！！」

エレベータを降りると、少年は警備員に連行されていた。ロビーは騒然としたまっすぐ、妙舞は手元の携帯を確認する。ID番号の下に「墨江紫音(22)」と表示されていた。間違いなく彼だった。忠告を無視して乗り込んでくるなんてなかなか面白い。妙舞は口元を緩める。

「離せ！あの便秘女呼べ！俺はあいつに話があるんだ！」

墨江は性懲りも無く叫んでいる。二人がかりで抱えられた少年は引きずられてゆく。その隣にはベテラン社員の男が呆れた顔で立っていた。

カンッ！妙舞は床にかかとを思いっきり叩きつけた。ざわつくロビーが沈黙する。

「便秘女って誰のことかしら」

「お前は！」

墨江の視線が妙舞を捕らえる。妙舞は腕を組んだままかかとを鳴らし、ゆっくり近づいた。警備員達は静止したまま動かない。

「河南取締役」

近くにいた社員が言う

「あとはこちらで引き受けるわ」

「しかし、取締役」

「我社は市の管理業務を請け負っているわ。管理業務には警察権も含まれている。私が取り調べをして処分するからあなたたちは下がりなさい」

パン、パンツ！妙舞は手を叩いて合図する。

「さつさと持ち場に戻りなさい」

ロビーでやじうまとかした社員に向けて告げる。墨江はまるで威嚇する動物のように妙舞を鋭い視線で捉える。

「ぼうや。そんなに警戒しなくても大丈夫よ」

「あの子を返せ！」

「頭が悪いのね。おとなしくしていれば、金だって使い放題。三日後にはIDには回復するっていうのに」

「冗談じゃね！自分のIDじゃねえと財産になるものは買えないんだ！三日くらい遊んでもわりに合うか！」

ほどいてやりなさい。そう言っつて妙舞は警備員達から墨江を解放する。それと同時に彼の腕をつかんだ。

「付いてきなさい」

妙舞は墨江をつかんだままエレベータへと向かう。墨江は抵抗しなかった。

エレベータの扉が閉まる。妙舞は携帯を操作する。エレベータはゆっくり加速した。

白鳥朱雀、沢野秀和基を乗せた自転車はY・NET本社ビルの聳える一角にたどり着いた。

途中、市内五ヶ所、32施設のデータセンターを物理的に破壊した。今頃Y・NET本社は騒然としているだろう。脳天気な市長庁舎も日本政府もさすがにこれだけ騒動を起こせば気づかないはずもない。今頃、情報収集に躍起になっているところだろう。



自転車「ぼるしえ」は正面玄関には向かわない。塀を軽々飛び越えて、敷地へ。そしてそのまま、ビルの壁を登ってゆく。

「博士、大丈夫か？」

「まあ、ちよつとやりにくいですが問題ありません」

垂直になつても沢野少年は淡々とキーボードを叩き続けた。白鳥はニヤリと笑いながら自転車をこぐ。

「しかし……これは作風を崩壊しているのでは？」

「何をのたまうか。これはそういうお話やる」

ビルの壁を垂直に自転車は登ってゆく。もはやギャグマンガのワンシーンとかした晋遊舎に気づくものは誰一人居ない。セキユリテイも警備員も全く役に立たない。それが神、白鳥朱雀であった。

墨江紫音は妙舞と共にエレベータに居た。この女は得体のしれない。どんな力を持っていて何を企んでいるのか。全くわからない。

もつとも、霊的な力を持つていたとして、ただの素人でしか無い墨江にはその力を知るすべはないのだが。

「しかし、あなたは本当にバカね。来たところで、なにひとつできないのに」

「俺、現実と妄想の区別がつかない人間なんだよ。だから今の俺はヒーローだ。主人公だ。そう妄想してる」

「自我が薄いよね。ヒーロー気取りをすることで自分の価値を見出そうとする。愚かね」

「俺にとつては現実なんて出来損ないの神の妄想でしかない。俺の妄想こそリアルだ。だから俺の妄想をリアルに押し付けてやる」

墨江は話をしながらポケットに手をつまむ。予めセットしたボイスレコーダ機能を起動させた。

（これで、こいつの悪事を世間に公表してやる）

とても幼稚な発想だった。そんな簡単な話ではない。そんな次元はとつくに超えているだが、だからといって墨江にはどうしもうもない。これが、自分にできる唯一の選択肢なのだ。

「あいつは無事なんだろうな！」

「生命に関しては無事ね。それにしてもよほどあの小娘にご就寝のようだけど。あんなのが好みなわけ。ロリコンってやつかしら」

「うるさい！お前らがあの少女をさらって悪事を働いているのはわかっているんだ」

「あなたは本当に面白いわ」

妙舞はキツイ瞳を墨江に向けた。墨江は睨みつける。

「念の為に行っておくけど、そんなもの録音したところで無意味よ。あなたがここから生きて帰らなければ」

墨江はゾツとする。殺されるか。手足がガクガク震える。

「彼女は大成功だったわ。それまで四十四人試したけど、どれも三日と持たなかったわ。だから私はあえて彼女を逃したのよ。そしてたらあなたとくっついてくれて。嬉しい誤算だったは。おかげで計画は大成功。感謝すべきね」

「なんだと！」

「人のアイデンティティでは意外の脆いのよ。ただ記憶を消し去ったただけで、自我は簡単に崩れる。その隙間に天使の精霊をねじ込むのだけど、自我を弱めたせいですぐに自殺するのよ。だから私はあえて逃した。そして恐怖心を与える。そうすることで死から逃れようとする本能が刺激され自殺を防止する。十日もしたら十分定着すると見越していたけど。あなたは彼女の支えになったのね。そのおかげでうまく定着してくれた」

「貴様！」

墨江は思っきり掴みかかった。だが妙舞は軽くいなしで、墨江の腕をひねる。床にひれ伏

「そう、そしてその支えへし折る。その絶望の力はこの世をも破壊する荒ましいものよ」

エレベータが止まる。扉が開いた。

「このフロアは特別社員しか入れないわ。特別なキーがないと表には通じない。あなたを殺してやつても良かったけど、時間も人員もないわ。だから無駄にあかくチャンスを上げる。せいぜいあがけば

いいわ。この世にはどうにもならないことがあるって」

妙舞は墨江をはじめ飛ばした。墨江はエレベータの外へ出てしま  
う。扉が閉まる。妙舞は不敵な笑みを浮かべ消えてゆく。

「待て！」

遅かった。扉は固く閉じて開かない。エレベータのボタンを押す。  
しかし反応はなかった。

放り出されたのは広いがらんと何も置かれないフロアだった。完  
全に閉じ込められた。

薄暗い廊下に安龍美弥毘あんりゆつみやびと七堂幸しちだうしゆんはいた。

「ハッハッハッハッ！どうした、そんなことでは狩りにもならんぞ  
！！！」

七堂はためらうことなく引き金を引く。黒い警備服の男達は一步、  
二歩と下がりながら、自動小銃を乱射する。

「ちよつと、キャラ崩壊してんじやない？」

「戦場の高揚ってやつだよ。君もわかるだろう」

「こなげコ相手に興奮するほど、私、変態じゃないから」

まあ、そう言っつな。七堂は警備員に向けて容赦なく光線銃を発す  
る。

「つか、セキユリテイっなんて何も無いじゃない」

「そう思っつかい」

「まさかこのザコどもが？」

「そのとおりだよ。機械を扱う企業だからこそ機械の欠点を知って  
いる。故に侵入者を実力で排除すべくこいつらを配置しているらし  
いが、私達ほどの敵襲は想定しなかったらしい」

はっ、安龍はますます呆れた。

「あんたってやっぱり小物ね」

「ついたぞ」銃弾を浴びせ実力で開け放ったドアの向うには、コン

ピュータの大きなモニタが置かれ、その中央部には歯医者で座るような大きな椅子が置かれている。モニタの前に白衣を着た男達が居たが、全員地を流して倒れていた。

「さてと、我々も仕事にとりかかるとするか」

墨江は周囲を見渡した。白い壁と窓だけの空間だった。

壁づたいに歩きまわった。出入口はない。途方にくれる。だが一箇所だけ電子ロックのスリットが備え付けられている場所を発見した。観葉植物の後ろに、殆ど目立たない場所に備え付けられていた。「糞ッ！」

電子ロックでどうしようもない。だが扉を叩くと簡単に開いた。誰かが先を越したらしい。

中へ一步踏み出す。階段があつた。太い円柱に巻き付くよう、上へ伸びた螺旋階段だ。

「そろそろ、四十五階だとおもいますが」

「おう、ほなしっかり捕まれや！」

白鳥は急ブレーキをかける。自転車は後輪だけを持ち上げ水平に。そして窓ガラスが一瞬にして粉碎され、自転車はその中へ突っ込んだ。

墨江は階段を駆け上がる。一つ階を上がって、扉が見えた。そこを開いてみる。しかし薄暗い通路に続くだけだった。扉を閉めてまた階段を登った、

バギンツッ！とその時、何かが聞こえた。

「銃声……！」

畜生！墨江は逃げ出したくなる衝動を抑え、階段を駆け上がる。すると、黒い人影が。しかし、それが襲ってくることはない。なぜなら皆、血を流して階段に横たわっているからだ。

「なんだ……これは……」

墨江の言葉を失う。不気味に横たわる死体を目の雨に足がすくん

だ。

妙舞は微笑む。汗だくになって横たわる少女の隣で、なんとも言えぬ高揚感に浸っていた。

「Now Loading . . . \* \* \* \* \*」

\* \* \* / 99%」

「Complete . . . \* \* \* \* \*」

\* \* / 100%」

準備は完成した。あとは最後の仕上げを実行するだけだ。いよいよ始まる。

「さ、教祖の元へ持ってゆくわよ」

白衣の男達が担架に少女を移す。担架は扉の闇へと消えてゆく。

妙舞は携帯を手取る。数回コールした後、スピーカー越しに声がしたのを確認して言う。

「教祖、準備が整いました」

「ヒヒヒヒッ！」金色の屏風を背にして教祖は不気味に笑う。

「いよいよ始まる。我が祝福の時」教祖は手元に浮かんだ、ホログラムのキーボードを叩く。

目の前には天井から吊るされた、あの少女がいる。

「じつこうッ！」

教祖がエンターキーを叩く。すると少女の周りに光の帯が。窓のない空間に凸ぞ風が吹き荒れる。そして、黒く長い髪は銀色に光り輝き、少女は静かにまぶたを開く。

青い瞳、こぼれ落ちる血の涙。

銀色の髪をして、青い瞳から血の涙を流すあの子の姿。強烈なイメージが飛び込んできた。

それと同時に、全身を指すような冷たい感じ。この世のすべてに絶望し、この世界すべてを消し去りたいとさえ思うようなとてつもない苦しみ、悲しみ、怒りそんな感情が心に直接届く。そんな感覚に見舞われる。

全身に寒気が走る。ゾツとする感覚が襲う。墨江は拳を強く握る。「待つてろ！今すぐ行く！」

『タス…テケ…』

声がある。脳に直接響く声だった。かすかだった。よく集中しないと聞こえない。そんな小さな声だ。

体力は既に限界だった。一階のロビーで受けたダメージはかなり大きい。蹴られた脇腹がをさすりながら、棒のように重い足を引きずりながら、白一色の螺旋階段を駆け上がる。

嫌な予感がする。とても苦しそうなあの子の姿が脳裏をよぎる。

墨江はより強く拳を握る。

『タ……スケ……』

階を登るごとに声は大きくなる。少女を感じさせる冷たい気配も強くなる。墨江はコインを握った。

(もっと上の階か)

指で弾いてコインを投げ、クルクルと回転して落ちてくるコインをキャッチする。

”表”

根拠はないが墨江は最上階を目指すことにした。

「時間がない。手短に済ませよう」七堂は、血を流して倒れる白衣の男を足蹴りにして払いのけると、モニターの前に座り、キーボードを叩き始めた。

「君はその椅子に座りたまえ」

「やなかこつた。手錠とか、付いてるし、こういうプレイは趣味じゃないし」

「変なことはしないさ。君の能力をコピーするだけだ。そうして一度このマシンにダウンロードしないと私の体ヘインストールできないだろう」

ふん、安龍は鼻を鳴らして、歯医者椅子に腰をおろした。

「君の能力を手にいれれば、私はあのゲスな教祖を殺し、この会社を掌握する。そして、あとはエンジェルプロジェクトを引継ぎ完成させれば私の望みは叶う」

と、その時、先ほど彼女たちが入ってきた扉とは反対がわの扉が開いた。

「横取りとは感心しないわね。七堂調査役」

そこにいたのは見た目は二十代後半くらいに見えなくはないが、もつと年上だろう。

釣り上がった目に、赤いシャドーを入れた、黒いスーツの女。わざとらしくヒールを鳴らして近づいてくる。モデルのように腰を当てスタイルの良さを自慢しているのが、とても鼻につく。安龍は思った。しかし体の方は、意識せずとも勝手に手が胸元へ向かう。

「妙舞か」

七堂は女を知っているようだ。

「そんなに気にしなくてもいいのよ、そのうち立派になるわ。なんなら手伝ってもらえば？その男に」

「よ、余計なお世話よ!!!」安龍は斧を構える。七堂も光線銃を構える。

「米軍が開発した霊体兵器？何処で手に入れたの？」妙舞は七堂に問う。

「傭兵時代の古い友人から頂いた。取締役退任の餞としてやるう」  
そう言つて七堂は引き金を引いた。

しかし妙舞は全く臆することなく片手で光線を握りつぶした。

「なつ、」

言葉を発したのは安龍だった。あれは霊気の創りだすエネルギー波のだ。それを片手で潰すということは、それなりの力を持っている。霊能力者か。それとも人間とは異なる靈魂を宿した、妖怪か。

(違う。これは……)

「あら、気づいた？でもあなたも似たようなものを知っているでしょう？」

「さあね？あんたじゃあたしには勝てないと思うけど」

安龍を中心に風の渦が現れた。同時に安龍の瞳が真っ赤な地獄色に染まる。斧を構え、一気に振り下ろす。

「やめろ！機械が壊れる！」

七堂が叫ぶ。しかしその前に安龍は地面を蹴つて飛んだ。蹴つた場所のタイルは見事に陥没し、脱落した。

ザンツ！衝撃波が走る。歯医者椅子、倒れた白衣の男、モニタやコンピュータ、その他電子機器、部屋中のものが一気に吹っ飛ばさる。だが妙舞はその斬撃を受け止めた。

ズズズズズ！靴をすりながら、壁際へ追いやられる妙舞。安龍はすかさず二発目を食らわせようと、大きく斧を振るつた。

「さすがね。パワーでは勝てないみたいね。私もこの姿じゃ本領を發揮できないし」

妙舞はそう言つと、体を落として、斧を避ける。そしてしゃがんだ格好のまま横から足蹴りを食らわせ、飛び上がった避ける安龍のすきを突いて、扉の前へ。

「残念だけど、要件は済んだわ。あなたが壊してくれたおかげで」



空気の塊が襲う。

「また会いましょう、オチビちゃん」

安龍は一瞬目をつむったが、それでも襲い掛かろうとした。だがすでに女は消えていた。

「全く、後先か考えずに派手にやりやがって。やはり子供だなお前は」

七堂はたれた前髪を掻き上げる。

「まあいいさ、オリジナルスクリプトと設計図は手に入れた。面倒だが一から作りなおせばお前の力をいただくことは可能さ」

そう言っつて小さなメモリーカードをポケットに入れる

「グハッ」

その瞬間、七堂は苦悶の表情を浮かべた。口から、鏢と共に血が飛び出る。七堂はそのまま崩れ落ちる。

「残念だけど利害関係終了。あんたとのコンビもここまで」

安龍が打ったのだ。斧の柄を脇腹におもいつき叩きつけた。不意打ちを食らった七堂は為す術もなく倒れるしかなかった。

「案外子供じゃなかったりして」

安龍は冷酷な笑みを浮かべ、七堂の胸ポケットからメモリーカードを取り出した。

「悪魔つて、人を騙すのが得意だからさ。まあ、少しは期待したけどね。天使の力を使ってあいつを殺し、契約を破棄してやるのも悪くなかったけど。あんた余程の小物ね」

「なる……ほど……、さすがは……元00特務のリーダーだ」

「あいつの指示は装置の破壊とスクリプトの回収だから、これで私の任務は終了。あんたとの利害関係もここまでだわ。

「まあここまで付き合ってくれたお礼として、殺すのは辞めておいてあげる」

感謝しな。安龍はそう吐き捨て、部屋をあとにした。

「素晴……しい……、ますます惚れたよ……悪魔……」

七堂の視界がぼやける。やがて焦点は合わなくなりブラックアウトした。

上野木紗智子かみのぎは気合を集中。敵の攻撃を気配だけで察知し、薙刀で払いのけ、交わしながら、目をつむったまま、小さな声でつぶやくよう唱える。

「高天原に坐し坐して天と地に御働きを現し給う龍王は大宇宙根元の御祖の御使いにして一切を産み一切を育て……」

（気を集中させて、龍神の神気を体に流しこむ！）

「萬物を御支配あらせ給う王神なれば……」

三ツ蜘蛛の放つ攻撃は容赦なく上野木かみのぎを襲う。左手に持ち替えた薙刀は、それらすべてを斬捨て、その間も呪文を唱えながら、大幣を振るって儀式を続ける。

「三ツ蜘蛛、攻撃が単純すぎる。もう少し困ってやれ」

八ツ蜘蛛は、メタル製のアームの指を虫の触覚のように小刻みに動かす。それに合わせ、ニメートルの身長を誇る化物、三ツ蜘蛛は地面を蹴って大きく飛び上がり、上野木かみのぎの元へ一直線。飛び上がった三ツ蜘蛛は次々に口から蜘蛛の巣を吐く。撒き散らされた蜘蛛の巣は上野木脳国かみのぎを封じるよう四方囲み、粉塵を上げて爆発する。

「ちっ！」

上野木かみのぎが一步飛んで後ろに下がる。しかしそこには小柄な汚れ白髪をした八ツ蜘蛛が待ち構えていた。

「しまった！」

上野木かみのぎが視線を捉えたとき、三ツ蜘蛛はアームから蜘蛛の糸を飛ばしていた。はとつさに薙刀を振るって防御を試みるが、蜘蛛の糸は上野木かみのぎの頭を捉え、全身を拘束した。全身に悪寒が走る。気持ち悪い。全身が舐めまわされるようなおぞましい感覚が皮膚を伝わり、戦意を喪失させ恐怖させる。

もごもごと絡みついた糸を払いのけようとする上野木かみのぎに、三ツ蜘蛛

蛛のはなった爆弾のような蜘蛛の糸が襲いかかる。八ツ蜘蛛がゆつくりと近づいてくる。爆弾糸は一直線。更にそれを応用化物の三ツ蜘蛛が飛びかかってくる。

ザンっ！上野木はかろうじてほどけた右腕を振るって薙刀をアーチエリーのように投げはなった。爆弾糸は轟音を立て白い光を放ち爆発する。

その僅かなすきについて絡まった蜘蛛の糸を解く。

「気持ち悪ったらありやしない」

大幣についた糸を払いのけ、改儀式を再開する。体中がベトベトだ。せめて手だけでも洗いたいが今はそんなことをしている暇はない。

（お願い！うまく言って！）

龍召喚は高度な霊気操縦と、集中力が居る。普段でさえ顕現させるのはかなりの時間と集中が居るというのに、この状況では難易度は格段に上がる。

（あなたとは三年前になるけど、ここで出てくれないならパートナ―解消よ）

「正確には、私の前に姿を表してくれたのは去年だったけど」

ひたいに汗がにじむ。懇親の祈りを込めて、呪文を唱える。

「……六根の内に念じ申す大願を成就なさしめ給へとかしこみかしこみもおす恐み恐み白す！！」

海の上に青白い光の柱ができた。直後、その光の柱は小さな粒となつて龍の姿に変わる。

（やった！）

三回やって一階出来ればいいほうだが、なんとか成功した。これで形勢逆転できる。上野木は力を込めて大幣を振るう

「さあ、我が白鳥の青龍！我が剣となり、我が盾となり、この世に災いをなす、我が宿敵を打ち倒せ！！」

「くだらん」

八ツ蜘蛛が冷めた声で言う。メタルのアームの指を動かし、三ツ蜘蛛に指示を送る。

三ツ蜘蛛はギョロリと目を見開き、光の粒へ蜘蛛の巣を放った。

「えっ?」

直後、海の上の出現した龍が姿を消した。

「あれ、どうなったの?」

龍はすぐに姿を表した。だが、上野木の周りをつねうね廻って、蜘蛛の巣の攻撃を交わすだけ。

「ちよつと、どうしたのよ」

「はあ? 用もないのに起こされたせいで眠たい?」

上野木の脳裏に

「よしマリアンヌ、そつち行つたぞ。よし、よしよしよし」

と、ボールを遠くに投げとってこさせるあれをやっている白鳥朱雀しろとりしらすの姿が描かれる。

(あのバカ神!)

「わかつた、白鳥の神様には後できつく言っておくから」

なに遊んでんだ。八ツ蜘蛛が冷めた声で言う。

三ツ蜘蛛が跳びかかるよう迫ってくる。

「今はそんな事言ってる場合じゃないの。お願いだから協力して!」

上野木は飛びながら攻撃を交わす。

「あとで、ちゃんとお供えするから」

「かっぱえびせんだけ? うん、わかつたちゃんと買ってくる」

龍は機嫌を直したようだ。すつきりと心が晴れるような神気を上野木に注ぎ込む。

「さあ、さつさと終わらせましょう! 尺の都合もあることですし!」

上野木は大幣を振るう!

「この剣は邪に染まり、悪事をなして人々を苦しめる悪神隣果てた

黒邪龍を殺すための一撃！！その昔、神に協力した青龍によって生み出された」

「龍が龍を打つために創り上げた奥義！龍殺剣！！」

上野木は大幣を両手で握りしめ、太刀のように奮った。すると、大幣の周りに巨大な、幅一メートル、長さ五メートルくらいの剣のような模様が浮かび上がり、それを蜘蛛めがけて一気に叩きつける。直後爆発のような轟音になる。そして青白い閃光が走り、視界を遮った。

「やったか！」

上野木の体がよろめいた。砂浜に膝をついたが、大幣を杖にしてかろうじて倒れることを防いだ。

しかし……。爆風による粉塵が晴れ視界が戻ると、二体の蜘蛛は健全な状態で立っていた。

「よくも」

八ツ蜘蛛が珍しく感情を顕にした。よく見ると、三ツ蜘蛛の手が地面に落ちていた。

「なっ！」

三ツ蜘蛛は落ちたうでを拾い上げた。そして、その切断面を口から吐いた糸でくつつけたのだ。上野木は啞然とした。

「そんなの反則じゃないッ！」

上野木の口元からドロリとした液体が流れる。口の中にさびた血の味が広がる。

「やはり、いくら龍の力を借りてるとはいえ、私は……ただの人間でしかない……」

「三ツ蜘蛛」八ツ蜘蛛がアームを動かす。三ツ蜘蛛が飛び上がって蜘蛛の糸を吐く。薙刀はさっき飛ばしてしまったためもう武器はない。

「パートナーは傷だらけだっていうのに、あなたは命令するだけなんて」

上野木は全身の力を集中させる。

「卑怯よ！」

八ツ蜘蛛は鼻で笑った。代わりはまだたくさんあると、当然の事のように言った。

「だとすればここであなたを倒しておかないとね」

（絶対打つなって言われてたけど……）

かみのぎ 上野木は大幣を太刀のように構える。

（仮に打たなきゃならないとしても……）

はあああああっー！

「絶対に一回しかやるなって。それ以上やったら死ぬって！！」

かみのぎ 上野木は全身の力を振り絞って放つ地面を蹴り、天高く飛び上がる。

最後の一撃、りゆうきつけん 龍殺剣！

剣は三ツ蜘蛛に一直線、その体をまっぶたつに切り裂いた。

「なっ！！」

八ツ蜘蛛が、焦りの声を上げる。

「やられたか」

バタリ。砂浜に人が落ちて倒れた。

うっっ……

かみのぎ 上野木の視界がぼやける。浜辺を打つ波の音だけが響く。

（ははは……まだまだ未熟ね。青龍様……、ごめんなさい。お供え

できな……く……）

かみのぎ 上野木は目を閉じた。静かに、眠るように。

## 行間二

助けて。誰か助けて！お願い！助けて！！

何かが入ってくる。何かが襲ってくる。怖い。痛い。苦しい。とても怖い！！

イヤ！辞めて！お願い！

もうヤメテ！！！！

だめ。これ以上はだめ。お願い！入って来ないで！！

パリンッ！

何かが壊れた。砕けたガラスが、闇の底へ落ちてゆく。

壊れた。壊れ落ちた。

完全に、壊れた。

もういい。もう、どうでもいい。

だれも、助けてくれない。

だれもわたしの声を聞いてくれない。

もういい。

ホントに……

もういい……

全部……壊れてしまえ。

こんなセカイいらない。

辛いことしか無い。

悲しい事しか無い。

苦しいことしか無い。

こんなセカイ…… 壊してやる。



その光の矢はビルの天井を貫いた。雲を割、夜空を引き裂き、次元の壁を突き抜ける。

天を貫く光の槍は瞬く間に膨張し、それを中心に、同心円状に、青白い光の波紋が広がってゆく。時間にしておよそ0.00005秒。瞬間という時間の内に全世界を覆い尽くした。

特別市全域を覆う、薄暗いガラスのような壁が、そこだけ切り取り、別の空間へと移転させた。だが同時にセカイは閉じた。そして静止した。

街を歩く人も、帰宅途中の会社員も、予備校帰りの学生も、少年、少女、大人、子供、街中の人々が時間が止まったように静止した。

市内に爆風が吹き荒れた。結界が貼られなければ人も木々も車も看板も電車もバスも皆、吹き飛ばばされていただろう。

その凄まじい霊気は、神の結界の壁を超えて世界各地で観測された。

モニターを激しく揺らす霊気に世界各国の研究者たちがどよめいた。

今、何処で、何が起きているのか、誰にもわからなかった。

その五分ほど前である。

墨江紫音すみえしおんは階段を駆け駆け上がった。無我夢中だった。体力は限界だった。

「ここか」

螺旋階段が終わる。最上階にたどり着いた。教室ほど広さの踊り

場の向う、白一色の鋼鉄の扉が見えた。墨江は駆け寄ってノブを握った。しかし開かなかった。

「クソッ！開かねえ！！」

引き返そうとした。だがその時

「助けて！！」

今までもないはつきりとした声が聞こえた。

墨江紫苑は体当たりをする。ドアはびくともしない。無理もない。木製の扉ならいざしらず、鋼鉄の扉だ。白塗りの扉はまるで固く閉ざしたままだ。

「現実リアルの糞つたれ！！」

無我夢中の体当たりを繰り返す。何度もぶつかり肩が痛む。

「そうだ、さっき下で倒れてたやつ」

そう思い立って、墨江は引き返そうとした。

その時だった。死角なつて気づかなかったが、もう一つの扉が開いた。

人影だ。いや違う。墨江は凍りついた。人の形をしているものの、皆、透明だった。

何だこいつら。ゾンビのようにぞろぞろと、ふらふら歩きながら近づいてくる。五人、六人……、いや十数人。大人の男、中年の女性、学生の少年、老人などさまざまな人を型どった気味の悪い透明なそれはゆっくり墨江に襲いかかる。

墨江は手に下げたコンビニの白い袋から缶コーヒを取り出して投げた。

「なんだと！」

当たったはずなのにすり抜けて床に転がる。

「なんなんだこいつら！！」

「なにやってんのよ」

「ゴスロリ？」

あんりゆうみやび安龍美弥毘あだった。黒いゴスロリのドレスを見にまとい、斧を携

えているが、前に見た時より小さくなっていた。なぜここに居るのか、墨江にはわからなかった。だがそんなことを考えている余裕はない。ゾンビは一斉に襲ってくる。地面を蹴り宙に浮いたそれは滑るようにまっすぐ墨江に突進してきた。

墨江は思わず床に伏せる。

ツァンツ！

かすったような、けれども空気を切り裂くような衝撃波が走った。

透明なゾンビはひとつ残らずバツサリまっふたつに切り裂かれた。「ゴーストスク립トよ。地縛霊とか浮遊霊とかをコンピューターで補完して再現させるの。あいつを狩るのが本職だけど、あれたぶん信者のじゃない？普通は死人の霊魂を使うんだけどさ」

「なんだよそれ」

「ああ、また罪を犯したわ。切つてからわかったけど感染した一般市民も混じってたみたいだし、でもあいつら全員廃人コース確定だから」

ゾツとする発言だった。けれども安龍はうつむいた。なぜかとても辛そうに見えた。

「つか、なんであんたがこんなところにいるわけ？」

「そういうお前こそ」

安龍はゆっくりりと、墨江の隣を通り過ぎ扉の方へ向かう。

「どいててくれる？邪魔だから」

そう言って安龍は斧を振り上げた。だがその瞬間、扉をすり抜けて、先ほどのゴーストスク립トが迫ってきた。安龍は飛んで後ろへ下がる。

「しつこいな。雑魚が」

安龍は改めて斧を振るおうとした。その瞬間だった。ゴーストスク립トが溶けた。空間に同化して雲散霧消。同時、何かが走った。安龍は瞬時に察知してそれをおので叩き割った。同時、墨江はわか

らなかったが、とてつもない衝撃波が走った。また同時、空間は切り取られ結界の中へ。

間一髪、斧で切られた、ほんの僅かな隙間に難を逃れたらしい。

墨江は安龍に腕を掴まれたまま壁と彼女の間板挟みになっていた。「なんだ今の？」

こんな状況でそんな場合ではないが彼女の小さな胸が顔に当たっていた。それに気づいて、墨江は動揺する。安龍の鼓動が聞こえる。とても早い。彼女の腕が震えていた。

安龍がその場にうずくまった。

ゲホッ。

口から血を吐いた。

「オイ!どうした!？」

「大丈夫。ちよつとあいつの靈氣に反応しただけ。悪魔と天使じゃ相性が悪いから」

「博士!もう限界や!」

「もう少しです!」

Y・NET本社ビル、中央制御室で沢野秀和基、白鳥朱雀は各々の役割に全力を尽くす。

無数に並べられたサーバーの間で、沢野秀和基はノートパソコンのキーボードを高速タイプする。メタルラックに積まれたサーバーコンピュータのアクセスランプは点灯したままだ。対してモニターのウィンドウは瞬き程の速さで次々と高速に現れる。

沢野秀和基は人間業とは思えないとんでもないスピード出高速タイプする。額に汗がにじむ。少年は必死だった。それでも足止めが限界。それが自分に出来る最大限の抵抗だった。

一方白鳥朱雀は、沢野秀和基の後頭部に右手を当てたまま動かない。もう片方の手は空をつかむよう、手を開いてあげたままだ。その手からはおびただしい青白い稲妻が走っている。全身に汗をか

く。額に浮き出た血管が今にも切れそうだ。それくらい力を使っていた。

神である白鳥ですらこんなに全力でなければ止めることができない。そんな恐ろしい力だ。

「終わりました。これで信者と切断されました。市民も信者もこれ外に出れません。しかし天使とコンピュータの接続は未だですが」

「そつちはもう無理や。あいつとダイレクトに接続されてる」

「そんな馬鹿な。ノイマン型コンピュータは人工言語は理解できても、自然言語は理解出来ないはずです！」

「天使スベツクや。天使が相互翻訳して、相互補完関係を構築してる。今のあいつは世界最大級のコンピュータの演算能力を手に入れた最悪の墮天使や」

「どうすればいいんですか！」

白鳥は沢野秀和基から手を話す。上げた左腕もおろし、天井を見上げた。

「神のみぞ知る……って言いたいところやけど、俺もこの展開はさすがに想定外や」

「そ、それよりどうしてあんた動けるわけ？」

「はっ？お前が助けてくれたんだろ？」

「勘違いしないで。そうじゃなくて、結界が貼られたのにどうして凡人のあんたがその中で動けるのかって聞いているのよ」

「知るかよ、んなこと。それよりあいつを助けに行かなきゃ」

ビルが揺れた。足も元がぐらつく。墨江はなんとか倒れないように踏ん張った

揺れが止んで、墨江は扉へ一直線かけ出す。だが安龍が腕を引っ張って引き止めた。

「帰りなさい。あんなザコ相手に何もできないあんたなんて邪魔なだけ」

「待ってくれ！ここにはあいつが居るんだ！」

「知ってるわ。さつきから聞こえてるし。つか、誰かに助けを乞うなんて笑えるわ。もう助からないけどね」

「待ってくれ！あいつを助けたいんだ！」

「無理」

「頼む！お願いだ！」

「あんたに何ができるの？あれはもう、あんたの知っているあいつじゃない。ただ破壊を望むだけの、破壊神よ。壊さないとセカイを一瞬のうちに葬り去るわ」

「そ、そんな……」

「セカイを救うには、あいつを消すしかない。跡形もなくね」

まあ、悪魔が言うのもなんだけどさ。安龍は小さくつぶやいた。

墨江は床に崩れる。そしてひれ伏して、土下座の格好をする。

「頼む！何でもする！お願いだ！だからあいつを助けてくれ！頼む！」

「なんのそれ。キモッ」

「ああ分かってる。キモイだろう。無様だろう。カッコ悪いだろう。往生際悪いだろう。馬鹿だろう。どうしようもないほど情けないだろう」

墨江はブツブツと言う。まるで自分にいいか聞かすよう、小さな声で言う。

「それでも……。俺はあいつを助けたんだ。どんなことをしてもいい。どんな犠牲を払ってもいい。あいつを助けられないんなら、セカイ一つくれてやってもいい！いやくれてやる！俺にとつてあいつの居ないセカイは意味が無いんだ！頼む！」

「はあ？なにそれ？悪いけどあなたの勝手な願望に付き合ってる暇ないんですけど」

「妄想だよ」

墨江は短く告げる。

「俺さ、お前に襲われて、あいつと逃げて、神社で助けてもらってから。ちよつと思つたんだよ。女の子を助けたヒーローみたいで、まるで物語の主役みたいでカッコイイって少し思つたんだよ。それで浮かれた。でも違つた。馬鹿だつた。現実はそのじゃなかつた。ID停止されて、どうしようもなくなつて、俺は心底現実に失望したよ。だから俺は現実を捨てたんだ。完全に失望して、絶望して、もうどうでも良くなつた。だから、俺は妄想したんだ。あいつを必ず連れて帰るって。そのためにここに来た」

「だから何？あたしにあんたの妄想に付き合えとでも？つか、支離滅裂だし」

「そつだよ」

「馬鹿じゃない」

「分かつてる！」

墨江は顔を上げる。そして涙をぬぐい、立ち上がる。

「それでも、俺は妄想を突き通すしかないんだ。どうしてもやらなきゃいけないんだ。そうじゃなきゃ、俺はこんどこそこの世に完全に絶望する！セカイを壊してやりたいと思う。頼む！協力してくれ

！あいつを助けて連れて帰る！それは俺にとっての唯一の目的なんだ！俺が、俺であるための！俺が存在する価値を証明する、最後の手段なんだ！」

安龍は困惑した。どうして？なんで？なぜ？そんなのおかしいじゃない！そんなはずない。いくらこのバカがお人好しでもありえない。自分を全部なげうつてまで他人を助けたいと思う。それが理解できなかった。けれども思った。ほんの少し、こいつの妄想に付き合ってやりたい。そして、それが現実に叶うところを見てみたい。なぜなら、そんなふうには赤の他人を救いたい、そう思う馬鹿な人間がまだこの世には一人くらい居るって、それを信じてみたかったからだ。それはうちなる願望だった。安そのことに美弥毘自身は気づかない。けれども、胸のもやもやとなつて、彼女にほんの少しの妄想を抱かせた。

「方法、あるけど」

安龍は静かに告げる。墨江はうつむいた顔を上げた。

「悪魔との契約。あんたが、あたしの罪を肩代わりすることになる。あたしが犯した、この世の罪を、あんたがかぶることになる。それでもよければ」

墨江は一步踏み出す。そして安龍の両手を握って優しく言った。

「どうせ俺には何の価値もない。このまま消えてしまっても文句はねえんだ。だから、俺は何だつて受ける！」

「呪いを受ければ幸福は来ない。生きても死んでも地獄しかないのよー」

「でもいい。お前が協力してくれるなら。俺は何だつてする」

「そう、でも始めに言つとく。あたしが協力したからつて助けられるとは限らない」

「それでも俺は、それに賭ける」

とても穏やかな表情だった。とてもしずかで、落ち着いていて、



まるで神のように澄み切った心をしていた。白鳥とは違う、別の意味でとても温かい、そんな心を感じた。

「目を瞑って」

安龍は澄み切った声で言った。墨江は少し困惑した。けれども彼女に従う事にした。

「悪魔と契約した者が救われることはない。それを重々承知のことね」

「ああ」

墨江は短く告げる。後悔などない。ここで何もできないくらいなら死んだほうがまだ。仮に死ぬにしても、無駄に戦って無駄に犬死にしたい。心のそこからそう思った。

安龍が一步近づく。顔が接近する。安龍うは背伸びする。頬の温かく柔らかい感触が、墨江の肩に当たる。柔らかい息が首筋をなでる。墨江は動揺した。

安龍は瞳を閉じた。そして墨江の首筋に噛み付いた。首筋に歯型をつける。未だやまない。墨江は声を殺し耐える。口の中に生ぬるく錆びた血の味が広がった。

「約束よ。必ず助けなさい。さもないと地獄に叩きこむから」  
耳元で囁く。そして安龍はゆっくり、墨江から離れた。

墨江は首筋をさすった。少し痛い。指には赤血がべっとりくっついていた。

安龍が扉の前に立つ。そして斧を構える。

「なあお前……」

「何？ やっぱやめとく？」

「あの花束お前だろ。お前は悪魔でも心はちゃんと人間だ。俺はそう思う」

ふっ、安龍は鼻で笑った。

「開いたか！」

鋼鉄の扉は大きく破壊され、床に横たわっていた。墨江は駆け出す。

「助けに来たぞ！」

墨江は扉の中へ一歩。

「待って！確かめもせず！！！」

ギンツ！

何かが飛んできた。それは小さな透明な四角形だ。だがすぐに大きく膨れ上がり、三メートル四方の塊となって襲ってくる。まるでバリアのような、アクリル板のような、そんな透明な塊が、もうスピードで飛んで来るのだ。安龍すかさず斧を構えそれをなぎ払った。ガラスの破片のように散らばる残骸は床に落ちる前に消える。

（あんなまともにも食らったら死ぬ！！）墨江が尻餅をついて、何とか立ち上がるうとしている間にも、安龍は斧を振り、その塊をなぎ倒しながらすこしずつ前に進む。

「ったく。ずいぶん豪勢な出迎えのこと！」

だあああッ！安龍は今まで以上に強い力出斧を振るった。豪風が吹き荒れ、墨江は吹き飛ばされないよう身をかがめる。連続で飛んでくる、透明な板は一瞬にして破壊された。

恐ろしいほどのパワーだ。墨江は思った。

攻撃が一旦止まる。ようやく視界の先が見えた。部屋と表現するにはあまりにも広い。ビルの面積全部を使用して、パーティションが一切存在しない空間。床は青白く光っている。四十センチ四方のタイル張りの床にはコンピュータの回路のよう、透明な線がいくつもはしっていて、その道を通るよう、光点が行き交う。天井も高い。おそらく五階分はあるだろう。いったい晩のためにこんな空間が必要なのか。

墨江は空間の向こうに目をやる。直後、驚愕した。あまりの光景に、言葉を失う。  
そこにいたのは……

天井から吊るされた鎖に両手でぶら下げ、うつむきあの少女。ただし、墨江の知る彼女ではない。体の鱗部を真っ白な光で包み込み、背中からは巨大な銀色の翼が禍々しく生え、白銀の髪が宙を舞う、そんな彼女だった。

その後ろには無数のウィンドウが高速で現れ、目視出来ぬ程の速さで文字数列の羅列が流れゆく、そして隣には、白髪染の伸ばしきった紙をした、やせ細った髭面の男が、白目を貧向いて下をだらりのばし、口からよだれを出して倒れていた。教祖だった。この事件の首謀者にして、倒すべき敵が、何故か意識を失って倒れていた。

「セカイはすべてを失う。全てを失うセカイは破滅し、滅び消えてゆく」

『壊れる。そして消える』

頭に直接届く。それと同時に、少女が顔を上げた。目からは真っ赤な血の涙を流している。瞳は氷のように青白く冷たい。

墨江は心の底からショックを受けた。なんてことだ。胸が痛い。苦しい。とても悲しい。そんな感じが伝わってくる。

光の槍はが墨江の心臓一点めがけて放たれる。

「どけ！」

安龍が前にでて斧を振るう。

「ち、こんな玩具じゃ邪魔なだけ！」

安龍は斧を捨て、そして墨江の腕をつかんで飛び跳ねる。光の槍は無数に容赦なく襲う。その一つ、一つが、ビルのコンクリートをぶち抜いて夜空へ。墨江達が入ってきた扉の側はまるで大きな窓ガラスのように抜け落ち、街の夜景が見えた。

「なんでだ……」

墨江は飛びながらようやく一言発する。

「これが天使の力よ。あいつは今、ただ破壊することしか考えない厄災となった。あの教祖がぶっ倒れているのは自分の教理にあいつの破壊願望が上書きされ、自滅した。倒すべき相手はあいつ自信なのよ！」

「そんなバカな」

「それでも助けるんでしょ！あんたはその為にあたしと契約したんだから責任取りなさい！」

悪魔に諭され、墨江は我に返る。そうだ。助けるんだ。たとえ、どんな絶望的な状態でも。絶対に助ける。

着地した墨江は、下げたナイロン袋の中を確かめる。マヨネーズ

しかない。こんなもので戦えなんてギャグにしかないが、それでも墨江はただひとつの武器、マヨネーズを握りしめた。

「安龍、援護してくれ」

「どうする気？」

「あいつに、俺の妄想を叩きこんでやる！」

ふっ、安龍は笑った。もうどうなるのかしらないが、最後までこの愚か者に付き合っただろう。そう思ったのだ。

「行くぞ！」

墨江は踏み出す。たった一つ、マヨネーズだけを握りしめ、そして駆け出した。彼女の元へ、一步、二歩、三歩……。

安龍は墨江の行く手を阻む光の槍、バリアのような空気の塊、その攻撃を全てなぎ倒した。てから放たれる、この世、あの世の罪、穢、禍事を根源とする真つ黒な魔の力を武器に、墨江の行く手を阻む障害を除去しながら少しずつ前へ進む。

『セカイは終わる。セカイを無に返し、セカイを浄化する……』

『セカイを破滅に導く。破滅すべき愚かなこのセカイを……』

「何を言っただやがる！このバカヤロウ！」

少女の元へあと少し、だが墨江はまるで透明な壁に阻まれたよう、そこから一步たりとも近づけない。それでも彼は叫んだ。

「お前はいいのか！このままここで終でいいのか！」

「俺絶対そんなの認めねえぞ！絶対だ！！」

少女は宙に浮く。ほんの数センチ。そして腕を大きく前に突き出し。何かを放た。

光の玉だ。それはみるみるうちに大きくなり、直径五メートルの塊となって墨江達に襲いかかる。

安龍はそれに突進する。両手を前に付き出して、ブラックホールのような真つ黒な球体を、いやそこだけ球体に切り取られた空間を創りだす。だがそれだけでは間に合わない。彼女の背中から真つ黒

な闇の翼が描かれる。闇で描かれる悪魔の翼だ。それが激しく揺れ、残骸を蹴散らして墨江を守った。

### 天使VS悪魔

天使は破壊を望む。

悪魔は少年に託した最後の妄想にすぎり、天使に挑む。

「キヤーンッ！」

安龍が悲鳴を上げた。光の槍が無数に安龍の体に突き刺さる。大きく宙を舞、後ろへ、後ろへと飛ばされてゆく。

一瞬、時間が止まる。コマ送りのその映像のなか墨江はまだ走り続ける。

無数の槍は縦に広がって、空間を切り裂く。青白く光るタイルはバラバラに崩れ、足場を崩す。

それでも未だ進む。

十メートル

九メートル

八メートル……

「どけっ！」

安龍が斧を構えた。まるでやりを打つかのように、前へ大きく差し出してかけ出す。肩、胸、腹、足から毒々しい血を流しながらも安龍は崩れ行くタイルを蹴り、走り、そして、漆黒の槍を放った

「待て！殺すな！」

安龍の一撃は瞬く間に無数に別れ少女の翼へ。

少女の翼に無数の穴が開く。

墨江は未だ走り続ける。

七メートル

六メートル……

だが、阻まれた。空気の塊のよう何かが遮ってそれ以上進まない。さつきより少しは後退したが、その壁はまた広がり墨江は後ろへはじき飛ばす。

墨江は飛ばされ手はツツコミ、体当たりを繰り返す。端から床がどンドンくずれてゆく。

どうしてもそれ以上前へいけない。

「糞！どうすりゃいい！」

「博士危ない！」

白鳥朱雀、沢野秀和基は下の階にいただが、その衝撃波は容赦なく床を切り裂いた。

まるでケーキをカットするよう、ビルを縦に切り裂いてゆく。

ビルは大きく揺れた。沢野少年はキーボードを叩き続けた。白鳥は少年をかばう。

「スペックに差がありすぎる。相手は天使や。天使と人間でハツキング勝負しても勝ち目はない！」

「解ってます。でもいくら天使でもコンピュータを使っている以上必ずバグがあります。完璧な機会なんてありません。ですから完璧なプログラムも絶対存在しません。だからそこにつけ込めれば……」

またビルが揺れた。もう限界か、崩れる。白鳥は少年を抱え脱出の準備を整えようとした。

「ありました。ここです！」

「なに？」

白鳥は画面を確認した。無数に並ぶウィンドウの一つに表示され

たおびただしい量のコードの羅列。

「よっしゃ」

白鳥は沢野少年の手をどけ、キーボードを思いっきり叩いた。沢野少年にはそれが何を意味しているのか全くわからなかった。

白鳥はもう片方の手で携帯をいじる。そして電話をする。

「宮司みやじ！聞きこえるか！」

スピーカーにしているのだろう。太鼓を打つ音、祝詞を奏上する宮司の声が聞こえる。

『宮司、神様です』

沢野百合亜の声だ。宮司は儀式を続ける。

「今や！」

白鳥朱雀が叫ぶ

『ハアアアアッ！』宮司が気合を込めた。雷を打つような太鼓の音が反響する。

その瞬間、無数のウィンドウかが静止した。サーバーとの切断が完了した。沢野秀和基は理解した。そして額の汗を拭った。

光の攻撃はやんだ。翼も消えた。それでも少女は無言のまま冷たい瞳を開いて、銀色に光ったままだった。

あと少し、あと少しだ。ほんの少しアイツに近づいて、あいつの元へ。

だが透明な壁が墨江を阻む。それ以上どうしても進めない。まるで何もかも拒絶するような透明な壁、心の拒絶を示すような壁に墨江は阻まれ足止めされる。

墨江は思ったこの壁を突破できれば、俺の声は届く。根拠などない。けれどもそれが、まるで心の壁のように思えたからだ。ここを突破しなきゃ届かない・そう思った。

何か手はないか。壁は突っ込んだ瞬間に出現する。糞！もう少し早く走れれば、せめて滑って、突っ込んでいければ。



そう考えたとき手元を見つめた。握っているのはマヨネーズ。

(そうだ。これだ。こいつだ！)

墨江はキャップを取る。そして少女のめがけて投げつけた。

マヨネーズは空中で粉碎され床に落ちる。そこへめがけて墨江は  
一気に飛び込んだ。

墨江の靴にマヨネーズはべっとりくっついた。床から湧き出すコ  
ンピュータの冷却水と混ざり合って、墨江は滑ってゆく。

距離、

五メートル

四メートル……

墨江の脳裏に、少女と過ごしたほんの僅かな時間の思い出がフラ  
ッシュのように走る。

「続きがなくていいのか！俺たちこのままもう一緒に笑うことも  
飯食うことも、話すことも出来ねえなんて！絶対に嫌だからな！！」

墨江は思い描く、ここから手をつないで、夜の道を歩いて、電車  
に乗って、電車の長椅子に眠ったあの子が自分の肩に寄り添うその  
イメージを。

- 妄想だ -

「一緒に帰るんだ！！」

次の日「おはようございます。お腹すきました！」と朝ごはんを  
せがみ、

「何もねえから、食いに行こうか」と、近くのファーストフード点  
に一緒に行く。

そんなごくありふれた平凡な日常。

- つまらない妄想 -

「お前がこのまま、消えてしまったら、俺はどうすりゃいいんだ！」  
「お前が残したブルマと水着を抱いて！！一人泣き続けるなんて！  
俺は絶対嫌だからな！！」

三メートル

二メートル……

「頼むから！戻ってきてくれ！！」

「戻って来い！！目を覚ませ！！」

墨江は泣き叫んだ。力いっぱい、腹の底から声を振り絞って、少女に届くよう、叫んだ。

世の中、不条理だ。辛いことばっかで、ただ単に毎日を幸せに行きたい。そんな願いすら叶えてくれない。

その上なんの罪もない、なんの落ち度もない、一人の少女がこんな目に合わなきゃいけない。

そんな結末で終わるなら、

こんな現実なら……。だとしたら、俺はこんなセカイ潰してやりたい。

けれど、だけど、それでも……。

「俺は！お前と一緒に帰るんだ！」

「そんな俺の妄想を叶えてくれ！！」

墨江は突っ込む。少女の元へあとわずか。

一メートル

そして……

グサリッ！

何かが刺さった。

墨江の体を、何かが突き抜けたのだ。

実感がない。痛みもない。まるでそこだけ空洞のように、光の槍が突き抜けた。

それでも墨江は突っ込んだ。マヨネーズで滑って突っ込んでゆく。

「現実よ！少しは、俺の妄想聞きやがれ！！」

何かが落ちた。銀色に光る、小さななにか。

コインだ。五十円玉。

コインは注を舞う、くるくる、そして落ちてゆく。

”表”

墨江は少女にぶつかるとして彼女しっかりと抱きとめた。

まだ意識はあった。だから言っちゃった。

「お帰り、このは。待たせてゴメンな。さあ一緒に帰ろう、俺ん家へ」

少女の体から、光が消える。浮いた体がゆっくり落ちて墨江に抱きとめられた。

ふわり浮いた銀色の髪が黒くつややかな元の髪色に戻る。

青く冷たい瞳が閉じ、そして透明な涙を流した。

ビルが崩れる。床がとうとう、墨江と少女の周りだけになった。

彼らは倒れる。そのまま、床へ落ちてゆく。安龍美弥毘はかるうじて意識を保っていた。地面を蹴り、黒い翼で空を飛び、そして少女たちの元へ。

床へ横たわろうとする二人を、両手で抱え、地面を蹴ってよるよる飛んでゆく。

「さすがに……二人は……」

安龍の全身から血が吹き出した。意識が飛ぶ、  
(駄目だ、ごめん。あんたとの契約、果たせない……)

体がふわり宙に浮いた。温かい、やさしい、心地のよい、感覚。だれだ。知ってる、これ……

安龍は安堵した。そしてゆっくり目を閉じた。

三人は夜空を舞う。ゆっくり、ゆっくり、落ちてゆく。

墨江紫音は目を開けた。心地いい何かに包まれるそんな感覚を抱いた。

隣にはあの少女がいた。墨江は泳いで彼女の元へ、彼女は瞳をゆっくり瞼を開いた。

「紫音さん……、どうして……」

「バカヤロウ」

「どうして?」

「お前と……」

「はい……」

少女はまた瞳を閉じた。墨江も意識を失った。

深夜、崩れたY・NET本社ビル跡地。規制線を貼られた、瓦礫の中にその二人は居た。

「黒幕のお出ましか」

「あら、それはこちらのセリフじゃなくて?」

ヒールを鳴らし、モデルのような格好で立ち止まったのは妙舞<sup>みづみ</sup>だった。

「Y・NETは解散、管轄の南ブロックは別企業へ権限を移譲。そ

して、教団は壊滅……。

お前らの望み通りの展開や。これでオカルトに手を染め始めた市内企業全部に脅しをかけられるってわけや。オカルト科学は市の核たる『北ヤード』が独占し続ける」

「まあそうだけど、今回はやられたわ」

「ぬかせ」

何処に隠してあったのか日本刀を妙舞みょうぶに突きつけた。対して妙舞は銃を白鳥の脇腹に。

「さすがね、隙がないわ。やっぱりこの程度じゃあなたは殺せないのね」

「天使を暴走させ、俺ごと消し去ろうとしたか」

「あんな坊やが切り札なんてまさか思わなかったわ。さすがね」  
沈黙が数秒。二人はピクリとも動かない。

「今回の事で、特別市は自衛権の正当性を一気に強めるやろう」

白鳥は刀を引いた。妙舞みょうぶも銃をしまう。

「時期に防衛権を手に入れる。これで軍隊も自由に使えることになれば、その次はいよいよ日本政府からの独立か？」

「さあね。興味がないわ。でも、特別市という名が関するがごとく、この街に済む人間は皆自分が特別だと思っているの。そのくだらない妄想は果てしない欲望を生むわ。さて、それが何をさせるのか」

「あんな似非天使を作り出し、しかもそれを壊されん状況を作る。

お前らのやってることは神域を歪め、結界を壊し、世界を破壊することや」

「ふふふツ、人間がいつまでも神の下にいたいと思っただら大間違いよ。いずれ人は神にたどり着く。ならばこそ、私達神は、更に上を、進化しなければいけないの」

白鳥は押し黙る。

「はぐれ眷属けんぞくの、腐れ稲荷いなりが」

「眷属けんぞくではなく、私達が神」

妙舞<sup>みよぶい</sup>は闇に消えた。白鳥はつぶやく。

「貴様らとの対峙も、一千年。そう簡単には決着はつかんわ……」

深夜の病室。上野木沙智子は目を覚ました。体は動かない。全身がしびれて感覚がない。

「未だ麻酔が抜けてないから」

隣に沢野百合亜が座っていた。頭がぼうつとする。視界が回転して、吐き気がして気持ちが悪い。

「何をやったのかしらないけど、全身の血管が切れ切れだったわ。後二三日は絶対安静ね」

上野木は笑った。それだけで住んだのが奇跡としか言い用がない。自分の力をはるかに超えた龍の力を使ったのだから。

「それよりあの子は一体何？浜辺で倒れるあなたの近くで、海に溺れていた白髪の少年」

（なんのこと？）上野木の声は届かない。しかし思った。あれ、おかしい。なぜハツ蜘蛛は自分を襲わなかったのか、それが不思議で不思議で仕方ない。

「兄が手当てしたんだけど、しばらくしたらいなくなったわ」

沢野の一言を聞いて、上野木は思い出す。あの化物を切った一瞬のこと。

なぜかとても寂しそうだった。悲しそうだった。

（兄さんって言ってたわね。兄弟だったのね）

（ごめんね……）

上野木は瞳を閉じた。目からこぼれ落ちた涙は頬を伝って落ちてゆく。

## 終章

目が覚めた。部屋は明るかった。もう朝か。うつろな瞳をこする。部屋の白い天井が視界に飛び込む。布団の隣においた携帯電話の時計を確認する。十二時三十五分。既に昼だ。

「ヤバイ！初日から遅刻！」墨江紫音は飛び起きた。だがすぐに思い出した。

（そっぴや、あの会社潰れたんだっけか。再就職先さがさねえとな……）」

ゆっくり膝をついて立ち上がり、台所へと向かう。冷たい水で顔を洗い、目を覚ます。

懐かしい。とても懐かしい。なぜだかそう思った。

「あれ？」

ふと疑問に思った。何かがおかしい。墨江は体中を触り、確認する。シャツをめくって、腹を目で確認する。けれども傷ひとつなかった。

「あれ、あれれっ？」

あんなにぐさり刺されたのに傷一無い。墨江は立ち上がる。部屋は何も変わっていない。

窓ガラスが割れていない。部屋は引越し当初のままだ。何一つ変りない。墨江は考える。

頭が混乱する。光の槍が胴体を貫いたのは？

- まさか、今までのすべて妄想????? -

押入れのふすまを開け放った。ブルマとスクール水着があるはずだ。銀色のスニーカーを引っ張り出し、押入れの奥を確認する。だが、それはなかった。

嘘だ。そんなはずない。全部俺の妄想？今までの全部妄想だったのか？あいつは？ゴスロリは？白鳥は？沙智子<sup>curator</sup>は？メガネボウズは？バーコードは？……細井さんは？浅香さんは？

墨江は部屋を見渡した。何の変哲もない部屋。何一つ、非常識なものが存在しない、ありふれた日常。墨江はがっくりした。けれども、少し安心している自分もいた。

首筋を触る。虫刺されのような傷跡があつた。なんだ。蚊に刺されただけか。なんだ。全部妄想か。墨江は納得した。そしてその現実を受け入れた。

それから三日経った。

墨江紫音は再就職を探す毎日だった。まだ仕事は決まらない。何一つ事件の起きない、妄想のない、日常だった。オカルトも科学も存在しない。普通の毎日だった。IDは使えた。金も少しある。のんびりしている場合ではないが、就職先を探すには十分余裕はあつた。

昼前、シャワーを浴びた。墨江はスラックス、カッターシャツに着替え面接に向かう準備をした。引き出しからシャツを取り出す。出てきたのはあの青い「和」Tシャツだった。

「うわ……」

一瞬、サイアクと思ったが、なぜだか着たくなった。墨江はそのシャツ着て、カーテンレールにかかったYシャツを手にとって羽織る。未だ少し時間がある。墨江は壁に持たれた。そして思い出す。

あの少女、ゴスロリのこと。

(でもそれは、俺の妄想だ)

墨江は目を閉じた。もう一回、あいつらに会いたいな。妄想したいな。そんなことを思いながら、コインを握る。五十円玉は何処かに行ったからもうない。だから十円玉だ。

コインを指で弾く。コインは宙を舞い回転して落ちてゆく。



ゴスンッ！コインが落ちたに落ちたにしては音が大きすぎる。もちろん、コインではない。

また音がる。もたれた壁が動いた。あれ？何だこれ。次の瞬間、壁が崩れた。そして墨江は前へ押し出された。

白い壁が崩れる。ボロボロと崩れてとなりの部屋との間に風穴を開けてしまった。

「オイ……なんだよこれ！」

「ふんッ。何よ。せつかく携帯に登録してやったのに、一回も電話してこないなんて」

ツンデレの可愛い妹みたいなセリフが聞こえた。誰だ。あれ、知ってるぞこの声。

そこにいたのはゴスロリメイド服の少女、安龍美弥毘だった。穴の間から、匍匐前進のように出てきた。斧について立ち上がる。相変わらず物騒なでかい斧だ。

「これ、返すわ。捨ててやろうと思ったけどよく考えたらあんたのじゃないし、持っても気持ち悪いだけだから」

そう言っただけで安龍うはかばんを突き出す。墨江は何がなだかよく分からなかったが、とりあえず受け取った。そして中を確認する。

ブルマの体操着とスクール水着だった……

「あれ、ええと……」

「何よさつきから幽霊でも見たような顔をして」

ピンポン。ドアフォンがる。少し戸惑っていた墨江を、言っただら？と安龍が促したので、玄関へと向かった。扉を開けた瞬間だった。

少女が、飛び込んできた。そして抱きついた。

「ただいま！紫音さん！」

「あら、ええと……、おかえり……」

少女の柔らかい温かみのある体温が伝わる。そしてふつくらとした胸があたって……なんとも言えない気持ちになる。

咳払いが聞こえた。ふしだらな墨江に、後ろにいたブロンドヘアの、TシャツとGパンというラフな格好をして、けれども両腕とも包帯を巻いた少し年上の女性、上野木沙智子かみのまゆこが横目で睨みつけた。「お、お久しぶりです。沙智子さん」

「ちょっと！名前で呼ばないですよ」

「す、すみません……沙智子さん！」

「だから名前で呼ぶなって！」

そんなやり取りをしている間も、少女はずっと抱きついたままだった。そして少し涙を流す。けれどもそれは悲しい涙ではない。暖かくてやさしい涙だ。

・どうやらもうそうではなかったらしい・

落ちたコインは”表”だった。

墨江はほつと胸を撫で下ろし、少女と上野木を部屋へ迎え入れる。さつきまでいた安龍はいなくなった。壁に開いた穴の向こうの部屋に消えたのだろう。というか、その部屋は確かオタクっぽいお兄さんでは？

「てかそれ以前に、こんな穴あけて大家さんになんて言われるか！」「と、墨江が頭を抱え、叫ぶが、少女はパチリ二重の瞳で見つめさっぱり分らないという表情をしていた。

「それやったら大丈夫や。俺は承知したで」

ベランダを窓を開けて入ってきたのは「毎度おなじみ！日本神界五本の指に入る最狂神マッドゴッド！スーザンでーすッ」という電波発言と共に体をカタカナの『ネ』のポーズをして登場したスーザンこと白鳥朱雀だ。変な格好をしている。黒っぽい修道服だが、ちよっとキツ

そつだ。(あれ何処かで見たとつな?)

「このマンシヨンは俺が買収したからこれから好きに使つてええで、家賃も免除したるし、窓ガラスも変えたから安心し」

「あの気さくなご婦人の大家さんは?」

「ああ、もつとええマンシヨンをプレゼントしたからそつちへ行つた。となりには美弥毘が住むことになるから。元の住人には下の階に行つてもらつたし、一階は『崇斬プロジェクト』の本社として使うしな」

「ちよつと!またそんな格好をして!私の修道服勝手に着ないで下さい!」

「シスターは巫女なんやろ?巫女が修道服来てどうする?」

「だから、私は巫女ですからシスターなんて呼ばないで下さい!!」  
よく分らないやり取りをする二人を尻目に、少女は少しそわそわして墨江のシャツを摘んだ。そんな様子に墨江は少女に微笑みかけて言つた。

「大丈夫。俺はずつと側にいるから」

「うん……」

「ところで少年、バイトはいらんかね?月給二十万円やで」

半ば取つ組みあいのじゃれ合いをしていた上野木は怪我のせい少し痛がつていた。その隙に、白鳥はそんな事を言つた。それで思ひ出した。

「あつ!駅前のバイト勧誘シスター!!」

「そつそつ、あれ俺」

「……。なんでそんな事してるんですか?」

「いやあ。巫女のバイトにJK(女子高生)を勧誘しようとしたんやけど、どうも引つかかりが悪くて」

という意味不明な発言をする。そりやそつだろつ。あれじゃ不審者だ。思つたがあえて言わないでおいた。

「ほれ」

白鳥が渡したのは白い封筒。墨江は中を開ける。紙が何枚か入っていた。

「学校の先生？中学校の？」

「ロリコンの君にはびつたりの仕事やる？」

「ちよつと待つて下さい！てか俺ロリコンじゃねえし！！」

と言ったところで墨江は白鳥に近づき、耳元で小さくささやく。

俺、本当は十八歳で大学も出ていませんと。しかし白鳥は、「別にええよ。俺の管理下やしたただの講師やから教員免許もいらん。教科は英語やけど中坊やから適当にやってもいけるし」と分けのわからないことを言う。墨江はゴクリつばを飲んだ。そして少女の顔を見つめる。

(俺には守らなきゃいけない奴がいる)

「あの、俺みたいなやつで務まるでしょうか？」

「務まらんかったらその時はその時や。嫌やったら別にええけど、まあ暇やつたらやつてみてくれ、今ちようど人がおらんらしいからそれに俺達は事情を知ってる」

墨江は静かに頷いた。本来ならいけない事なのかもしれない。けれどもそれを受けることにした。少なくとも、白鳥の息のかかった場所に居るほうがこの子にとって安全だ。

「さ、早く神社に戻りましょう」上野木の声に白鳥は「おう」と、一声答え玄関へ。

そして墨江に告げた。

「お前の妄想はその子の絶望を打ち砕いた。そしてセカイイを救った。花は美しくも命は短い。大切に守れ」

「ほんで後、美弥毘をよろしく頼む」

「はい」墨江は一言だけ答えた。

「そうそう。これその子のIDやから手続きしといてや」そう言つて携帯を渡された。

穏やかな風の服、昼下がりの公園。

少女は花束を置いて手を合わせた。そっと目をつむり、祈る。もう、涙は出なかった。

「なあこのは、お前これからどうする？俺は来週から学校の先生やる事になったけど……」

『このは』それが彼女の名前だ。由来は秘密にしておく。だがこの名前は墨江にとって、とても大切な名前だ。

少女は墨江に向かいに立つ。そして微笑んで言う。

「決まってるじゃないですか」

「ん？」

「わたしは紫音さんの妻ですよ」

「そうか」

墨江はにこやかに微笑んだ。少女が笑顔で言ったからだ。今はもう。悲しくない。そのことがとても嬉しかった。墨江は心の底から喜んだ。

「帰ろう」

墨江は少女の手を引いて歩いた。今日は少し涼しい、心地いい風に少女の黒髪はなびく。

「待てよ……。今なんとおっしゃった？このはさん」

「えっ？妻ですけど？」

「はい？」

と言ったところで携帯がなった。メールだった。相手は白鳥朱雀だ。アドレス交換した覚えが全くないのに何故か登録されていた。

「いい忘れたけど、墨江このはちゃんは墨江紫音君のお嫁さんて事になってます。理由は、彼女には身内がいけません。それに君のように成人しているようには全く見えない。だから十六歳で通すしかない。でも親権者が居ないと色々不便でIDも発行できないので君を親権者にする為、結婚したという事にしてます。童貞、彼女いない歴イコール年齢の君には当然結婚予定はないと思うので、不都合は

生じないと思います。それではアデュー^^スーザン。」

こうして、彼女いない歴イコール年齢、青春真っ盛り、妄想満開の少年は、

途中のプロセスを見事にすっ飛ばしていきなり嫁さん（フィアンセ）を迎えたのであった。

天使という、美しい一人の少女、このはを。

## あとがき

小説家になろうを御覧の皆様はじめまして。すーざんこと白鳥朱雀です！

じゃなくて、八紘新音です！

(ものすごく恥ずかしいHNですがそこは突っ込まないでおいで下さい)

今回はじめてラノベ、長編小説、というか小説っぽい小説に挑戦してみたのですが、なんとか最後まで無事にかき上げることができました。

書いているときはとても楽しく、それこそ寝食を忘れ仕事をほっぽり出し、執筆に勤しんだのですが、完結してみても読み返してみると色々課題も残りました。

その点についてはまた一度自分なりにまとめてみたいと思います。

この「オカルト科学の擬天使録」というちょっとヘンテコリンなタイトルの意味は「オカルトを科学する」というテーマと、オカルト科学によって生み出された「擬天使」というものを反映しているのですが、「擬天」と聖典には含まれない伝承といういみでの「儀典」をかけていたりします。

さて本作品ですが、財政破綻した日本、様々な陰謀の織り成す絶望の世界というちょっと暗い設定となっております。

神も天使も龍使いの霊能力者までいるのにどうしてこんなにくだいのでしょうか(´へ`´へ`)

また当作品の中心人物、墨江、少女、そして安龍美弥毘の三人は人間としてあるべき大切なものを失っております。墨江の場合は家族と年齢、そしてこれまでの自分。少女は記憶と名前と自分の存在証明。安龍は人間そのものを捨ててしまつて居場所がありません。

そのため彼らはいずれも現実に対して期待を持たず、妄想に逃げたり、この世を破壊してしまいたいほど絶望したり、悪行を重ねる事ばかりしてしまつたりとなんだもどかしい行動ばかりして不幸に突き進んでいつてしまいます。

そんな彼らには「希望」という言葉は存在しません。彼らにとってセカイは「絶望」に満ち溢れ手織り「希望」なんて存在しないんですね。

これは本作のテーマのつもりですが、それを意識して「絶望」という言葉は何度も出てくるのにその対義語であるべき「希望」は本文中一度も出てきません。だから、「絶望」を打ち砕くには「妄想」しかなかったんです。

「希望」がないセカイをあえて「希望」という言葉を出さない事によつて表してみました。

これ気づいてくれた方がいればその人はきつともものすごく読解力があつて、とてつもないくらい丁寧に読んでくれたのだと思います。もしいらつしやればいくら感謝しても足りません。そして一生頭が上がリません！！

こうして考えてみると「ラノベ」なのに結構「ヘビー」な内容になつてしまつたんじゃないかと……

一応自分自身としては「ヘタレ」が「セカイを左右する力を持つた少女」を救うことでセカイを守るといいうわゆる「セカイ系」を



意識して書いたつもりです。

とはいえ、主人公のヘタレ無能ぶりはちよつと……  
武器が妄想とマヨネーズだけだなんてね（笑）

そしてあのコインは一体なんなのかというと……

それは……

ええ、実は今年の六月に引越しをしまして、その時お隣さんが男  
だったことばかりして、そしてやりましたあのワンシーン！

コインを投げて~~~~~ッ！表裏！結果は”裏”事  
実もそう！！

墨江の妄想コインは実は作者自身だったのです！いつもやってい  
ます！！みなさん是非！

ちなみに、玄関開けてびっくり見知らぬ少女が一糸まとわぬ姿で  
あははハハハツつても、自分自身がやってしまった痛い妄想の一  
つだったり、そうそうあと、Y・NET社とID停止のくだり。

これは某オークションサイトの某Y　！の不誠実な対応に腹を  
立てた（まじで見に覚えがないんだよな。何度抗議しても、第四章  
の最後と同じく定型文が帰ってくるだけ、あんな会社潰れちまえ！  
”Yes or NO”！！今やりました表です！株主の皆さん  
は早めに手仕舞いを！）のでその仕返しと腹いせだったりします。

おつといけない。つつい脱線してしまいました。

ええ、まだまだ語ってみたいこともたくさんありますが、駄文は  
このへんにしておいてそろそろ失礼したいと思います。

機会があれば続編も書いてみたいですね。

ですが、同じ作品ばかり書いていると練習にはならないので一旦これはこれとしておいておいて、別のジャンルに挑戦してみたいと思います。

このサイトに多い異世界召喚とかやってみるのもいいかもしれません。もっと本格的なSFもいいですね。あるいは恋愛ものとか青春ものとか……（ピュアな心をもっていないので無理）

ええとにかく、長々と最期までお付き合いいただいた読者の方には本当に心より感謝申し上げます。

また別の機会でお会いできればその時はよろしくお願い致します。

ブルマとスク水があればフラグは必ず立つ！そして妄想とマヨネーズがあればどんな奇跡も起こせるさ！

その可能性を信じて、今日も明日も妄想しよう！コインを投げよう！！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1701w/>

---

オカルト科学の擬天使祿(ぎてんしろく)

2011年10月2日03時29分発行